

**天竜川上流域 災害教訓伝承手法  
実践の手引きと実例  
(案)**

**平成21年3月**

**天竜川上流域災害教訓伝承手法検討会**

# 天竜川上流域 災害教訓伝承手法実践の手引きと実例(案)

## <目 次>

1. はじめに .....	1
<b>1-1 災害教訓伝承の必要性、目的</b> .....	1
(1) 災害教訓伝承の現状と必要性 .....	1
(2) 天竜川上流における災害教訓伝承手法検討の取り組み .....	2
(3) 確実な災害教訓伝承のためのポイント .....	3
<b>1-2 本書（サイト）の目的と利活用</b> .....	4
(1) 本書（サイト）作成の目的 .....	4
(2) 本書（サイト）の内容及び利活用の方法 .....	4
【対象者】 .....	4
【対象地域】 .....	4
【全体構成】 .....	4
【活用上の留意点】 .....	5
2. 災害教訓伝承実施までの流れ .....	6
3. 天竜川上流域の災害履歴と教訓・伝承事例 .....	7
<b>3-1 天竜川上流域に伝わる災害教訓・伝承</b> .....	8
(1) 災害教訓・伝承の概要 .....	8
(2) 地域別の災害事象及び教訓・伝承の分布 .....	9
<b>3-2 天竜川上流域の既往災害</b> .....	19
(1) 江戸時代以前の災害 .....	20
(2) 江戸時代の災害 .....	21
(3) 明治時代の災害 .....	22
(4) 大正時代の災害 .....	26
(5) 昭和・平成の災害 .....	27
(6) その他の災害 .....	47
<b>3-3 災害体験談のヒアリング調査</b> .....	52
(1) ヒアリング調査の概要・結果 .....	52
(2) ヒアリング調査より得られた災害教訓 .....	56
<b>3-4 災害教訓伝承ツール紹介</b> .....	61
(1) 災害教訓伝承ビデオ .....	61
(2) 災害教訓伝承カルタ .....	62
(3) 災害教訓伝承データベース .....	64

(4) 語りつぐ天竜川「川の碑」 .....	66
(5) 災害教訓伝承パネル .....	67
(6) 災害おはなしマップ .....	68
<b>4. 災害教訓伝承実施の流れ .....</b>	<b>69</b>
<b>4-1 災害教訓伝承の概要 .....</b>	<b>69</b>
(1) 伝承の素材（内容） .....	69
(2) 伝承すべき相手（訴求対象） .....	70
(3) 災害教訓伝承手法のメニュー .....	70
<b>4-2 災害教訓伝承手法の企画・実施 .....</b>	<b>73</b>
(1) 伝承活動展開シナリオの検討 .....	73
(2) 個々の伝承活動の企画・設計 .....	77
(3) 平成 20 年度の伝承試行実施の実例と計画設計の手順 .....	79
<b>5. 伝承活動の有効性の確認 .....</b>	<b>88</b>
<b>5-1 有効性検証のねらい .....</b>	<b>88</b>
<b>5-2 有効性検証にあたっての基本方針 .....</b>	<b>88</b>
(1) アンケートの設計 .....	89
(2) アンケートの概要 .....	90
<b>5-3 有効性の検証 .....</b>	<b>94</b>
(1) 参加者の防災知識・行動レベル .....	95
(2) 災害教訓伝承の理解度について .....	97
(3) 訴求対象別の望ましい伝承手法について .....	98
(4) 課題の抽出 .....	101
(5) 今後の方向性について .....	103
<b>6. 継続的な活動に向けてのサポート体制 .....</b>	<b>105</b>
<b>資料編</b>	
資料-1 天竜川上流域に現存する教訓・伝承事例一覧 .....	1-1
資料-2 収集文献資料一覧 .....	2-1
資料-3 天竜川上流域の災害年表 .....	3-1
資料-4 災害体験談のヒアリング調査対象一覧 .....	4-1
資料-5 災害教訓伝承素材 .....	5-1
資料-6 伝承活動のアンケート結果 .....	6-1
資料-7 伝承手法実施例 .....	7-1
資料-8 伝承手法実施資料 .....	8-1

# 1. はじめに

## 1-1 災害教訓伝承の必要性、目的は

### (1) 災害教訓伝承の現状と必要性

天竜川上流域には、過去の災害にまつわる歴史資料、石碑・遺構、民間伝承が数多く残っている。これらの歴史資料、地物、伝承内容は、災害の脅威や対策方法を後世に伝え、豪雨災害時の地域防災力の底上げや、被害軽減に資する貴重な資源である。しかしながら、これらの資源が地域防災力の底上げに十分に活用されているとは必ずしも言えない状況にある。その問題点として以下のことが考えられる。

- ① 災害を経験したことにより得た教訓（知恵、知識）が十分に伝承されているか、また活かされているかが認識されていない。
- ② 過去の大災害等については、災害経験者の高齢化等に伴い、災害に備えるための知恵や教訓が後世に語りつがれないことが懸念される。
- ③ 地域に残存している歴史資料や石碑・遺構も、伝承の観点で要領よく整理されておらず、経年とともに散逸や風化のおそれがある。
- ④ 近年に見られる気象変動による集中豪雨など、治水事業の計画水準を超える洪水に対して、被害を軽減するためには、正しい知識に基づき、自らの身を自ら判断して守る、近くの人を助け合って守る、自助、共助による災害対応の重要性が高まっている。しかしながら、仮に災害教訓が伝承されず、自らの住む土地に対する正確な情報・理解を住民が有さない場合、災害時の避難行動や行政による災害対策活動の実施、また平常時における治水事業の実施などの面で大きな支障となることが懸念される。

以上のような問題認識から、天竜川上流域において災害教訓伝承の必要性・目的は以下のように整理される。

過去の災害にまつわる史料の散逸・風化や、災害経験者の高齢化が進行するなか、官民が適切に役割分担、連携を行いながら、地域全体として災害教訓伝承に対する取り組みを推進し、地域の自助・共助を後押ししつつ、地域防災力の向上を図ること。

## (2) 天竜川上流における災害教訓伝承手法検討の取り組み

上記の問題点をふまえ、国土交通省天竜川上流河川事務所では、平成19年度から20年度にかけて、天竜川上流域を対象に、既往災害における教訓の実用的な伝承手法の検討を行った。検討の実施にあたっては、「天竜川上流域災害教訓伝承手法検討会（座長：笹本正治信州大学教授）」（以下検討会とする）を設置し、全4回の検討会を経て災害教訓の調査、記録、伝承のあり方についての検討を行った。

検討会の全体の流れは図1に示す通り、①まず、流域内で過去に起こった災害や現存する災害教訓・伝承を文献や災害経験者へのヒアリング等を通じて掘り起こし、②調査結果を今後の伝承活動に活用できるようビデオ、カルタ等の試作品としてとりまとめた。③一方で、

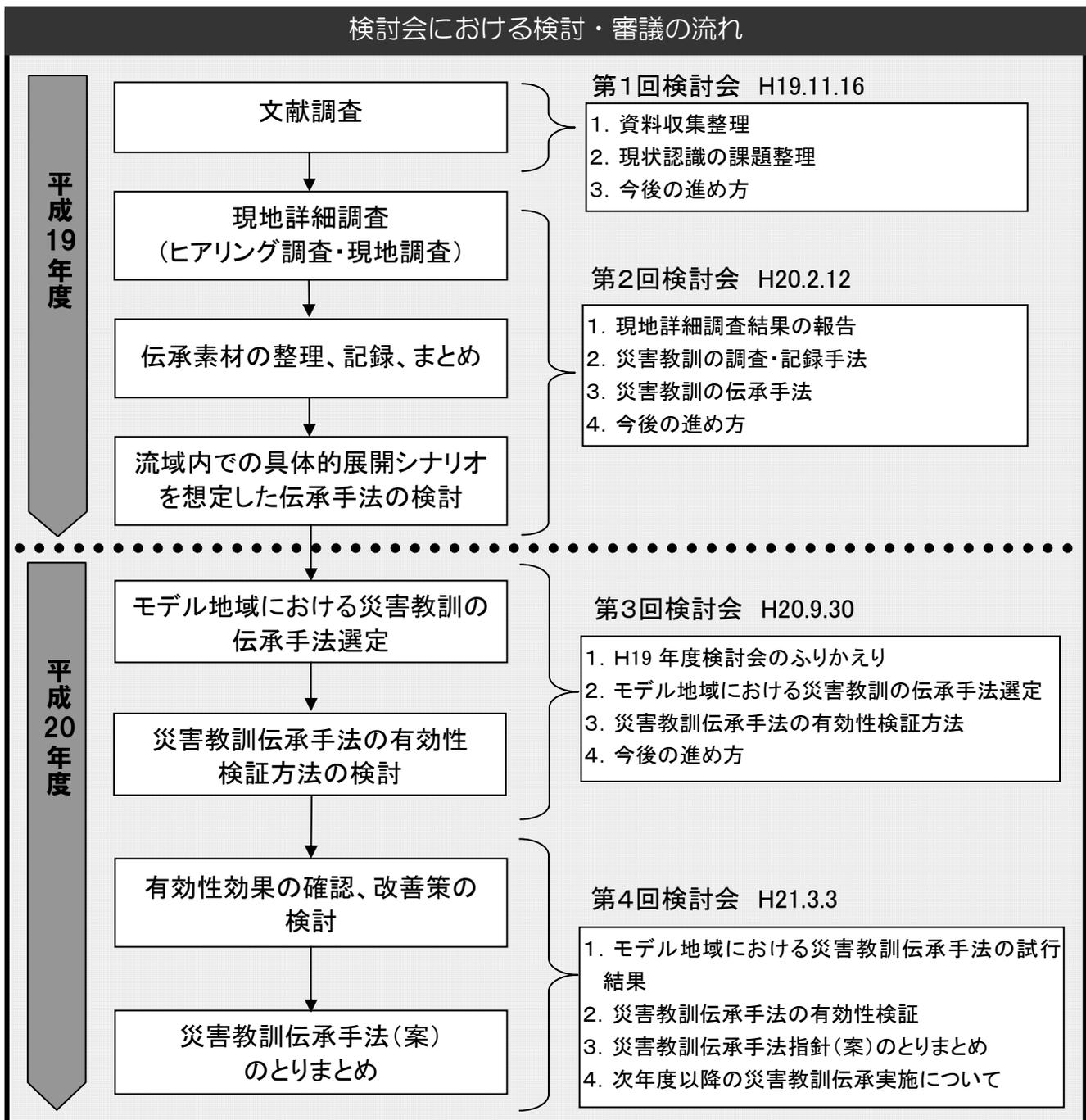


図1 検討会における検討・審議の流れ

災害教訓伝承活動を実施していく際に考慮すべき、訴求対象の考え方や伝承手法の考え方について整理した。④次に、伝承手法を実際に試行する 3 つのモデル地域を選出し、各モデル地域で行う伝承手法の企画・設計を行ったうえで、⑤合計 5 つの伝承手法を実施した。⑥実施にあたっては、参加者アンケートを実施し、その分析を通じて、個々の手法の有効性を確認するとともに、⑦今後の継続的な活動に向けた方向性に関する検討を行った。本書は、上記の検討会での取り組みをまとめたものである。

### (3) 確実な災害教訓伝承のためのポイント

今後確実な災害教訓伝承を行う上で考慮すべきポイントを以下に示す。

- ① 流域内にストックされた災害教訓を、どのようにして地域特性を的確に反映させながら伝承し、地域に定着させればよいのか
- ② 災害体験の有無、年齢、社会的な立場等の違いにより、個人には多種多様な災害に関する意識・行動があるなか、どのようにして伝承の対象者（訴求対象）の特性を捉え、どのような手法や内容であれば災害時に真に役立つ教訓として伝承されるのか

上記のポイントを考慮しながら、本書（サイト）では、実用的な伝承手法の実施方法を示す。

## 1-2 本書(サイト)の目的と利活用

### (1) 本書(サイト)作成の目的

本書(サイト)は、上述した検討会での討議内容を踏まえつつ、天竜川上流域での災害教訓伝承活動の実施成果を基に、災害教訓伝承の実施方法を「天竜川上流域 災害教訓伝承手法実践の手引きと実例(案)」としてとりまとめ、天竜川上流域で有効かつ継続的な災害教訓伝承活動の実施に資することを目的としている。なお、本書(サイト)は伝承試行結果の成果を基に作成したもので、今後災害教訓伝承を継続していく中で有効性検証を続け、より効果的な手法が見つかった段階で改訂を行い、内容をレベルアップさせていく予定である。

本書を利用し、実際に災害教訓伝承活動を行われ、手法の改善点やより有効な手法を見つめられた方は事務局までご連絡いただければ、改訂の参考にさせていただきたいと考えています。

### (2) 本書(サイト)の内容及び利活用の方法

#### 【対象者】

- 本書(サイト)は、地域の災害教訓を伝承したいと考える自治体職員、あるいは自主防災組織のリーダーや教職員など地域の防災を担う市民を対象とし、流域内に存在する災害教訓伝承や次世代に伝承していく活動の進め方を示したものである。

#### 【対象地域】

- 本書(サイト)は、今回行った天竜川上流域での活動成果をもとに取りまとめたものであり、今後、天竜川上流域で災害教訓伝承を実施する際の参考となるよう取りまとめている。ただし、災害教訓伝承活動の進め方については、他流域で実施する場合にも、参考になるものがあると考えられる。

#### 【全体構成】

- 本書(サイト)は、次の2つの内容から構成される。

#### 1) 流域に存在する災害教訓事例

- 既往災害の実態
- 流域内の災害教訓事例
- 伝承ツール

#### 2) 災害教訓伝承実施の流れ

- 個々の伝承手法の企画、実施
- 伝承活動の有効性の確認

- 災害教訓を伝承したいと考える方々の知識や経験に応じて本書(サイト)を活用してもらえよう、単に伝承手法の企画・実施についてだけでなく、その前段として今回の検討会で調査した流域の既往災害記録や災害教訓・伝承についてもとりまとめた。
- 本書(サイト)は本編と資料編に分けて構成されている。本編では今回の活動成果を概括しながら災害教訓伝承の実施方法をマニュアルとして記載しており、資料編では、より詳細な資料、データ等を記載している。



## 【活用上の留意点】

- 災害教訓伝承手法の企画・実施では、今回の資料調査、ヒアリング調査の結果や、作成した伝承ツールなどの成果を紹介しながら、各地域での計画に容易に着手できるよう留意した。
- 災害教訓を伝承する手法としては、書籍、紙芝居などの印刷物やインターネット、現地見学会や講演会などのイベント、マスメディアの活用など多様な手法があるが、本書（サイト）では、実際に目で見たり現場を歩いたりする手法の有効性や子どもたちへ災害教訓伝承の重要性など、検討会の中で出された意見等を踏まえて試行された、以下の5つの伝承手法について詳述している。



### 1) 災害教訓伝承授業

小学校の授業において、雨や災害の恐ろしさ、自分たちが災害時にできることなど考える学習活動の実施

### 2) 災害教訓伝承講座

地域の公民館活動を利用して、災害に関するお話が残る場所をめぐる災害教訓伝承講座の実施

### 3) 伝承遺構見学会

天竜川に残る土木遺構、災害記念碑、災害にまつわる言い伝えのゆかりの地など、地域に残る過去の災害の痕跡をめぐる現地見学会の実施

### 4) 災害教訓伝承パネル展

市町村が行う防災関連イベントと連動し、過去の災害や地域に伝わる災害教訓を紹介するパネル展の開催

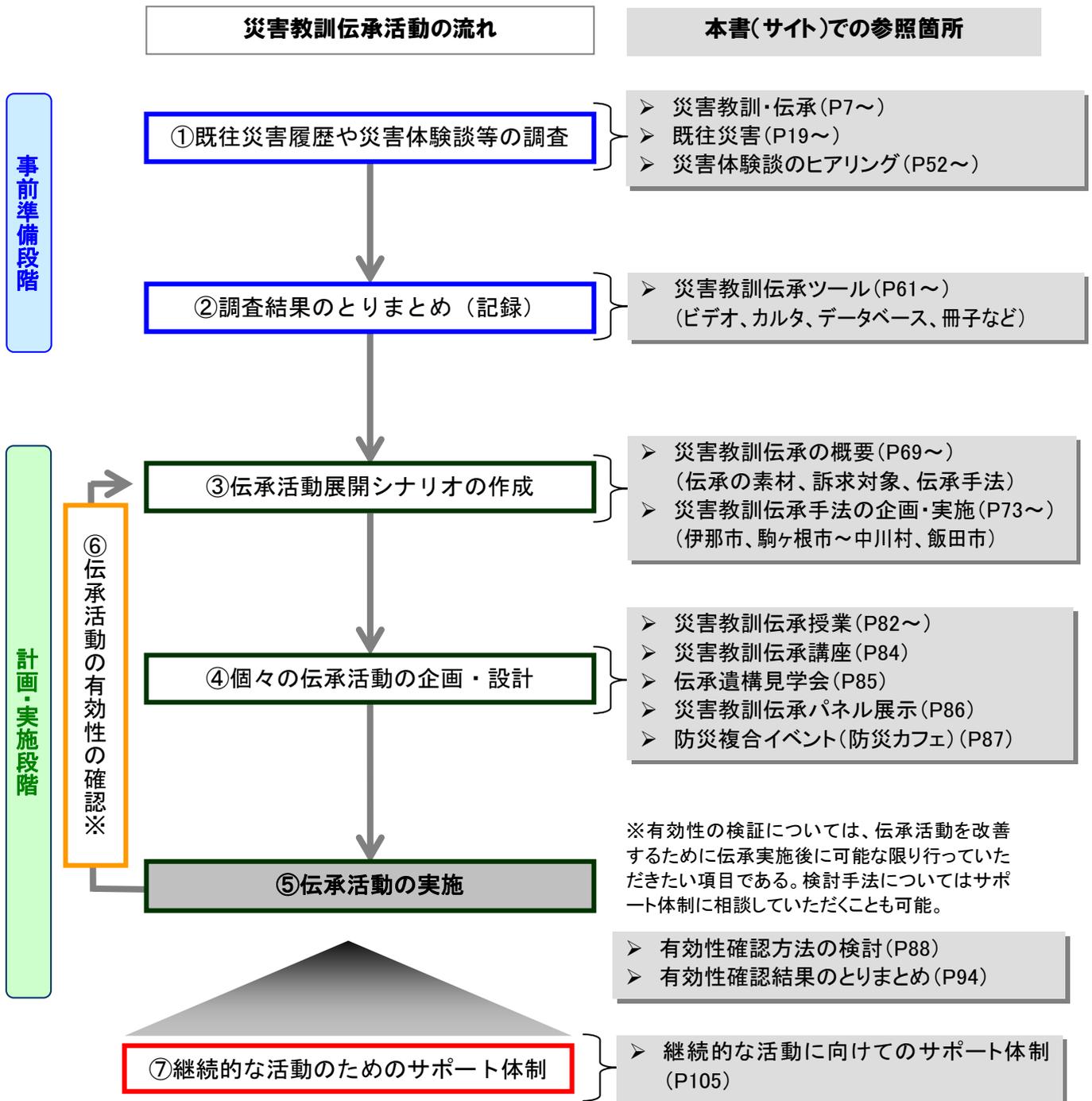
### 5) 防災カフェ

不特定多数の人々が集まる公共公益施設で、災害に興味のない人でも気軽に立ち寄れる防災イベントの実施

- 上記の手法の中には、例えば、「防災カフェ」では、防災に関する対談や災害体験談の朗読、防災カルタ・クイズ大会など、同時に複数のツールを使用しているものもある。
- 今回の活動では、個々の伝承手法の有効性を、参加者へのアンケート調査や実施主体の振り返りにより確認した。アンケート調査については、参加者の負担の軽減や回収率の向上等を考慮し、極力簡易なものとし、その中で有効性確認を試みている。調査方法や調査票の創意工夫により、本書（サイト）に記載したものと違った視点で有効性が確認できるものと思われる。

## 2. 災害教訓伝承実施までの流れ

災害履歴や教訓の掘り起こしから、それらを次世代に伝承していく一連の伝承活動の流れを下図に示す。あわせて、個々の実施内容の本書（サイト）における掲載箇所を併記する。



### 3. 天竜川上流域の災害履歴と教訓・伝承事例

本検討会の検討過程では、文献調査、ヒアリング調査、現地調査を通じて、天竜川上流域で過去に起こった災害の実績や、流域内に散在している災害教訓・伝承の調査を行った。天竜川上流域の既往災害については主な災害について詳細調査を行い、流域に存在する災害に基づく教訓・伝承については、伝承の内容を分類し、とりまとめを行った。

また既往災害及び災害教訓・伝承を地図上に整理し、地図上の主要災害箇所から特に特徴的な災害履歴の残る9地域を設定し整理を行った。

### 3-1 天竜川上流域に伝わる災害教訓・伝承

#### (1) 災害教訓・伝承の概要

天竜川上流域各地での災害教訓伝承活動の参考となるよう、特徴的な既往災害や教訓・伝承の蓄積のある主要地域9箇所の概要、各伝承内容の概要を以下に示す。整理にあたっては、伝承の内容を以下に分類し、該当する分類ごとに主な教訓・伝承事例の概要を記載した。

表 1 整理した災害教訓・伝承の分類

分類	説明
○治水・土木	・堤防を築くなど生活や産業のために水を治めること全般に関するもの（河川改修碑を含む）
○災害の事実・災害体験・得られた教訓	・災害時の状況や災害の被災体験に言及したもの。特に「教訓」は、被災体験より後世への教えを抽出したもの（災害記念碑を含む）
○信仰	・天変地異や災害を由来とする信仰、自然に対する畏怖、崇拝に関するもの
○ことわざ	・経験を通して得た生活の知恵を簡潔な言葉にまとめたもの
○文芸・民謡・詩	・和歌、短歌、川柳などの文芸作品や、地域に根ざして民衆に歌い継がれてきたもの
○民話・伝説・昔話	・自然や文化、慣習、行事などの由来を説明するもの。各土地に根をおろし、真実と受け止められ、地域に実在するモノや特定の事物に結びつけられて語られるもの ・話の内容より、①洪水 ②土砂（山崩れ/土石流）③地震 ④その他天変地異（暴風・風雨・火災・雪害等）に関連するものに細分化される。

なお、詳細な災害教訓・伝承の一覧を参考資料-1、また今回の調査において収集した文献リストを参考資料-2に掲載した。

(2) 地域別の災害事象及び教訓・伝承の分布

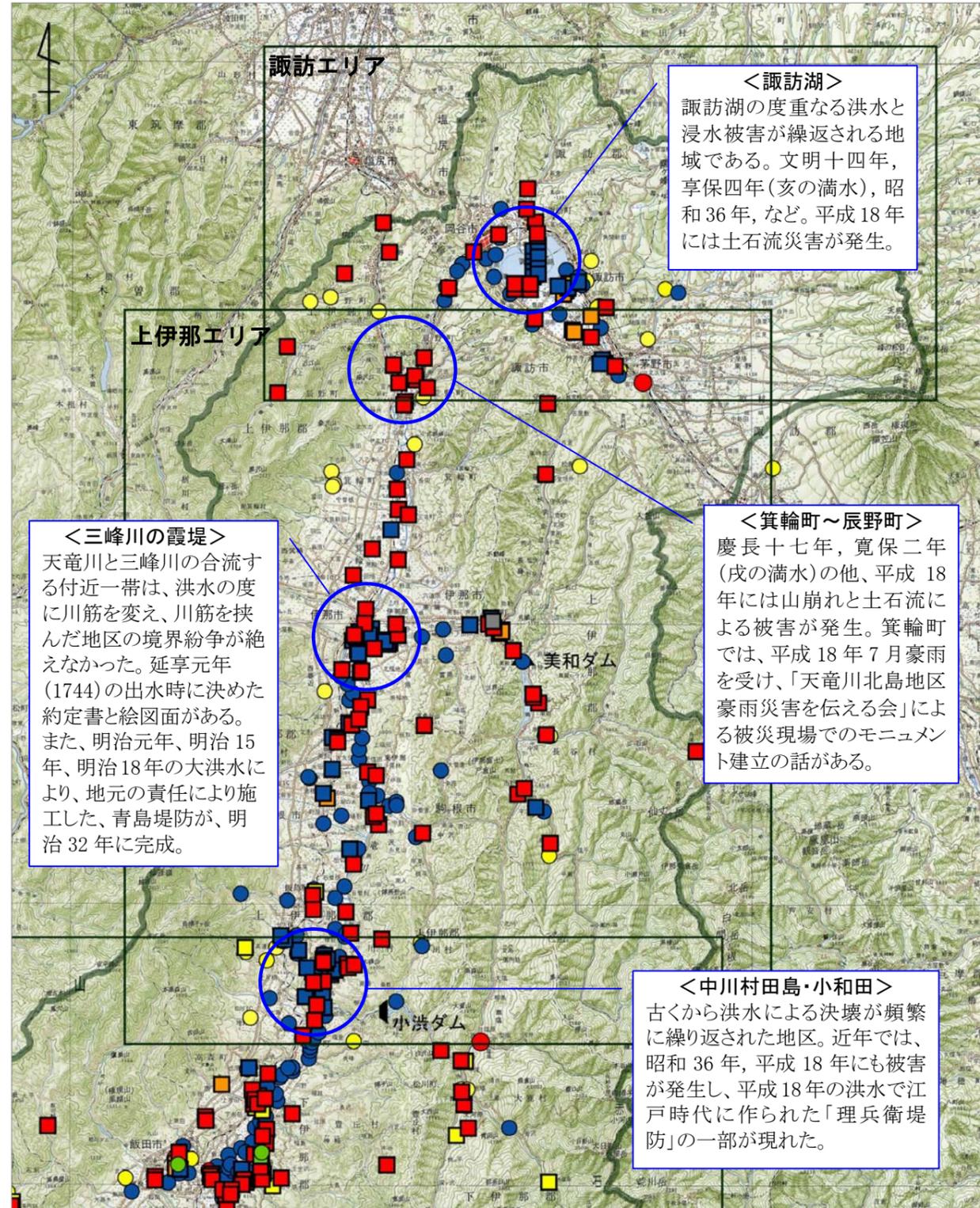


図2 災害事象及び教訓・伝承の分布図(諏訪～上伊那)

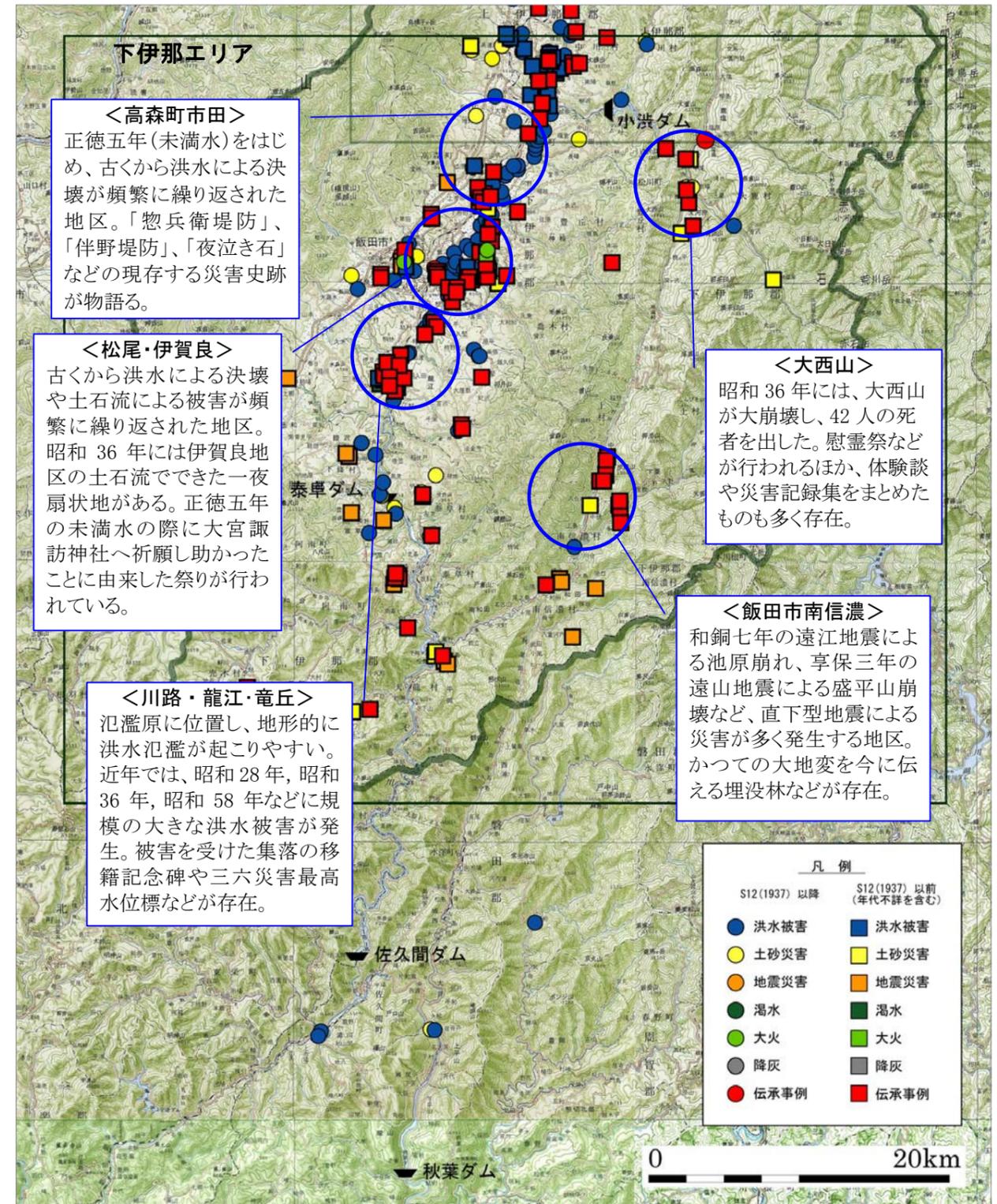


図3 災害事象及び教訓・伝承の分布図(下伊那～以南)

表 2 地域別詳細情報の整理(1/2)

	地域	災害履歴の有無						教訓伝承内容			現地	訴求対象への効果等	その他 検討を進める上で特記する事項
		36 災以前	36 災	58 災	H18 災	地震	その他	洪水	土砂	その他	史跡・施設等		
1	諏訪湖の周辺地域	諏訪湖に注ぐ流入河川や諏訪の大社に纏わる多くの貴重な伝承や地震に記録が多く残る。	36災害で最も洪水被害を受けた地域であり、記録もある。	大規模な災害の記録が多く残る。	岡谷市や辰野を中心に土石流被害が大きく被害も甚大であった。	遠山地震 東南海	浸水被害への対応や釜口水門の利活用の促進と検討。	・常官寺のお話し ・桑原城の攻防 ・坂室の赤石とおこり石 ・福次荒れ ・聞かずの神様 ・諏訪大社下社の七不思議	・しっぽのない赤いへび ・流された四王 ・鮎澤系図	諏訪大社の祭	諏訪湖	記録や史実 地域の歴史性 組織 地物 次世代の継承者 話題性	・釜口水門の変遷 ・東南海地震による地盤災害の継承 ・度重なる洪水と浸水被害 ・水利権争い
2	箕輪町～辰野町	箕輪町～辰野町では天竜川に纏わる多くの貴重な伝承や寺社、土石流の伝承が多い。	大規模な災害の記録は残っていない	大規模な災害の記録は残っていない	辰野町では小野中村や山口地区、下雨沢で水害や土砂災害が多発。箕輪町の北島堤防も決壊	特記なし	特記なし	・一本松伝説 ・辰野縁起 ・八王子神社の伝説	・蛇抜け ・蛇石 ・洞ヶ入鐘楼堂のはなし	上横川神社のお神楽	蛇石 上横川神社	記録や史実 地域の歴史性 人物 地物 話題性	・箕輪町では、「天竜川北島地区豪雨災害を伝える会」による被災現場でのモニュメント建立などの取り組み事例があり)
3	伊那市 三峰川の霞堤	天竜川や、三峰川に纏わる多くの貴重な伝承や地震に記録が大変多く残る。	36災害で最も洪水被害を受けた地域であり、記録もある。	洪水被害を受けた地域であり、記録もある	天竜川水位は36災害以降では最大である。伊那市で河川施設に複数被害あり。	高遠地震	地域の団体による積極的な三峰川へのアプローチや保全活動の取り組み	・経塚 ・般若島 ・境界紛争と見通し桜 ・草餅地蔵 ・米高岩 ・入野谷騒動 ・黒河内長者屋敷	・おや子石 ・犬石	三峰川 未来会議の積極的なとりくみ	青島堤防 高遠弁財天	記録や史実 地域の歴史性 人物 組織 地物 次世代の継承者 話題性	・霞堤(伊那市美篤) ・「北風が吹くと大水が出る」(伊那市東春近)
4	駒ヶ根市 飯島町、 中川村 田島・小和田	中川村や駒ヶ根市を中心として天竜川に纏わる多くの貴重な伝承や地震に記録が多い。	36災害で最も洪水被害を受けた地域であり、記録も豊富である	58災害で最も洪水被害を受けた地域である	天竜川水位は36災害以降では最大である。飯島町、中川村で河川施設に被害あり。	濃尾地震	天の中橋上流側の理兵衛堤防の出現	・小鍛冶の矢文 ・石神の松 ・浮島の伝説 ・鬼の島鬼の的 ・石神の松 ・戸隠山 ・隅の木 ・仏石	落石	・天女鱒 霊神	理兵衛堤防 小和田の霞堤 石神の松	記録や史実 地域の歴史性 人物 組織 地物 次世代の継承者 話題性	・古くから洪水による決壊が頻繁に繰り返された箇所 ・平成 18 年 7 月豪雨の際に、小和田地区の浸水等の被害 ・「理兵衛堤防」とそれにまつわる言い伝え ・田切地形に由来する地名「片桐」

表 2 地域別詳細情報の整理(2/2)

	地域	災害履歴の有無						教訓伝承内容			現地	訴求対象への効果等	その他 検討を進める上で特記する事項
		36 災以前	36 災	58 災	H18 災	地震	その他	洪水	土砂	その他	史跡・施設等		
5	大鹿村 大西山	大鹿村では災害に纏わる多くの貴重な伝承や地震に記録がある。	大規模な災害の記録が多く残る。未だに災害の痕跡が残る。	洪水被害を受けた地域であり、記録もある	大規模災害の記録は少なかった。	特記なし	大西山での慰霊祭	・悪い滝の主を退治した勇士 ・横山七ヶ寺の流出	・観音なぎと駒石 ・斜面を転がってきた石	36 災の体験談	大西公園	記録や史実 地域の歴史性 人物 地物 話題性	・36 年災による大崩壊
6	高森町市田、豊丘村	高森周辺では天竜川に纏わる多くの貴重な伝承や地震に記録が多い。	36 災害で最も洪水被害を受けた地域であり、記録も豊富である。	58 災害で最も洪水被害を受けた地域である。	天竜川水位は36 災害以降では最大である。高森町、豊丘村で河川災害の被害あり。	宝永地震 安政東海	特記なし	・前亡後死 三界万霊碑 ・地藏沢 ・明神様の瀬分け鎌	出砂原 夜鳴き石	大蛇が城	惣兵衛堤防	記録や史実 組織 地物 話題性	・古くから洪水による決壊が頻繁に繰り返された箇所 ・「惣兵衛堤防」、「伴野堤防」とそれにまつわる言い伝え ・「亀甲石」、「夜泣き石」、「量水標」などの史跡 ・災害に見舞われやすい地区であったことを示す地名「出砂原」
7	飯田市、松尾・伊賀良・上久堅、清内路・阿智	飯田市周辺では、天竜川に纏わる多くの貴重な伝承や地震に記録が多い。	36 災害で最も洪水被害を受けた地域であり、記録も豊富である。	58 災害で最も洪水被害を受けた地域である。	天竜川水位は36 災害以降では最大である。森町、豊丘村で河川施設に被害あり。	天正地震 宝永地震 安政東海	特記なし	・うしろ向きになった弁天様 ・地藏岩 ・池が洞の主	北原の土石流	大宮諏訪神社の式年祭	松尾弁天殿 宮神社 川原弁天 伴野堤防	記録や史実 地域の歴史性 人物 組織 地物 次世代の継承者 話題性	・古くから洪水による決壊や土石流による被害が頻繁に繰り返された箇所 ・昭和 36 年に伊賀良地区の土石流でできた一夜扇状地がある ・野底川など天竜川の支川でも大規模な被害がある ・飯田市街地での土砂災害の記録
8	川路・龍江・竜丘・下條	川路～竜江では天竜川に纏わる多くの貴重な伝承や地震に記録が多い。	36 災害で最も洪水被害を受けた地域であり、記録も豊富である。	58 災害で最も洪水被害を受けた地域である。	天竜川水位は36 災害以降では最大である。川路、下久堅での河川災害の被害あり。	慶長元年 寛永九年 寛文二年 寛文三年 宝永地震 遠山地震 安政東海	特記なし	・烏帽子岩 ・貝鞍が池の主と人柱かわりの墓石 ・尾科文吾 ・尾張対馬神社の祇園	特記なし	尾張津島神社の祇園祭	かわらんべ	記録や史実 地域の歴史性 人物 組織 地物 次世代の継承者 話題性	・天竜峡上流の氾濫原に位置し、地形的に洪水氾濫が起りやすい。 ・天竜川総合学習館かわらんべを利用した施設の活用
9	旧南信濃 旧上村	遠山川流域では天竜川に纏わる多くの貴重な伝承や地震に記録が多い。	36 災害で最も洪水被害を受けた地域であり、記録も豊富である	58 災害で最も洪水被害を受けた地域である	大規模な災害の記録は残っていない	遠見地震 遠江地震 遠山地震 関東地震	特記なし	・池城の明神様 ・中郷の流れ宮 ・夜川瀬(遠山地震での隆起)	喧嘩岩	・霜月祭り ・水神、山ノ神 ・かけ踊り	池口の埋没林	記録や史実 地域の歴史性 地物 話題性	・享保三年の盛平山の崩壊など歴史災害の記録 ・遠山郷での天明飢饉に伴う悲話や享保地震史料など ・36 年災他近年豪雨でも橋が落ちるなどの被害あり ・遠江地震による池原崩れ

表 3 伝承内容の概要(1/7)

伝承内容の分類	事例数※ (n=199)	伝承内容の概要	主な事例(番号は参考資料-2に対応)
○治水・土木	27	<p><b>■災害に挑む人々の姿を伝えるもの</b></p> <p>・先人の偉業を讃えた石碑や土木遺構、古くからの治水技術の痕跡など、不屈の精神で災害に挑んできた先人の知恵や技術の継承を今に伝えるもの</p>	<p>○天龍川改修記念碑(伊那市東春近田原)<sup>ひがしはるちかたわら</sup>【No.39】 昭和22年6月天龍川が直轄編入され、最初に着手されたところに建てられた記念碑である。</p> <p>○太田切川の川除林(駒ヶ根市下平)<sup>しもだいら</sup>【No.69】 元禄四年(1691)の五月の霖雨、六月には天龍川に洪水があり、伊那谷に大きな被害がでた。この年、太田切川と天龍川との合流点に二十数歩にわたって植林がなされた。長さ七百間・幅百間は戦後まで残存したが、現在は伐木開墾されて水田地帯に変わり、県立西駒郷ほかの施設中にわずかに松林の面影を留めている。</p> <p>○理兵衛堤防(中川村片桐田島)<sup>かたぎりたしま</sup>【No.77】 田島村の名主松村理兵衛忠欣<sup>ただよし</sup>が、度重なる天龍川の水害から田島を護るために私財をなげうち、尾張から石工を呼んで堤防工事を始めた。工事中に何度も水害に見舞われ、至難を極めたが、理兵衛の孫の三代に渡り58年間と3万両もの莫大な費用をかけて堤防が完成した。平成18年7月豪雨の際、洪水の跡に理兵衛堤防の石積が発見されている。</p>
	1	<p><b>■災害に対する知恵を忘れてしまう人々の姿を伝えるもの</b></p> <p>・過去の経験から培った知恵が継承されなかった故に、時を経て再度災害に見舞われたエピソードを示すもの</p>	<p>○伊久間水除土手(喬木村伊久間)<sup>いくま</sup>【No.103】 長さ1,700m、高さ1m余りの掘割で、伊久間の人たちが集団で中世末期頃からつくりはじめたという。人家の多いあたりには水除土手は二重に造られている。しかし災害が遠のくとその効得を忘れがちになり、掘割を埋めたり物を置いたり、いざらいを怠った。その結果、大きな雹が降った昭和2年6月には、麦がらなどが掘割の中に入っていたのでたちまちに水が溢れ出し、伊久間は災害に見舞われた。</p>



天龍川改修記念碑【No.39】



理兵衛堤防【No.77】

※事例数：参考資料-2 現存する教訓・伝承事例一覧に整理した事例を分類ごとに計上

表 3 伝承内容の概要(2/7)

伝承内容の分類	事例数※ (n=199)	伝承内容の概要	主な事例(番号は参考資料-2に対応)
○災害の事実・災害体験・得られた教訓	40	<p><b>■災害の事実および災害体験を証明・記録し、後世に伝えるもの</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・災害の事実を記す文書として存在するもの</li> <li>・災害からの復興などを記念し建立される碑や、災害の大きさを物語る石など、災害現場付近に、形として存在するもの</li> <li>・災害体験談や、災害による集団移住など地域社会に与えた影響に関するエピソードを示すもの</li> </ul>	<p>○移住した田原村新田の人々(伊那市東<sup>ひがしはるち</sup>春近<sup>かたわら</sup>田原)【No.38】          慶応四年(1868)五月七日から大沢川の押し出す大水と天竜川の増水が重なり、田原村新田の全戸に満水して家屋 21 戸・水田 20 町歩余が流失した。このとき、避難した人々のうち 110 戸が今でも薬師庵の裏山に住み、山組部落と称して石垣づくりの住宅を構えている。</p> <p>○松尾幸久氏の 36 災害体験談(大鹿村<sup>かしお</sup>鹿塩)【No.108】          27 日、鹿塩地区で 4 軒流出。小さい村道の橋に木の根や土石流が詰まり、水が方々に流れ出てしまうのに対処するために外にいた 3 名が死亡。鹿塩川の水が橋を越す。午後に電話・電気が使えなくなる。語り部は山手の実家に避難し何もできなかった。          28 日、朝から手当たり次第に生活必需品を買い集める。午後から降り出した雨により川が決壊、地響きとともに流木や 1~2m もの大石が川の上を舞うように流れていた。村の決死隊が救助を求めて山越えを開始、5~6 日後に自衛隊のヘリコプターが来た。          29 日、雨が止み曇り空の中、大西山がドーンと落ち田圃が全部つぶれ人も家畜も息たえだえに流された。          (教訓)          ・災害時の広域的な協力体制          ・災害を起こさない、災害から逃れる工夫と努力を怠らない          ・自然の法則と生活の知恵を大切に自然を無視した開発をしない</p> <p>○斜面を転がってきた巨石(大鹿村<sup>おおかわら</sup>大河原)【No.113】          36 災害の時にマサが洗われて花崗岩の巨石が斜面を転がってきた。</p> <p>○川路村からの移籍記念碑(飯田市<sup>ときまた</sup>時又)【No.120】          「時又」の川路村からの移籍記念碑で、水害により川路から時又に移籍した人々の氏名が記されている。</p> <p>○三六災害最高水位標(飯田市<sup>かわじ</sup>川路)【No.123】          天竜川総合学習館 かわらんべの前の河原にある。</p>



斜面を転がってきた巨石【No.113】



川路村からの移籍記念碑【No.120】



三六災害最高水位標【No.123】

※事例数：参考資料-2 現存する教訓・伝承事例一覧に整理した事例を分類ごとに計上

表 3 伝承内容の概要(3/7)

伝承内容の分類	事例数※ (n=199)	伝承内容の概要	主な事例(番号は参考資料-2に対応)
○信仰	16	<p><b>■神社、祠、水神碑を祀って、信仰により災害から身を守るもの</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・人間の力が到底及ばない自然現象に立ち向かうため、信仰を持ち、災害から身を守るエピソードを示すもの</li> <li>・人間が犠牲を払う(人々が痛みを分かち合う)人柱を行ったことを示したもの</li> </ul>	<p><b>○大宮諏訪神社への祈願と式年祭(飯田市東野)【No.129】</b>  <small>ひがしの</small>            正徳五年(1715)未満水の時、人々が大宮の丘陵に逃げ集まり、大宮神社に加護を祈願した。すると水勢が一変し、北は野底川に南は松川へと流れが二分されて飯田城市は災害を免れたいう。以後、風水害鎮護の神として崇められていた。  <small>のそこがわ</small>            正徳五年(1715)未満水の時、大宮諏訪神社高台に逃げた人々が一心に祈願をこめたところ、水勢が一変して飯田台地が大難を免れた故、飯田全町の喜びは限りなく報徳が敬神となり、全町あげての大祝祭を行うのが慣例となった。七年目干支の申年と寅年の四月一日から二夜にわたり三日間行われる。</p> <p><b>○諏訪宮のなぎがま(飯田市上村上町)【No.153】</b>  <small>かみむらかみまち</small>            諏訪宮(大洪水で流れ宮にあった諏訪明神が流れ着いたところ)にはなぎがまが二本祀っており、上町付近では御射山の祭りをするようになった。水害にあったときには、祢宜様がなぎがまを持って川に行き、川すじをひくとその通りになった。古瀬良男氏と古瀬右京氏が若い頃に一度やった時、ちいとは川すじが変わった。            本来諏訪信仰の中で風切りの薙い鎌として用いられたものが、天竜川流域では洪水の瀬を切る道具として用いられた。</p> <p><b>○人柱(南信濃天竜川)【No.177】</b>            昔、南信濃の天竜川に長い橋が架かっていた。毎年毎年大水で流されてしまうので、村中の人が集まって対策を話し合っていた。ひとりの男が人柱の話をしたところ、その男は最初に言い出したという理由で人柱にされてしまった。男の息子は悲しがり、父は矢作の人柱 キジも鳴かずば撃たれまい、と詠んだ紙を父が埋められている柱に貼り付けた。村の人たちのためにはなったが、父が余計なことを喋ったためにこんなめに遭わねばならなかったと悔やんでいる息子の姿をみて村人は、橋を渡る際に息子の歌を思い出し、死んだ男のおかげで安心して渡れることをありがたがったという。</p>
○ことわざ	12	<p><b>■自然観察や経験に基づく知恵を伝えるもの</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・災害や自然現象に関して、主に口頭で伝承されるべく生まれた、簡潔な言葉でまとめたもの</li> </ul>	<p><b>○煙突の煙が立てば雨、北へなびいても雨(辰野町)【No.15】</b></p> <p><b>○煙が直に立てば、天気よし(清内路村)【No.158】</b></p> <p>上記のように辰野町(上伊那)と清内路村(下伊那)に伝わることわざには、「煙が立つ」という同じ前提条件から相反する事象が伝えられている。ことわざは、伝承された地域においてだけ通用すると考えられる事例があることに留意する必要がある。</p>

※事例数：参考資料-2 現存する教訓・伝承事例一覧に整理した事例を分類ごとに計上

表 3 伝承内容の概要(4/7)

伝承内容の分類	事例数※ (n=199)	伝承内容の概要	主な事例(番号は参考資料-2に対応)
○文芸・民謡・詩	4	<p>■<u>文芸作品などの題材として災害をとりあげたもの</u></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・災害を題材として作品化したもの</li> </ul>	<p>○地山おしだす 犬石ほえる。ないてにげるは、子つれ石(伊那市高遠町藤澤(御堂垣外))【No.48】</p> <p>○正徳五年当時の歌(飯田市上郷別府)<sup>かみさとべつぶ</sup>【No.133】 千早振る神代も聞かず野底山天王原に水上がるとは。</p>
○民話・伝説・昔話	99	<p>■<u>既往災害を想起させるもの</u></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・川や池・淵に住む「主」の行動に伴う大雨・雷の発生を記すもの</li> <li>・洪水・土石流の原因は「主」の怒りであることを記すもの</li> </ul> <p>寺を壊して流れ下る土石流の様子を表現していると考えられる。</p> <p>○「民話・伝説・昔話」は、話の内容より、①洪水:47事例 ②土砂(山崩れ/土石流):20事例 ③地震:3事例 ④その他天変地異(暴風・風雨・火災・雪害等)に関連するもの:29事例 に細分化される。</p>	<p>○大蛇が池(天龍村長島)【No.170】 大蛇が棲む池があったが地震で崩れた。大蛇は和知野川を下って天竜川に出、千木沢川をさかのぼって深見ノ池をつくり移り棲んだという。</p> <p>○夢枕に立つくらがり沢の大蛇(箕輪町三日町)【No.29】 澄心寺の黙仙和尚の夢枕に妙齢の美女に化身したくらがり沢の大蛇が立ち、天に昇るために山から天竜川へ移動し千年住まなければならぬと言った。大蛇は、澄心寺や下の田畑村人には決して被害を与えないと誓い、沢をくだって通させてくれと一生のお願いをして帰った。夢からさめた和尚は、くらがり沢の入り口に石を伏せ読経を唱えて大蛇を封じ込めた。その1週間後、大蛇は荒れ狂って南沢へ抜け出したので、澄心寺は壁をぶち抜かれ、三百六十畳の畳の上に五尺から九尺の甘酒のような泥がなだれ込み、下に続く田畑も大きな被害を受けた。</p> <p>○蛇石(辰野町横川)【No.20】 昔千淵には、五十間を越えるほどのたいへん気のやさしい主の大蛇が子供と一緒に棲んでいた。その頃、大滝沢に棲んでいた二匹の兄弟竜が、ときどき暴れては大嵐を呼びおこして大水を出し、村人を苦しめていた。兄弟竜は獲物のイノシシをめぐって大ゲンカをはじめたので、大嵐となった。木が倒れ、山が崩れ、大水が出て土や石や倒れた木々がゴロゴロと横川川を流れていった。千淵に棲む大蛇は川下の人間たちを思い、子供の竜に淵の底にいるよう声をかけてから上流へと向かった。ひときわ川幅の狭まった辺りまで来ると、倒れた木々に堰き止められて小さいダムが出来ていた。大蛇は頭をもたげて出来たばかりの木や石の土手を崩しはじめたが、次々に木や石が流れてくるので苦しい水との闘いとなった。大蛇の子は帰って来ない母を心配し、傷をおいながら頭をもたげ続けている母蛇を見つけた。大蛇とその子供は長い間水と闘っていたが、嵐が静まる頃、とうとう力つきて川底に半分埋まり、寄り添うように息をひきとってしまった。熊野権現様は兄弟竜のいたずらを大変怒り、竜たちを大滝沢にある大滝に閉じ込めてしまった。村人たちは命をすててまで助けてくれた大蛇たちを大層あわれがり、いつまでもその美しい心が残るようにと、石の姿に変えたという。こうして、大小二筋の蛇石が横川川の川底にでき、いつまでも村人を守ってくれることになったという。</p>



蛇石【No.20】

※事例数：参考資料-2 現存する教訓・伝承事例一覧に整理した事例を分類ごとに計上

表 3 伝承内容の概要(5/7)

伝承内容の分類	事例数※ (n=199)	伝承内容の概要	主な事例(番号は参考資料-2に対応)
○民話・伝説・昔話	99	<p>■既往災害を想起させるもの(つづき)</p> <p>・「主」を弔い、祀ることで怒り(災害)を鎮めたことを記すもの</p> <div data-bbox="795 1087 1249 1331" style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>常泉寺、山伏、祈禱、手植えの松のお話と、天竜川が一望できる「石神の松」の現地を合わせて水難や水害からのご加護を表現していると考えられる。</p> </div> <p>○「民話・伝説・昔話」は、話の内容より、①洪水:47事例 ②土砂(山崩れ/土石流):20事例 ③地震:3事例 ④その他天変地異(暴風・風雨・火災・雪害等)に関連するもの:29事例 に細分化される。</p>	<p>○福島<small>のおおくさ</small>の九頭竜碑(伊那市福島)【No.41】</p> <p>堤防裏肩に設置されている九頭龍神である。九頭竜の神は長野市の戸隠神社の中心的なご神体で、明治前後に神仏の信仰が盛んになるにおよび、戸隠神社も寺格から神社に変わり、伊那谷にあっても水難除けの神として広く信仰されるようになった。</p>  <p>福島<small>のおおくさ</small>の九頭竜碑【No.41】</p> <p>○石神<small>のおおくさ</small>の松(中川村大草)【No.79】</p> <p>昔、釜ヶ淵に天竜の主である九頭竜(大蛇)の化身といわれる大きな鯉が住んでいた。ある年の洪水で、淵の外に跳りでて渴いて死んでしまった。里人が屍骸を今の石神の地に厚く葬り、塚を築いて水神として祀った。</p> <p>この石神を息をしないで七回りすると青坊主が現れてくるのが見えるという。</p> <p>元和(1615～)の頃、天竜川の氾濫に相次いで悩んでいた農民が、常泉寺に寄寓し法力を持っていた山伏に頼って水難除の祈禱をしてもらった。山伏は21日間祈願を続け、満願の日に精魂尽きて倒れた。そして死に先立ちこの水神に手植の松を手向けたという。山伏の遺骸は、約5・60m離れた北東の段丘上に葬り、祠を立てて行者さまとあがめた。(山伏塚)</p> <p>昔、石神坂を上下するものは皆石上の松に小石を手向けて足の疲れを癒したという。</p>  <p>石神<small>のおおくさ</small>の松【No.79】</p> <p>○大蛇<small>ひがしじょう</small>になった母(阿南町東条)【No.167】</p> <p>天正十五年(1587)吉田城の下条氏が没落した。その知らせを聞いた下条康氏の母は城を抜け出し、深見の百姓家に隠れていた。間もなく訴人があって身が危なくなったので、母は井戸へ身を投げた。すると井戸が一夜に崩れて大きな池になった。大蛇の姿になった池の主は世を呪って村中の田畑を荒しまわったので、百姓たちは祠を建てて死者の霊を慰めた。この池ができてから近くの寺では、鐘をつくると大蛇が暴れ出すからと言って、鐘を漬く事を止めたという。</p>

※事例数：参考資料-2 現存する教訓・伝承事例一覧に整理した事例を分類ごとに計上

表 3 伝承内容の概要(6/7)

伝承内容の分類	事例数※ (n=199)	伝承内容の概要	主な事例(番号は参考資料-2に対応)
○民話・伝説・昔話	99	<p>■既往災害を想起させるもの(つづき)</p> <p>・過去の災害の事実を地名に託したもの</p> <div data-bbox="774 1486 1249 1591" style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>土石流で川原に土砂が流出した様子を表現してできた地名と考えられる。</p> </div> <p>○「民話・伝説・昔話」は、話の内容より、①洪水:47事例 ②土砂(山崩れ/土石流):20事例 ③地震:3事例 ④その他天変地異(暴風・風雨・火災・雪害等)に関連するもの:29事例 に細分化される。</p>	<p>○辰野のいわれ(辰野町)【No.26】</p> <p>むかしの荒神山は今より大きく、東と西の山脈までつながっていて、天竜川をせきとめ、そこに湖ができていた。その湖には竜神が住んでいて、天に昇ったり降りたりしていた。ある時の大雨で湖の水が氾濫し、荒神山の東と西を切り崩して水が流れ出し、干上がってしまった。水がなくなったので竜は天に昇ってしまい、今は野になってしまった。ここを竜神がいたということから龍野(辰野)というようになった。</p> <p>○大蛇が城(松川町元大島)【No.85】</p> <p>大蛇が城(大島城)の崖下にある天竜川の深い淵には大蛇が棲むという。雲ひとつない晴れた日の朝、淵の上より立ち昇る水気が霧の雨となって城に降りそそぐのを見る人たちは、大蛇の仕業だといって不吉の前兆でもあるように恐れていた。</p> <p>天正十年二月(1582年3月~4月)、織田信忠の大軍が火矢<small>のぶただ</small>で城を攻めた時、火の手があがると不思議にも淵の水が雨となって消されてしまった。これは大蛇の仕業だと淵に無数の矢を射込むと、淵の面に大波が狂い起き、天地晦冥の大雷雨が起こり、天竜川の水を真っ赤に染めて大蛇が淵の底深くに沈んでいった。そして城は焼かれ、落城した。今でも城跡の畑を掘りおこすと真っ黒い焼米が出てくるという。また一説に城兵が、城に向かって大蛇が吐く水煙を不吉に思い、射殺した。守護を失った城は間もなく敵に攻め落とされたともいう。</p> <p>○出砂原(高森町下市田)【No.90】</p> <p>正徳五年(1715)の未満水の時、大島山から天竜川に注いでいる大島川が満水となって土石流が発生し、大量の土砂が押し出されてきた。</p> <p>○夜川瀬(飯田市南信濃和田)【No.157】</p> <p>盛平山(森山)の西方斜面が崩壊し、圧死者5人を出した。崩壊土砂が北側の押し出し沢から流出した土砂とともに、遠山川を堰止め、「出山」(和田小学校北方の小峰)とよばれる小山をつくり、天然ダムを形成した。天然ダムは、およそ1週間後に決壊し、一夜で広い河原をつくった(現夜川瀬部落)</p>



大蛇が城【No.85】

※事例数：参考資料-2 現存する教訓・伝承事例一覧に整理した事例を分類ごとに計上

表 3 伝承内容の概要(7/7)

伝承内容の分類	事例数※ (n=199)	伝承内容の概要	主な事例(番号は参考資料-2に対応)
○民話・伝説・昔話	99	<p>■伝承の地で繰り返された災害を示すもの</p> <div data-bbox="795 520 1249 632" style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>人家を壊して流れ下る土石流の様子を表現していると考えられる。</p> </div> <div data-bbox="795 1352 1249 1591" style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>人家を壊して流れ下る土石流の様子を表現していると考えられる。塩嶺層(赤色風化土砂)の土石流と解釈すれば湊地区の土石流と同様と推定できる。</p> </div> <p>○「民話・伝説・昔話」は、話の内容より、①洪水:47事例 ②土砂(山崩れ/土石流):20事例 ③地震:3事例 ④その他天変地異(暴風・風雨・火災・雪害等)に関連するもの:29事例 に細分化される。</p>	<p>○諏訪市<sup>しがくわぼら</sup>四賀<sup>あいざわ</sup>桑原<sup>かわぎし</sup>の鮎沢系図(岡谷市川岸)【No.14】</p> <p>鮎沢肥前守六代之孫鮎沢源吾・孫右衛門・姉共ニ鮎沢村ニ而誕生、姉者橋原村へ嫁ス、此時正保二丙戌五月廿三日、蛇崩レニ而家屋鋪不残押流され、右兩人漸く命をたすかり闇夜橋原村姉之方江引越、正保三丙戌八月横川村江引移る、正保二兄十才、弟八才</p> <p>鮎沢肥前守の六代の孫に当たる鮎沢源吾、孫右衛門は姉と共に鮎沢村(岡谷市川岸)において誕生した。姉は橋原村(同)へ嫁いだ。この時、正保二年五月二十三日(ユリウス暦=西暦 1645 年 6 月 7 日、グレゴリオ暦=西暦 1645 年 6 月 17 日)、蛇崩れによって家屋敷が残らず押し流された。源吾と孫右衛門の兩人はようやく命が助かり、橋原村の姉の所へ引っ越した。その後正保三年八月に横川村へ引き移った。蛇崩れにあった正保二年に兄は十才、弟は八才であった。</p> <div data-bbox="1923 747 2778 1058"> </div> <p>⇒平成 18 年 7 月豪雨時、旧鮎沢村(現岡谷市川岸)の伝承の地付近の川岸地区の志平で土石流が発生</p> <p>○しっぽのない赤いへび(岡谷市堀ノ内)【No.12】</p> <p>岡谷の西堀に住んでいたケチでふくよかなオフクというおばあさんが、二羽のつばめが軒下につくった巣を疎ましく思い落としてしまったので、二羽のつばめは悲しい声を残して諏訪湖のほうへ消えていった。数日後、二羽のつばめがオフクばあさんの家に夕顔の種を運んできた。それを植えると見事な夕顔が実った。輪切りにした夕顔の中から数え切れない程の真っ赤な小さいへびが這い出してきた。あきれたオフクばあさんは、夕顔とへびを小井川の一里塚のやぶの中に投げ捨てた。やぶの中で大きくなったへびたちのしっぽは、オフクばあさんが夕顔を輪切りにした時に切られてしまっていた。しっぽのない赤いへびの大群がまるで真っ赤に燃えた火のおびのように大行進をして、地響きとともにオフクばあさんと家をひとおしにし、塩尻峠へと消えていった。</p> <div data-bbox="1923 1451 2778 1761"> </div> <p>⇒平成 18 年 7 月豪雨時、横河川の下流の右岸の伝承の地付近の横河川上流側左岸の支川(上の原)で土石流が発生</p>

※事例数：参考資料-2 現存する教訓・伝承事例一覧に整理した事例を分類ごとに計上

## 3-2 天竜川上流域の既往災害

天竜川上流域では、局地的な豪雨や長雨で古来より諏訪湖や天竜川本川・各支流で洪水や土砂災害が多く発生している。以下に、江戸時代以前から平成までの間で本地域に影響を与えた主な災害についてまとめた。なお、詳細な災害年表は参考資料-2に掲載した。

表 4 天竜川上流域の主な災害年表

時代	西暦	和 暦	事 項
室町	1482	文明十四年	五月二十五日より大雨、大町・十日市場・安国寺甲に流される、大町水海。七月二十五日より大雨、五日市場・十日市場・大町大海。(現諏訪市宮川付近)
	1533	天文二年	五月二十九日、天竜川大洪水。六月五日、洪水。八月十七日、天竜川に木が出る。九月十四日、大洪水、五月の洪水のごとし。(東森庄村)
江戸	1596	慶長元年	六月十九日・二十三日、信濃京に大洪水、百年以来の大水という。
	1612	慶長十七年	五月天竜川大洪水。田中城三日町流失、竜東へ移る。(現箕輪町)
	1624	寛永元年	四月天竜川満水にて田島大水あり、一部の人高懸原へ上る。大田切・与田切の被害大(宮田村)
	1715	正徳五年 (未満水)	六月十七日より二十四日迄伊那谷未曾有の大降雨。中央アルプスの崩落より土石流が守甲し出し出網棚を形成。(高森町下市田)野原川が氾濫。
	1719	享保四年 (亥の満水)	八月十五日大洪水(亥の満水)被害頗る多し。(泰阜村)七月・八月、諏訪湖断々満水。
	1726	享保十一年	五月十八日より諏訪湖大満水、鍛冶島島の十四戸が流出し表木村へ集り移住。清木路村で蛇抜け十五谷。
	1742	寛保二年 (戌の満水)	六月満水。七月・八月、大洪水。(戌の満水)八月、諏訪湖満水、大雷雨山西部にて田畑・古木流し、八十年未覚えぬ大雷雨。(箕輪町)
	1789	寛政元年 (酉満水)	五月中諏訪湖満水。六月十七日・十八日天竜川満水。(酉満水)
	1865	慶応元年 (乙丑満水)	六月十七日・十八日天竜川大洪水(乙丑満水)、正徳五年未満水以来、百五十年目の大満水。
明治	1868	明治元年 (辰の満水)	五月十八日大満水。七月二日天竜川大洪水。(辰の満水)
	1869	明治二年	七月十三日大大雨あり、連年の洪水で天保以来の大凶作。
	1898	明治 31 年	6月上旬、下旬に大洪水。六斗川堤防切れる。(現諏訪市)9月上旬豪雨、古来こびなき大猛水となり八ヶ岳山崩壊、木石土砂一時押し出し諸川腫脹。
	1911	明治 44 年	8月3~4日台風により大川川から天竜川流域にかなりの雨量が300~800mmに達し、下流域で大被害。諏訪市沖筋方面浸水被害、川路出水。旧磐田郡龍田山下下川で大規模な地すべり発生。
大正	1923	大正 12 年	6月9日天竜川大増水、飯田測候所観測史上最高の雨量を記録。飯田町浸水、松川沿岸流失家屋あり、小和町で家屋に土砂流入、七久保字日向で山津波の惨状こある。
昭和	1931	昭和 6 年	台風により諏訪湖満水。ローリングダム問題大紛争 <sup>※</sup> に発展する。昭和7年の洪水を契機に国営事業として着手され、流入河川の河道改修、湖岸堤整備、湖底浚渫こ合わせ、昭和11年こ旧釜口水門を建造
	1950	昭和 25 年	6月10~11日の豪雨により諏訪湖の水位が上昇。浸水家屋1700戸等被害。
	1953	昭和 28 年	大嶽からの低気圧の影響で梅雨前線が活発化、7月17日天竜川の各地で堤防決壊こよる浸水被害(川路・龍工・竜丘など)、大下条集落で山崩れ発生。
	1959	昭和 34 年	8月14日、台風7号こよる富士見町立沢のセンガ沢では土石流が発生、死者19名の被害。美和ダム地点で最大洪水流量1182m <sup>3</sup> /sec、洪水流量3521万m <sup>3</sup> /secを記録。
	1959	昭和 34 年 (伊勢湾台風)	最大風速37mの暴風(飯田測候所発表)が猛烈な雨を伴い、東濃、長野県下で死者不明12名、家屋浸水2000戸、被害総額60億円。阿南町では死者4名、全半壊524戸の被害。
	1961	昭和 36 年	台風6号の影響で停滞した梅雨前線が活発化、6月27日に集中豪雨となる。天竜川流域の各地で洪水、土石流被害。大鹿村では大西山崩壊。
1983	昭和 58 年	台風10号の影響こよる前線が活発化、9月28日から29日こかけて豪雨、川路測候所の水位は36災害の水位を上回る。	
平成	2006	平成 18 年	7月15日から21日までの総雨量が7月平均雨量の2倍を超えるこよる記録的な豪雨、岡谷市や辰野町などで土石流が発生、川路で浸水被害。

※「ローリングダム問題大紛争」:昭和6年7月の豪雨の際にローリングダムの協定(地震・その他の災害を除く)事項実施をめぐり、暴動寸前の事態に陥った。

(笹本正治(1993):天竜川の災害年表、村沢武夫(1983):伊那谷の災害と凶作、長野県諏訪建事務所(1998):諏訪湖治水の歴史より)

## (1) 江戸時代以前の災害

諏訪地方では、文明十四年(1482)五月・七月に降った大雨で大町(諏訪大社上社の東方:現茅野市宮川付近)が大海となり、物価急騰や疫病の流行を招き、社会不安に陥った(長野県諏訪建設事務所(1998):諏訪湖治水の歴史)。

また、天文二年(1533)には天竜川の洪水が頻繁に起こっていたことが、信濃史料に記されている(笹本正治(1993):天竜川の災害年表)。



図 4 正徳五年の未満水で野底川から運ばれてきた子泣き石  
(飯田市上郷別府)

(下伊那川たんけんブック編集委員会(2007):下伊那川たんけんブック, 61より)

## (2) 江戸時代の災害

慶長から慶応までの 270 年間に 90 数回という多くの洪水記録がみられる。(向山雅重(1987): 図説上伊那の歴史上巻)特に正徳五年(1715)の未満水は、伊那谷未曾有の災害であった。度重なる災害は、田畑を奪い、全村流出による集団移住や凶作・飢饉を招き、人々を脅かした。その一方で、洪水から祖先伝来の地を守ろうと水との闘いに挑み、石積みの強固な堤防が造られ、より工夫を重ねた聖牛や木工沈床などの水防護岸技術が考え出されるようになった(村沢武夫(1983):伊那谷の災害と凶作)。



図 5 飢えで間引かれた赤子の伝説を伝える「前亡後化塔」(飯田市南信濃)  
(後藤総一郎(1979):遠山物語ムラの思想史, 61-66.より)



図 6 中川村片桐の理兵衛堤防  
(向山雅重(1987):長野県の歴史シリーズ図説・上伊那の歴史上, 129.より)

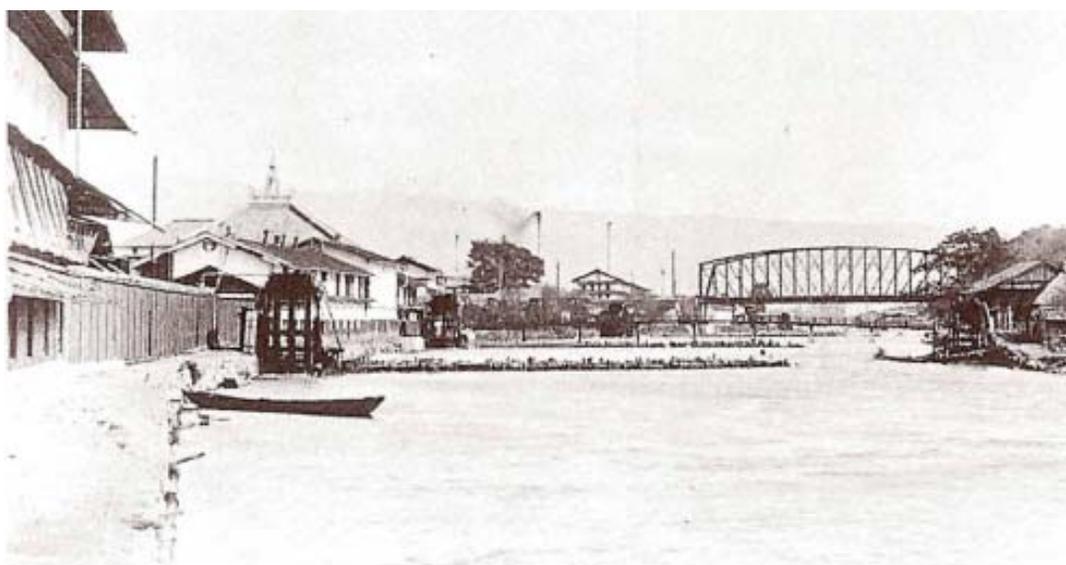
### (3) 明治時代の災害

幕末の慶応元年（1865）に乙丑満水が伊那谷を襲い、明治元年（1868）には辰の満水で天竜川は大洪水となった。その翌年にも大風雨があり、天保以来の大凶作となった（村沢武夫（1983）:伊那谷の災害と凶作）。

また、明治 16 年から 45 年までの 30 年間に諏訪湖の氾濫は 139 回に及び、製糸業の発達による天竜川上流での動力水車の湛え設置問題が浮上し、上流民と製糸業者との対立から天竜水車事件へと発展した（長野県諏訪建設事務所（1998）:諏訪湖治水の歴史）。



図 7 諏訪市中筋方面の浸水状況(明治 44 年)  
(長野県諏訪建設事務所(1998):諏訪湖治水の歴史, 107-113より)



た  
図 8 製糸用動力水車と湛え  
(長野県諏訪建設事務所(1998):諏訪湖治水の歴史, 107-113より)

明治 44 年 8 月の災害では天竜川流域に大きな被害が発生した。台風は熊野灘から伊勢湾に上陸し、長野・新潟両県を通過した。浜松地方は 4 日朝から風雨が強まり、20 時頃から暴風雨となり、浜松で 22 時 30 分に最大風速 28m を観測した。雨量は大井川から天竜川流域にかけて 300~800mm に達し、気田（現浜松市天竜区春野町気田、旧周智郡春野町気田）で日雨量 583mm を観測した。

水位は、池田村（現磐田市池田、旧磐田郡豊田町池田） 4.8m（1 丈六尺四寸）、鹿島（現浜松市天竜区二俣町鹿島、旧天竜市二俣町鹿島） 6.9m（2 丈 6 尺）、袖浦村岡（現磐田市岡、旧磐田郡竜洋町岡） 4.4m（1 丈 8 尺）に達した（建設省浜松工事事務所(1990)：天竜川 治水と利水）。

このときの台風により、天竜川では、山地部の崩壊が発生し本川を堰止めたという記録が残っている。

（静岡県磐田郡誌下巻）

- ・ 磐田郡龍山村※、山香村境界、字成瀬難所の下流にある天竜川沿岸にそびえる山稜が崩壊し、巨岩大石が河中に堆積したため、河道を閉塞し高さ 20 余間（約 36m）の落差を生じ、あたかも滝のようになった。
- ・ 水勢は兩岸の岩石を破碎し、船による運搬欠便 20 日余りとなり、池田村から山香村佐久間村まで米 1 俵の運搬賃が 3 円 90 銭を要した。

※参考：龍山村について

- ・ 明治 22 年（1889）市町村制施行により龍川村・山香村誕生。明治 34 年（1901）11 月 1 日、龍川村の大嶺、戸倉地区と山香村の瀬尻・下平山地区が分離独立し龍山村誕生。

（龍山村史）

- ・ この日は朝から雨模様であり、午後に入ると風雨がいっそう強まり、夕方から暴風雨となった。天竜川と白倉川が氾濫を起こし、西川では 40 秒に約 1m の割合で増水し市街地を浸水し「伊勢屋」の軒先まで泥水に浸かった。
- ・ 下平山（現浜松市天竜区龍山町下平山、旧磐田郡龍山村下平山）の山沢が一時に出水し、小字「ヤソコ」付近の山林に大規模な地すべりが発生、民家 1 戸を埋没させ、崩れた土砂はそのまま部落中央を貫いて天竜川に突出した。これにより、行方不明者 3 人、重軽傷者 3 人の被害が発生した。
- ・ 天竜川に突出した大量の土砂は一時的に天竜川の水流を遮断したため、あつという間に対岸の青谷部落に濁流が横溢した。このため、民家 3 戸全壊、3 戸流失、死者 1 名、行方不明者 1 名の被害が発生した。

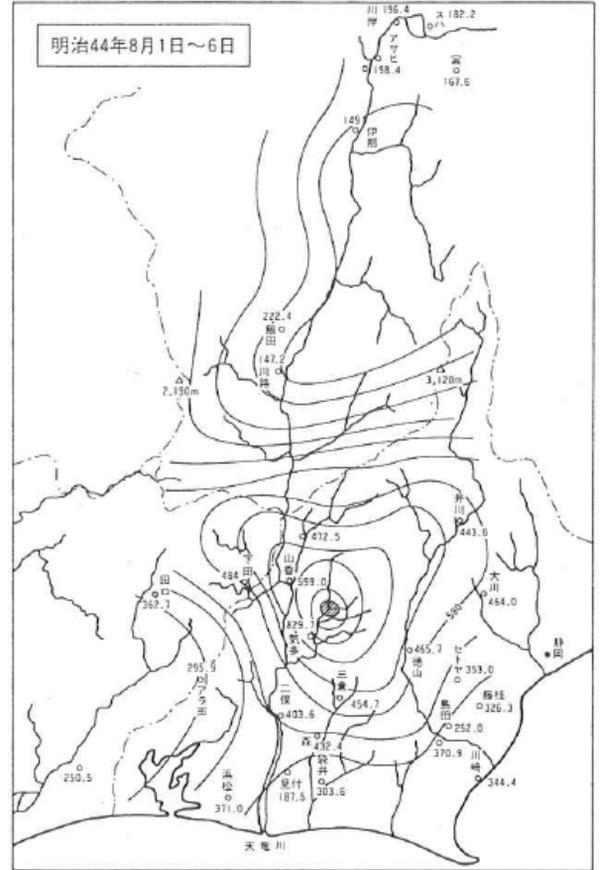
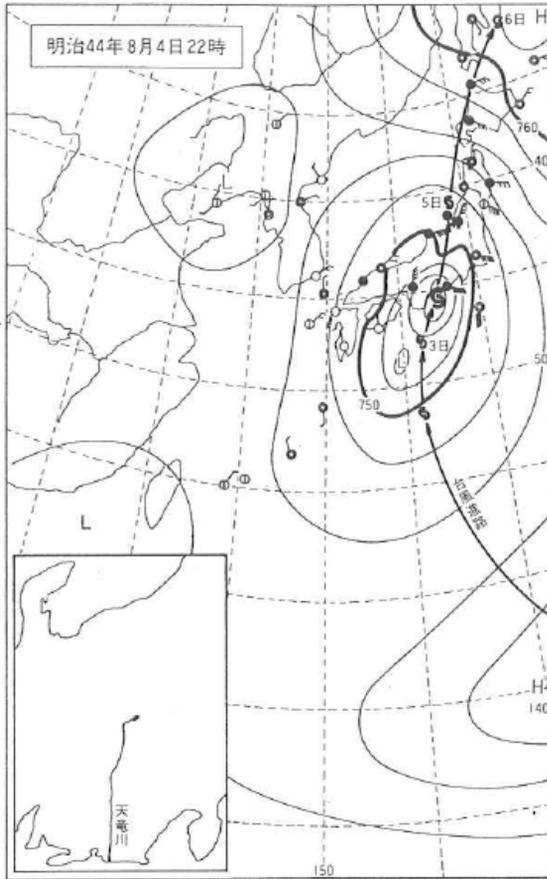


図3-2-(1) 天気図(明治44年8月4日災害)

図3-2-(2) 降水分布図(明治44年8月4日災害)

**図9 天気図と降水分布図**

(建設省浜松工事事務所(1990):天竜川 治水と利水)



#### (4) 大正時代の災害

大正 12 年（1923）6 月 9 日に天竜川が大増水し、飯田測候所開設以来の最高雨量を記録した。飯田町や松川（現飯田市）沿岸では浸水や家屋が流失し、七久保字日向（現飯島町）では山津波が発生した(笹本正治(1993) 天竜川の災害年表)。

また、大正 11 年（1922）に西天竜ローリングダム式湛えの治水問題が浮上した。昭和 6 年 7 月の豪雨の際、中筋の田圃が浸水し、中筋農民と伊那農民がダムを挟んで対峙して暴動寸前の事態に陥った。この問題は、昭和の抜本的な治水対策が始まるきっかけとなった（長野県諏訪建設事務所（1998）：諏訪湖治水の歴史）。



図 11 飯島町日向沢の惨状  
(高橋将人(1986):昭和の上伊那, 328.より)



図 12 完成した西天竜ローリングダム  
(長野県諏訪建設事務所(1998):諏訪湖治水の歴史, 114-115.より)

## (5) 昭和・平成の災害

昭和 25 年 (1950) 6 月、昭和 28 年 (1953) 7 月には梅雨前線による大雨で、天竜川各所で堤防決壊が発生して流域は大きな被害を受けた。

昭和 34 年 (1959) 8 月には台風 7 号により、富士見町立沢のセング沢で土石流が発生し 19 名の尊い命が奪われた。県内では死者・行方不明者 71 名、家屋全半壊 4482 戸、床上床下浸水 15,197 戸の被害に加え農業関係に甚大な被害があった。

昭和時代から現在において、天竜川上流域で特筆すべき災害は、以下の表に挙げる昭和 36 年災、昭和 58 年災、平成 18 年災である。昭和 36 年災では、堤防決壊による浸水被害のみならず、各地で土砂災害が発生し、多数の死者が出た。また、平成 18 年災は、諏訪から伊那にかけて 7 月の月間平均雨量の 2 倍以上の雨が数日間で降り、主に諏訪湖周辺市町村で土石流による被害が発生した。

これらの災害の規模を以下に示す。また、次項では昭和 36 年、58 年災害の概要を整理した。

表 5 昭和・平成の主要 3 災害の規模比較

	昭和 36 年災	昭和 58 年災	平成 18 年災
最大総雨量 (観測地点)	594mm (飯田)	426mm (飯島)	421mm (辰野)
最高水位(天竜峡) 計画高水位: 20.20m	20.26m(推定)	19.97m(実測)	16.80m(実測)
主な被害	○大鹿村大西山崩壊(死者 42 名) ○中川村土石流発生(死者 17 名) ○諏訪湖増水により市街地 2/3 が 4 日間溢水	○飯田市川路、竜江、松尾などで家屋浸水・田畑冠水被害 ○諏訪湖増水により家屋約 6600 戸が浸水	○岡谷市湊 3 丁目で土石流発生(死者 7 名) ○岡谷市川岸東 2 丁目で土石流発生(死者 1 名) ○箕輪町で堤防決壊
人的被害 (死者・行方不明者)	136 名	9 名	13 名
家屋被害 (上段: 全壊半壊流失) (下段: 浸水)	1,144 戸 18,521 戸	145 戸 10,881 戸	40 戸 3,215 戸

※人的被害・家屋被害は長野県全体の被害

(長野地方気象台(1988):信州の気候百年誌,266p.、九津見生哲・中村俊六・久保田稔(1995):昭和36年6月出水と58年9月出水時における天竜川上流の土砂氾濫,自然災害科学,13,235-248.

気象庁HP:<http://www.jma.go.jp/jma/index.html>、

長野地方気象台:[http://www.tokyo-jma.go.jp/sub\\_index/bosai/disaster/20060719/20060719\\_nagano.pdf](http://www.tokyo-jma.go.jp/sub_index/bosai/disaster/20060719/20060719_nagano.pdf)、

天竜川上流河川事務所:<http://www.tenjp.go.jp/~jimushohp/disaster/level/level.html>より)

## ① 昭和 36 年災害の概要

### 【1】 気象概要

昭和 36 年 6 月に梅雨前線が日本列島の真上に一週間停滞し、伊那谷では 23 日から断続的に雨が降り続いていた。そして四国南方にあった台風 6 号の接近にともない雨は激しさを増し、27 日は遂に集中豪雨となって襲いかかった。雨域は恵那山から甲斐駒ヶ岳に至る北東－南西方向に帯状分布となり、この日恵那山では 429mm、飯田で 325mm（飯田測候所創立以来の大雨）の雨量を観測、この雨域で最も大きな被害が出た。

（北澤秋司：<http://kadomatsu.shinshu-u.ac.jp/%7Echisan/12/ina/index.htm>）

### 【2】 災害の特徴

災害の特徴としては、竜東で伊那山脈から流れてくる河川の全てに土石流がみられ、竜西では阿知川・茂（も）都計（とつ）川（がわ）・野底川などで土石流が発生し、おびただしい土砂が流出したところにある。これらの地域は、ほとんど花崗岩地帯であり、基岩の上にある 30～60cm の表土に植物の根系が密に入り、基岩との間に薄い（3～5mm）粘土膜ができていてすべり面となっている。すべった土塊は対岸に乗り上げそこも破壊して自然のダムとなり、これがダムアップして突然決壊（トッピング）し土石流となった（北澤秋司：<http://kadomatsu.shinshu-u.ac.jp/%7Echisan/12/ina/index.htm>）。

この災害により長野県では 136 人の犠牲者を出し、被害総額は 340 億円にものぼった。

### 【3】 主な被害

○川路（かわじ）・天竜峡の洪水（飯田市）

この時の最高水位は正徳五年の未満水を上回った。



図 13 飯田市立川路小学校の浸水状況

（松島信幸・亀田武巳・村松武（1998）：三六災害 40 周年伊那谷の土石流と満水，20より）

最高水位



図 14 飯田市川路駅前に立てられた三六災最高水位標  
(松島信幸・亀田武巳・村松武(1998): 三六災害 40 周年伊那谷の土石流と満水, 20.より)

○大島川・田沢川の氾濫 (高森町)



図 15 高森町を流れる大島川の氾濫  
(松島信幸・亀田武巳・村松武(1998): 三六災害 40 周年伊那谷の土石流と満水, 25.より)



**図 16 高森町市田河原にある決壊寸前の惣兵衛堤防**  
(高森町史刊行会(1975):高森町史下巻, 1010、1017.より)



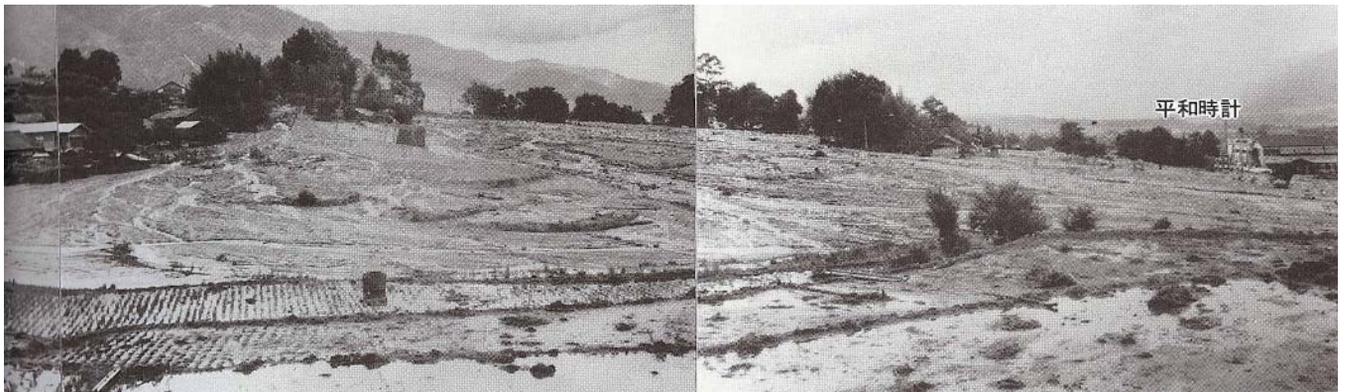
**図 17 田沢川の土石流被害**  
(高森町史刊行会(1975):高森町史下巻, 1010、1017.より)

のそがわ  
○野底川の氾濫（飯田市）



**図 18 飯田市街を流れる野底川の氾濫**  
(松島信幸・亀田武巳・村松武(1998):三六災害 40 周年伊那谷の土石流と満水, 24より)

いがら  
○伊賀良地区に一夜にしてできた土石流扇状地（飯田市）



**図 19 飯田市伊賀良地区にできた一夜扇状地**  
(松島信幸・亀田武巳・村松武(1998):三六災害 40 周年伊那谷の土石流と満水, 16-17より)

○生田(いくた)の土石流 (松川町)

花崗岩が風化したマサ土があちこちで崩れ落ち、谷を埋めて天然のダムを形成、その後決壊し土石流が襲った

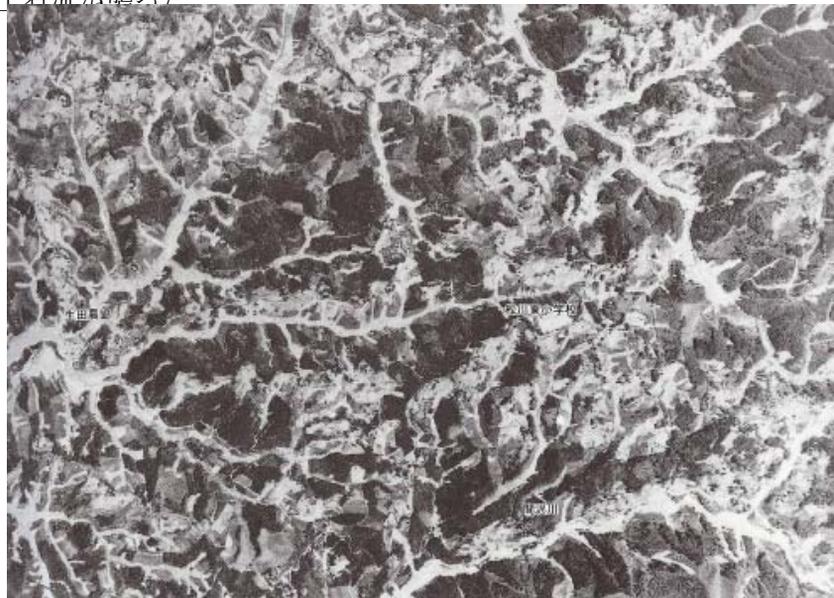


図 20 松川町生田の土石流の全容

(松島信幸・亀田武巳・村松武(1998):三六災害 40 周年伊那谷の土石流と満水, 33.より)

しとく  
○四徳の土石流 (中川村)

村人は祖先伝来の家や森林を手放し 700 年に及ぶ村の歴史に終止符を打った。



図 21 中川村四徳の土石流

(松島信幸・亀田武巳・村松武(1998):三六災害 40 周年伊那谷の土石流と満水, 36.より)

○大西山の大崩壊（大鹿村）

29日の朝9時10分、大西山が高さ450mのところから幅500m、厚さ15mにわたって屏風が倒れるように崩れ落ちた。風圧と飛び散る土砂により対岸の文満・下市場地区は一瞬のうちに吹き飛ばされ、42名もの尊い命が奪われた。



図 22 大鹿村大西山崩壊の瞬間

(松島信幸・亀田武巳・村松武(1998):三六災害40周年伊那谷の土石流と満水, 41より)

## ② 昭和 58 年災害の概要

### 【1】 気象概要

1983 年 9 月 25 日から 29 日にかけて、台風 10 号が日本列島を通過し、台風から変わった低気圧が四国付近から紀伊半島付近にかけて位置していた頃、長野県内では南部で 1 時間に 30mm から 45mm の激しい雨が降った。特に伊那谷南部で雨は激しく、阿南で 28 日の 16～19 時の 3 時間に 111mm、南信濃では 17～20 時の 3 時間に 87mm、また浪合でも同じ時間に 84mm という記録的な豪雨を観測した。

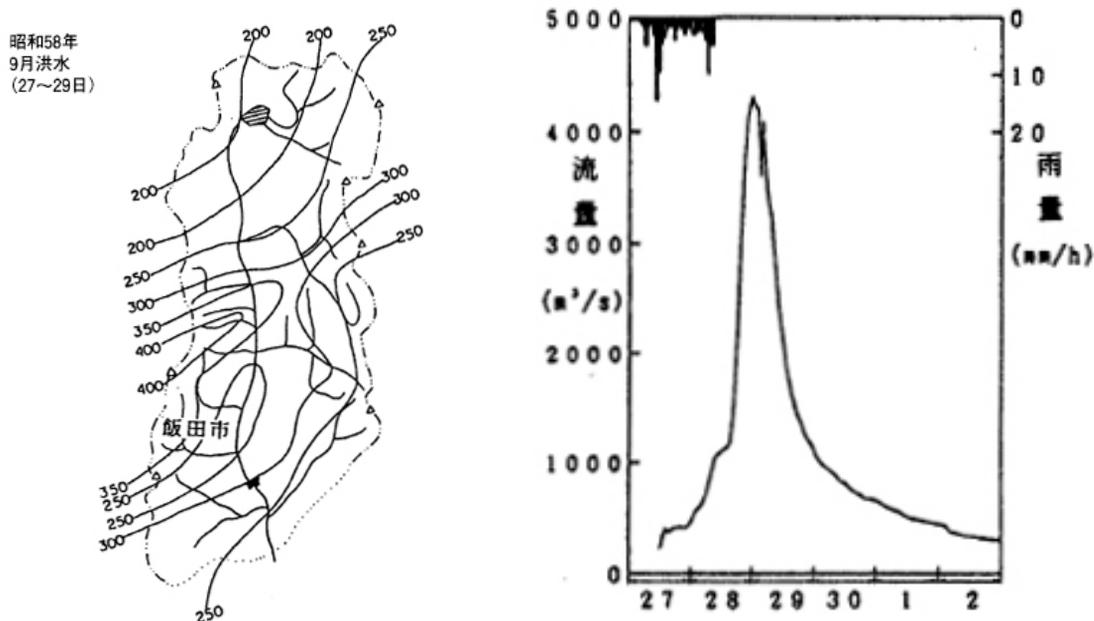


図 23 等雨量線図(左)と、泰阜ダムにおける 9 月 27 日～10 月 2 日までの流量および雨量 (九津見生哲・中村俊六・久保田稔(1995):昭和 36 年 6 月出水と 58 年 9 月出水時における天竜川上流の土砂氾濫,自然災害科学,13, 235-248.より)

### 【2】 災害の特徴

諏訪測候所開設以来の記録的集中豪雨（連続雨量 215.5mm）であったため、諏訪地域では各地で山崩れや土石流が発生した。諏訪湖に流入する多くの河川の増水や鉄砲水により雨水は一気に諏訪湖へ流入したため(諏訪湖からの流出口は天竜川 1 本である)、諏訪湖が氾濫し諏訪市及び茅野市を中心とした広い範囲で浸水被害（浸水面積 1,606ha、浸水家屋 4,297 戸）が発生した。被害は、家屋や農林業の他、観光関係も甚大であり、湖岸のホテルや旅館の床上浸水により、宿泊客の約 1,000 人が缶詰め状態になる大災害であった。

(長野県土木部諏訪建設事務所(1988)：諏訪地方・災害復興の記録(56 災・57 災・58 災), 長野県諏訪市(1988)：昭和 58 年台風 10 号豪雨災害復興誌.より)

### 【3】主な被害

#### ○檜沢川の氾濫（茅野市）

茅野市米沢の檜沢川では氾濫により、床上浸水 3 戸、床下浸水 44 戸の被害が発生した。

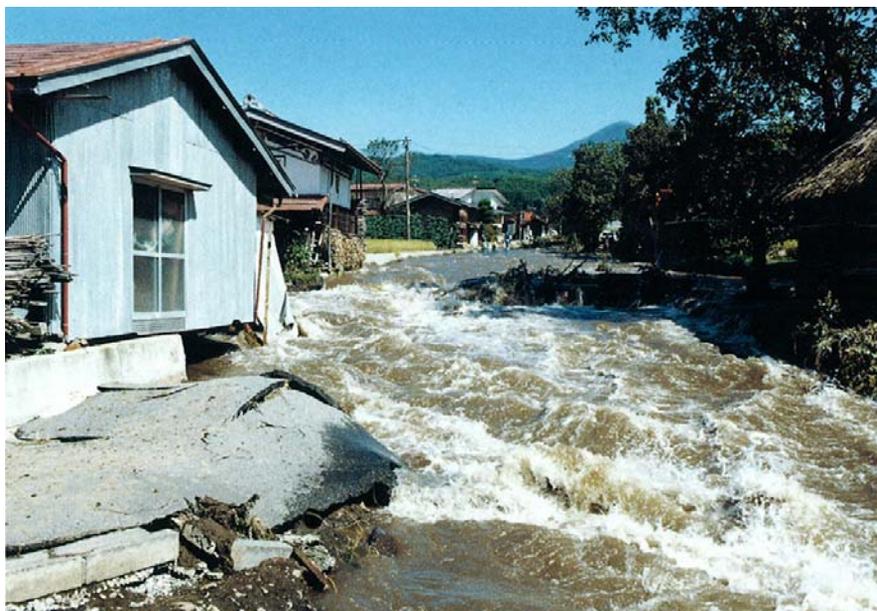


図 24 檜沢川における氾濫状況

（長野県土木部諏訪建設事務所(1988): 諏訪地方・災害復興の記録(56 災・57 災・58 災).より)

#### ○唐沢川の氾濫（諏訪市）

諏訪市双葉ヶ丘の唐沢川で土石流が発生し、家屋全壊 2 戸、半壊 4 戸、床上浸水 9 戸、床下浸水 22 戸の被害が発生した。

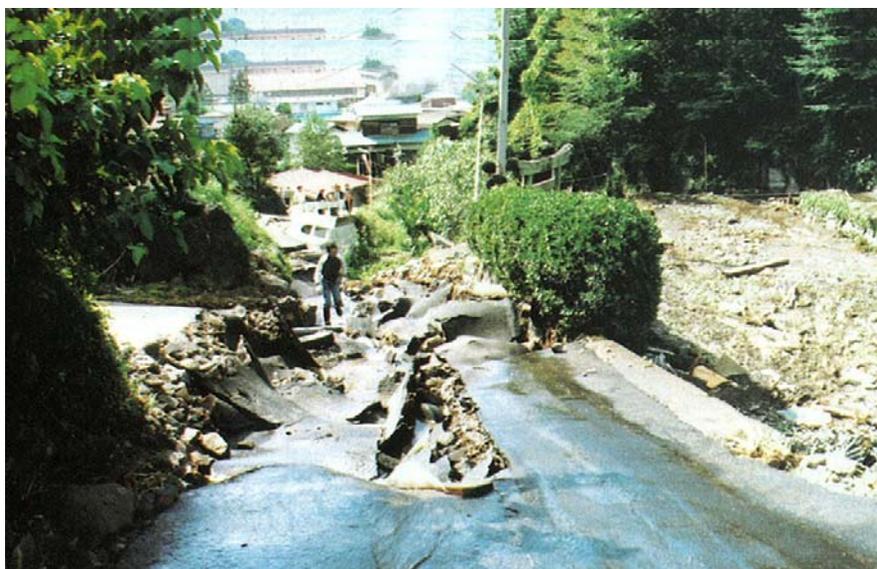


図 25 唐沢川の氾濫状況

（長野県諏訪市(1988): 昭和 58 年台風 10 号豪雨 災害復興誌.より)

○福沢山の崩壊（諏訪市）

諏訪市元町の福沢川で山崩れが発生し、死者が出たほか、家屋全壊2戸、床上1戸の被害が発生した。



図 26 福沢山の崩壊

(長野県土木部諏訪建設事務所(1988):諏訪地方・災害復興の記録(56 災・57 災・58 災)より)

○宮の沢川の土石流・山崩れ（飯島町）

ななくぼたかとおぼら

飯島町七久保高遠原の宮の沢川で山崩れによる土砂流入があり、床上5戸、床下16戸の被害が発生した。



図 27 飯島町での山崩れによる土石流被害

(建設省天竜川上流工事事務所(1984):昭和58年9月(台風10号)出水記録より)

○竜江の洪水災害（飯田市）

洪水により 5 戸の家屋が半壊した。



飯田市竜江御庵 S 58. 9. 29 天竜川の氾濫により桑畑、水田浸水

**図 28 飯田市竜江での浸水状況**

（建設省天竜川上流工事事務所(1984):昭和 58 年 9 月(台風 10 号)出水記録より）

○川路の洪水災害（飯田市）

飯田市川路で洪水により床上浸水 7 戸、床下浸水 10 戸の被害が発生した。



飯田市川路天竜峡 S 58. 9. 29 床上浸水（天竜峡ホテル  
及びしぶき荘）

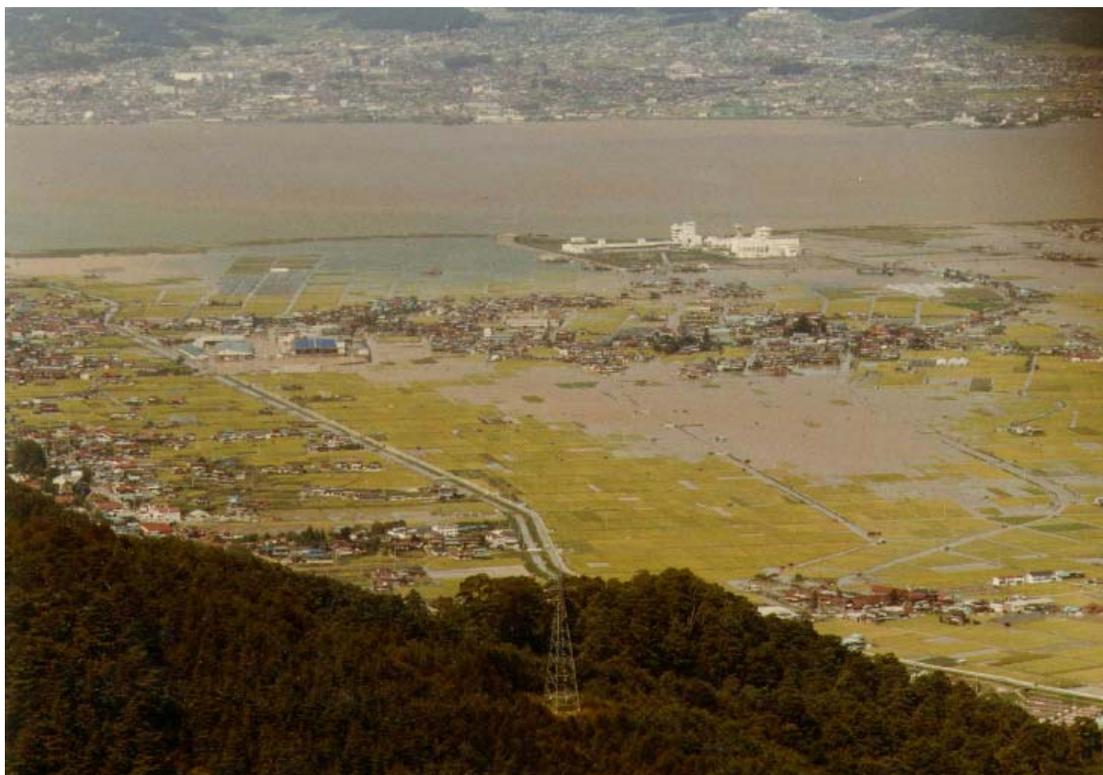


日市川路天竜峡 床上浸水（天竜峡ホテル）

**図 29 飯田市川路での浸水状況**

（建設省天竜川上流工事事務所(1984):昭和 58 年 9 月(台風 10 号)出水記録より）

○諏訪湖の浸水状況（諏訪市）



**図 30 諏訪湖の浸水状況**  
(天竜川上流河川事務所所蔵写真)

### ③ 平成 18 年 7 月豪雨災害の概要

#### 【1】 降雨状況

2006 年 7 月 15 日から降り始めた雨は、21 日まで降り続き各地に被害が続出した。長野県上伊那地方は、過去の降雨記録を上回る豪雨となった。長野県下に発生した災害は 121 箇所、伊那北部域では土石流災害が集中した。

災害発生時には梅雨前線の活動が活発となり長野県内では、7 月 15 日から 21 日までの 7 日間の総雨量が多いところで 600 ミリを超え、辰野町では 24 時間雨量が 246 ミリ（連続雨量 420 ミリ）、伊那市では 232 ミリといずれも観測史上 1 位を更新した。長野県では、総雨量が 7 月の月間平均雨量の 2 倍を超えるなど記録的な大雨となった。気象庁では「平成 18 年 7 月豪雨」と命名した（シンポジウム～平成 18 年 7 月豪雨と上伊那の土砂災害～実行委員会(2007)：シンポジウムの記録 平成 18 年 7 月豪雨と上伊那の土砂災害 未来への提言.より）。

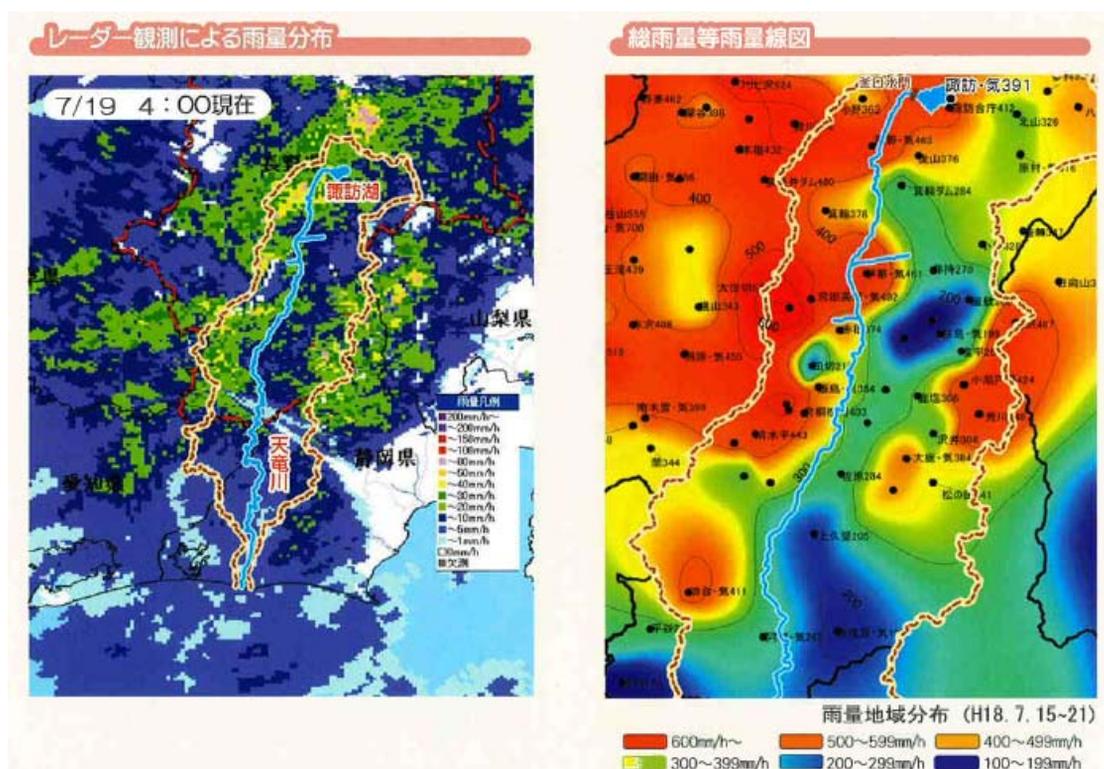


図 31 雨量分布

(国土交通省中部地方整備局・長野県(2007):平成 18 年 7 月豪雨 諏訪湖・天竜川河川激甚災害対策特別緊急事業 天竜川河川災害復旧助成事業.より)

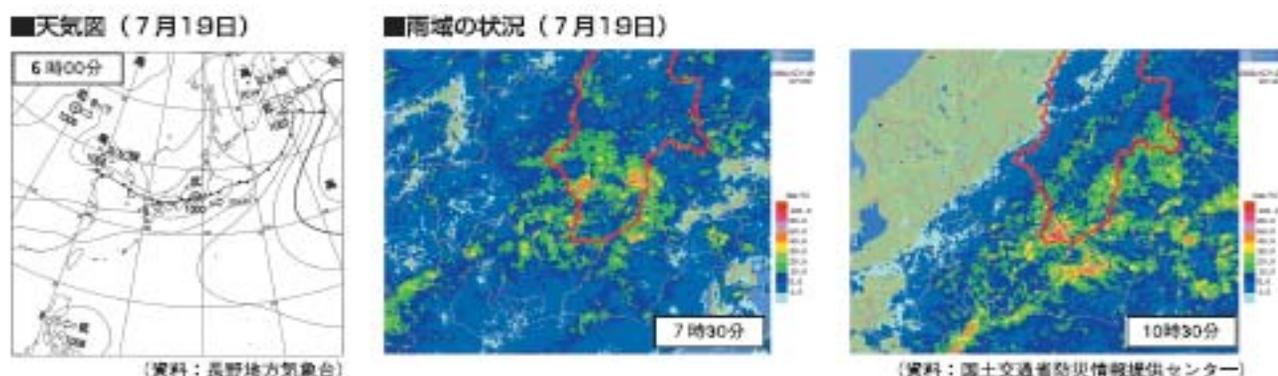


図 32 天気図および雨域

(国土交通省中部地方整備局天竜川上流河川事務所資料(2006):

平成 18 年 7 月豪雨の記録 天竜川上流の出水より)

## 【2】 災害の特徴

長野県下で発生した災害は、100カ所を超えるが主として北部域に地すべり、中・南部域に崖崩れ、土石流または土砂流出が発生した。特に人的被害が集中している場所は諏訪、上伊那北部域である（シンポジウム～平成 18 年 7 月豪雨と上伊那の土砂災害～実行委員会(2007): シンポジウムの記録 平成 18 年 7 月豪雨と上伊那の土砂災害 未来への提言、より）。

岡谷市では土石流により住宅が流され 8 名が死亡、辰野町では土砂崩落により 2 名が死亡した（内閣府「7 月 4 日からの梅雨前線による大雨の被害状況について(第 9 報)」([http://www.bousai.go.jp/kinkyu/060710\\_baiuzensen/baiuzensen09.pdf](http://www.bousai.go.jp/kinkyu/060710_baiuzensen/baiuzensen09.pdf))より）。

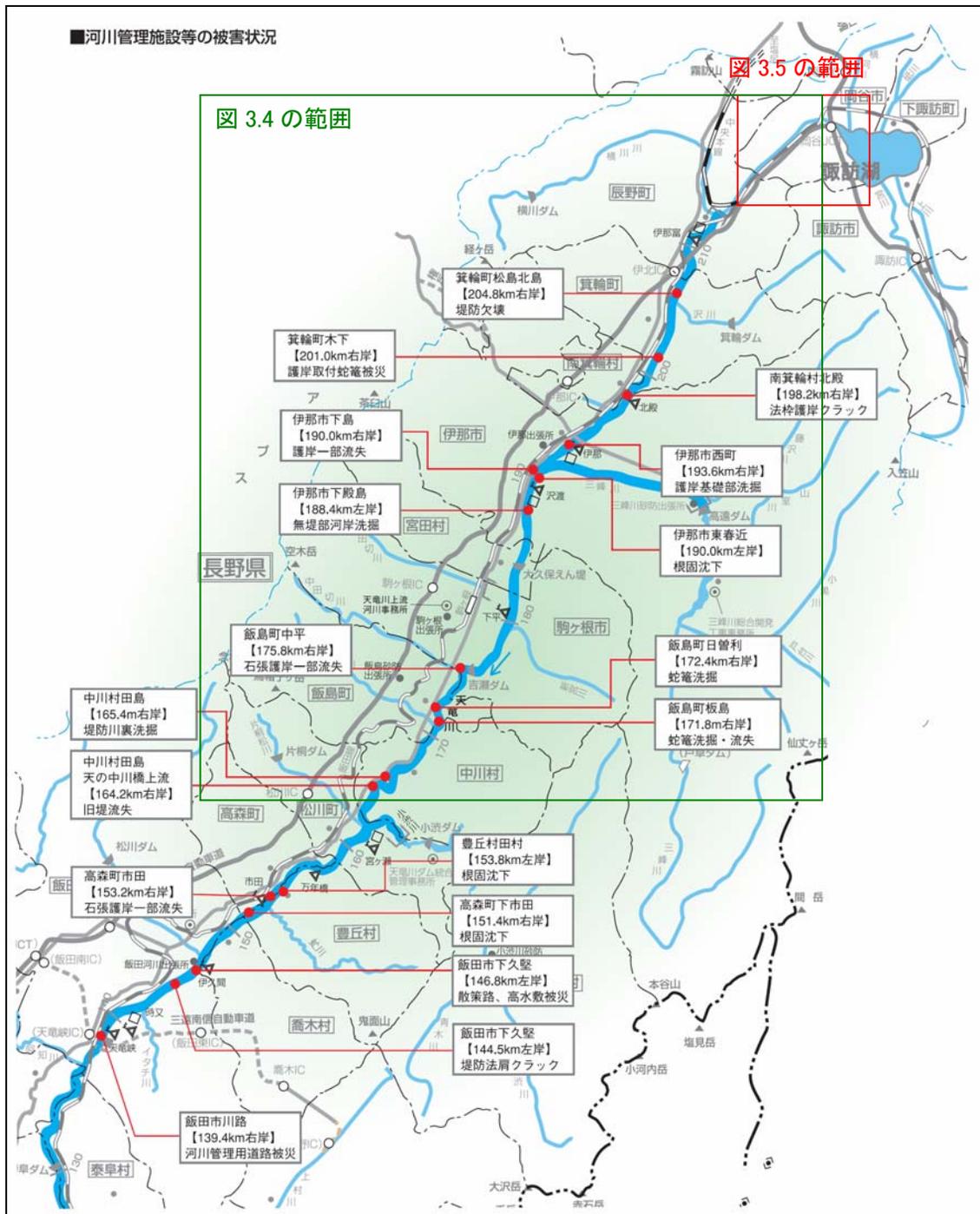


図 33 河川管理施設等の被害状況

(国土交通省中部地方整備局天竜川上流河川事務所資料(2006):

平成 18 年 7 月豪雨の記録 天竜川上流の出水より)

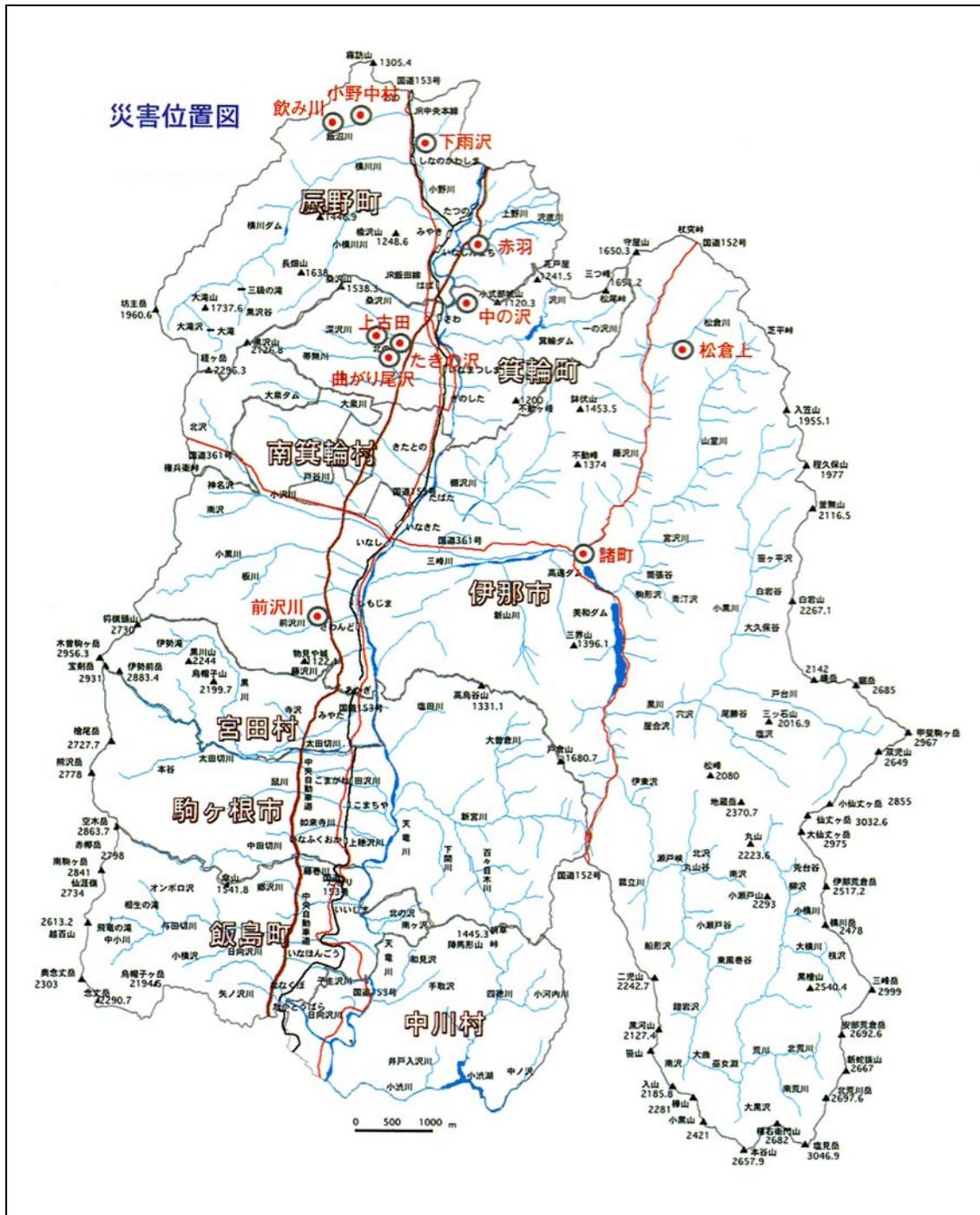


図 34 上伊那地方の災害位置図

(シンポジウム～平成 18 年 7 月豪雨と上伊那の土砂災害～実行委員会(2007):シンポジウムの記録 平成 18 年 7 月豪雨と上伊那の土砂災害 未来への提言より)

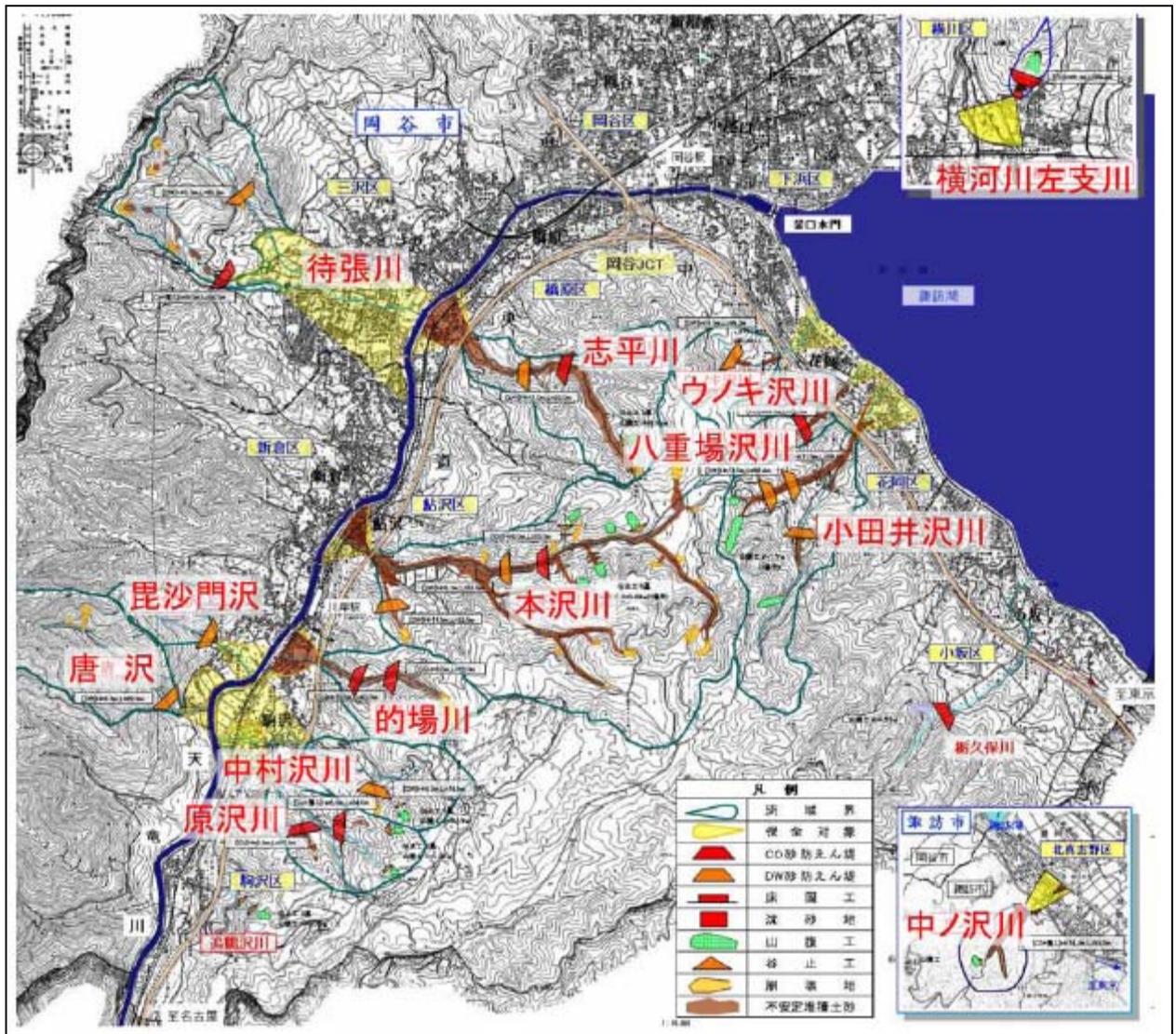


図 35 諏訪建設事務所管内災害関連緊急砂防事業位置図

(長野県諏訪建設事務所ウェブサイト「平成 18 年 7 月豪雨災害の記録 災害関連緊急砂防事業、砂防激甚災害対策特別緊急事業について」

(<http://www.pref.nagano.jp/xdoboku/suwaken/1807saigai/sabo.htm>)より)

### 【3】主な被害

#### ○岡谷市上ノ原の土石流災害（岡谷市）

岡谷市上ノ原の横河川で土石流が発生。



図 36 土石流被害にあった上ノ原小学校

((独)土木研究所土砂管理研究グループ(2006):平成 18 年 7 月長野県岡谷市で発生した土石流災害発生箇所への派遣について,

<http://www.pwri.go.jp/team/volcano/nagano-okaya/okaya.htm> より)

#### ○岡谷市湊 3 丁目の土石流災害（岡谷市）

岡谷市湊 3 丁目の小田井沢川で土石流が発生。死者 7 名。



住宅地を襲った土石流

行方不明者の懸命な捜索

図 37 岡谷市湊 3 丁目(小田井沢)の被害状況

(長野県土木課(2006):長野県 7・16～19 梅雨前線豪雨災害 土石流・地すべり・がけ崩れ速報より)

○志平川の土石流災害（岡谷市）

岡谷市橋原の志平川で、土石流が住宅地を襲った。1名死亡。



住宅地を襲った土石流



住宅地に土石流が氾濫

図 38 岡谷市橋原(志平川)の被害状況

(長野県土木課(2006):長野県 7・16～19 梅雨前線豪雨災害 土石流・地すべり・がけ崩れ速報より)

○中ノ沢川の土石流災害（諏訪市）

諏訪市北真志野の中ノ沢川で、土石流が発生。



土石流で閉塞した河道



土石流が道路に氾濫

図 39 諏訪市北真志野(中ノ沢川)の土石流被害状況

(長野県土木課(2006):長野県 7・16～19 梅雨前線豪雨災害 土石流・地すべり・がけ崩れ速報より)

○小野中村の崩壊（辰野町）

辰野町小野中村で崩壊が発生し死者 1 人、全壊 2 戸。



住宅の裏山で大規模ながけ崩れ



崩れ落ちてきた多量の土砂

**図 40 辰野町小野中村の斜面崩壊**

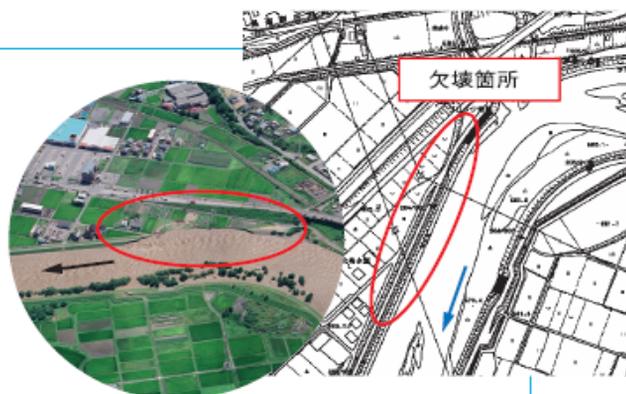
（長野県土木課(2006):長野県 7・16～19 梅雨前線豪雨災害 土石流・地すべり・がけ崩れ速報より）

○松島北島の堤防決壊（箕輪町）

箕輪町松島北島の天竜川右岸の堤防が決壊。



箕輪町松島北島地区（天竜川右岸204.8km地点）



**図 41 箕輪町松島北島地区の決壊**

（国土交通省中部地方整備局天竜川上流河川事務所資料(2006):

平成 18 年 7 月豪雨の記録 天竜川上流の出水より）

## (6) その他の災害

### ① 地震

天竜川上流域における主な地震災害についてとりまとめた。



図 42 本項に示した地震災害の地点

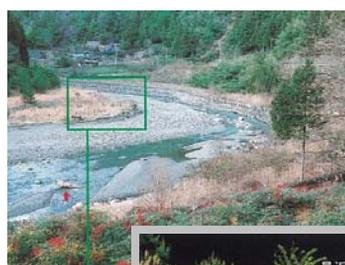
○遠江地震 (M6.5~7.5) 和銅七年五月二十五日 (714.7.15)による池原崩れ (飯田市南信濃) : 地点 A

地震により、池口川左岸の日陰山が崩れ、池口川を堰止め 1 つ目の天然ダムを作った。さらに下流へ下った岩石が右岸側の尾根を乗り越えて遠山川に流れ込み、川を堰止めて 2 つ目の天然ダムができ、その天然ダムに沈んでいった森がしだいに土砂に埋まり、埋没林になったと考えられている。

現在、旧南信濃村西島地区～木沢地区にかけての遠山川約 1 キロ間で確認できる埋没林は、西暦 714 年に水没したことが年代測定により判明した。『続日本記』や『扶桑日記』

あらたまがわ

に記される「遠江地震で山が崩れ、匏玉川 (天竜川の古名) を塞ぐ、水そのため流れず、数十日を経て決壊し・・・」とあるものは、遠山川での出来事を指していると考えられる (寺岡義治・松島信幸・村松 武(2006):遠山川の埋没林-古代の地変を未来の警鐘に一.より)。



● 地点の現況写真

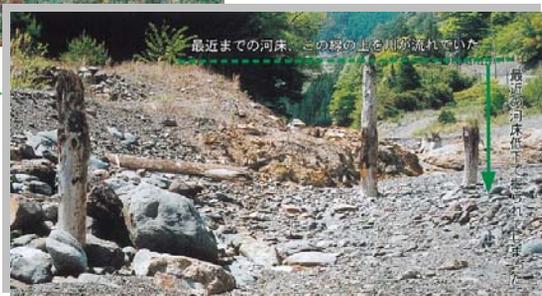


図 43 池原崩れの災害状況図と現況

(寺岡義治・松島信幸・村松 武(2006):遠山川の埋没林-古代の地変を未来の警鐘に一.より)

○天正地震(M7.8) 天正十三年十一月二十九日 (1586.1.18)による桑畑沢の崩壊 (清内路村上清内路) : 地点 B

桑畑沢源流部の斜面崩壊堆積物中の埋れ木は年代測定から、天正地震と一致している。この時の崩壊で天然ダムを形成した。

くましる かわの

○宝永地震(M8.6) 宝永四年十月四日 (1707.10.28)による喬木・神稲・河野の崩れ (喬木村・豊丘村) : 地点 C

高森町下市田の上原彦右門の『歳中行事』に、「午下刻 (午後 1 時) 申酉 (西南西) 方より大地震おびただしき事近年希成事共也 我家の下道動り破長さ七間程 其外東山々のなぎ一同ニ方々崩 土煙四方に立ち見ゆる」と記録が残っている(国土交通省中部地方整備局富士砂防事務所(2007):富士山周辺の地震と土砂災害.より)。

もりへいざん

○遠山地震(M7.0) 享保三年七月二十六日 (1718.8.22)による盛平山の崩壊 (飯田市南信濃和田) : 地点 D

盛平山(森山)の西方斜面が崩壊し、圧死者 5 人を出した。崩壊土砂が北側の押し出し沢から流出した土砂とともに、遠山川を堰止め、「出山」(和田小学校北方の小峰)とよばれる小山をつくり、天然ダムを形成した。天然ダムは、およそ 1 週間後に決壊し、一夜で広い河原をつくった (現夜川瀬部落) (国土交通省中部地方整備局富士砂防事務所(2007):富士山周辺の地震と土砂災害.より)。

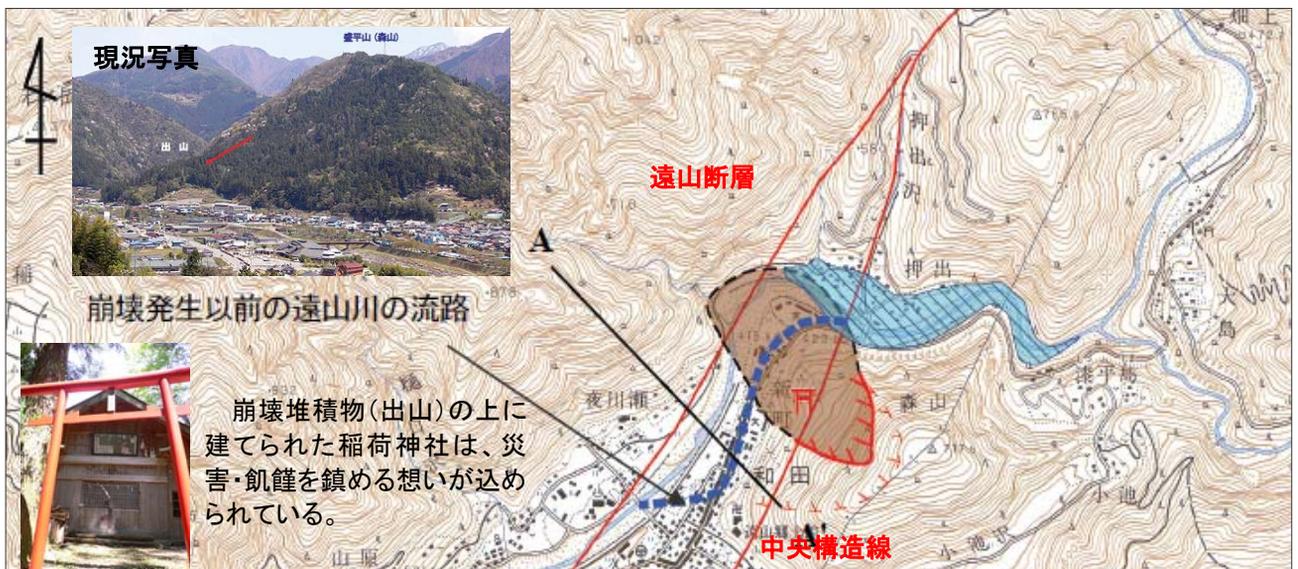


図 44 盛平山の災害状況図と現況

(国土交通省中部地方整備局富士砂防事務所(2007):富士山周辺の地震と土砂災害.より)

○遠山地震(M7.0) 享保三年七月二十六日 (1718.8.22)による鶯巣村の崩壊 (天龍村鶯巣) : 地点 E

『鶯巣宏重氏文書』に、山や田畑石垣残らず崩れ、家屋敷破壊して死者 7 人とある。

○遠山地震(M7.0) 享保三年七月二十六日 (1718.8.22)による坂部村の崩壊 (天龍村坂部) : 地点 F

『熊谷家伝記』に、山から跳ねてきた石に当たって死亡した者は坂部と隣村の愛知県富山間で 50 人余とある(国土交通省中部地方整備局富士砂防事務所(2007):富士山周辺の地震と土砂災害.より)。

○遠山地震(M7.0) 享保三年七月二十六日 (1718.8.22)による満島村の崩壊 (天龍村満島) : 地点 G

『天龍村遠山家文書』に、「御番屋石垣共建家共悉震潰し山崩二而押埋申候」とある(国土交通省中部地方整備局富士砂防事務所(2007):富士山周辺の地震と土砂災害.より)。

○安政東海地震(M8.4) 安政元年十一月四日 (1854.12.23)による阿南町の山崩れ (阿南町各所) : 地点 H

各地で山崩れ、落石発生、家屋倒壊(国土交通省中部地方整備局富士砂防事務所(2007):富士山周辺の地震と土砂災害.より)。

○昭和東南海地震(M7.9) 昭和 19 年 12 月 7 日 (1934.12.7)による諏訪盆地の被害 : 地点 I

東洋バルヴ・北沢工業・日本無線の工場が倒壊し、田んぼ全体に起伏が起こり波のように動いた。中央気象台は「極秘東南海地震調査概報」で震央から 320 キロも離れた諏訪市を異常震域と発表した。

この理由として、第 1 に、諏訪盆地が糸魚川―静岡構造線上にあるため地盤は不安定であり、平坦部は砂・粘土・有機物の腐食土が厚く堆積した軟弱地盤であるため、東南海地震の時には震幅 5 秒近い大揺れがでたものと考えられている。(信州大学教授島博士による)

第 2 にこのときの地震波が西南側断層とほぼ直角の形で諏訪盆地に入り、東北側の断層に突き当たり反転し、さらに西南側と断層間の反復反射を重ね増幅されることによって大きな表面波が生まれたことが挙げられる (東南海地震体験者の会・宮坂五郎・飯田悦司 (1994) 東南海大地震記録集.より)。

## ② 火災・干ばつ・濁水・雪害

### 【1】火災

本地域における著名な火災を以下に示す。

- 貞享元年六月十日（1684.7.22）飯田池田町の又助火事
- 宝暦十二年三月十八日（1762.4.12）飯田堀端鳴海屋源七より出火、439戸消失
- 天明三年二月晦日（1783.4.1）飯田の池田町角の淀屋半六借家庄之助方から出火し、田町、番匠町、松尾町2～3丁目、本町2～3丁目、知久町2～3丁目の町家705軒を消失した(村沢武夫(1983):伊那谷の災害と凶作.より)。
- 文政六年十二月二十三日（1824.1.23）飯田箕瀬町床屋岡田屋金之助借家より出火、13町1127軒消失。
- 明治元年七月二十五日（1868.9.11）飯田大火 95戸焼く
- 昭和22年（1947）4月20日 飯田大火  
下町の古い面影を残す市街地の3分の2近くを焼失させた。被害も焼失戸数3,577戸、罹災人口17,800人と甚大なものであった。



図 45 昭和22年大火 発火直後、鼎村(当時)より望む

(飯田市水道局：[http://www.city.iida.nagano.jp/suidou/rekisi/j\\_rekisi/j\\_rek\\_c.html](http://www.city.iida.nagano.jp/suidou/rekisi/j_rekisi/j_rek_c.html)より)

### 【2】干ばつ・濁水

- 寛政三年七月（1791.8）大干ばつ
- 明治7年（1874）7月 大干ばつ
- 大正13年（1924）6～8月 大干ばつ
- 昭和42年（1967）5月～6月 天竜川濁水
- 平成13年（2001）8月 飯田市干ばつ
- 平成17年（2005）6月 天竜川濁水

### 【3】雪害

- 昭和3年（1928）2月11日 飯田市内で降雪2尺。
- 平成10年（1998）1月15日 雪害 諏訪市全域で被害。
- 平成13年（2001）1月27日 雪害 飯田線（辰野～天竜峡）運休等被害大。  
(村沢武夫(1983):伊那谷の災害と凶作、国土交通省災害情報（記者発表）より)

### 3-3 災害体験談のヒアリング調査

#### (1) ヒアリング調査の概要・結果

今回、過去の災害体験者の生の声を収集し、今後、流域内で伝承していくべき災害教訓を抽出するため、ヒアリング調査を行った。また、ヒアリング調査とあわせて資料収集や現地調査も行った。以下に、ヒアリング結果の概要と実施結果を記載した。なお、ヒアリング対象者の一覧とヒアリング概要は参考資料-4に整理した。

表 6 ヒアリング調査の概要

目的	<ul style="list-style-type: none"> <li>・災害体験者の生の声を収集し、失われつつある当時の状況を保存</li> <li>・今後、流域内で伝承していくべき災害教訓を抽出</li> </ul>
実施時期	平成 19 年 12 月末～平成 20 年 1 月末
対象者数	<p>48 組（延べ 61 名）（地区別内訳は次項の図、ヒアリング対象者属性等の詳細は参考資料-4 を参照）</p> <p>※上記（48 組）のほか、街頭インタビュー（5 名）も実施した。</p>
ヒアリング項目	<p>以下項目に従いヒアリングを実施した。</p> <p><u>1. 昭和 36 年、58 年、平成 18 年 7 月災害などの被災当時の状況・心情について</u></p> <p>①雨が降り始めたときのまわりの状況 / ②雨が降りはじめた時のあなたやまわりの人たちの行動 / ③雨の勢いの変化 /</p> <p>④川の水位が上がってきたとき、災害に直面したときのあなたやまわりの人たちの行動 / ⑤避難の有無とその時のあなたやまわりの人たちの状況</p> <p><u>2. 教訓伝承について</u></p> <p>①被災前後で、あなたやまわりの方々の日常生活や生活習慣で変化したこと。また、大雨や災害に対する考え方や行動の変化について。</p> <p>②平成 18 年 7 月の災害時、過去の災害での経験や教訓で活かされたこと。</p> <p>③活かされた教訓を学んだきっかけ。また、覚えていた理由。</p> <p><u>3. 地域に語り継がれている災害に関する話について</u></p> <p>・住んでいる地域で昔から語り継がれている災害に関連する話について。（大雨、洪水、土砂災害、地震など）。また、役に立った話について。</p> <p><u>4. その他</u></p> <p>・これまでに災害を経験して、次世代に向けてこれだけは言っておきたい、伝えておきたいこと。（小さい子どもたちに対して特に言いたいこと。）</p> <p>・その他、将来に備え、行っていること、感じていることなど。</p>

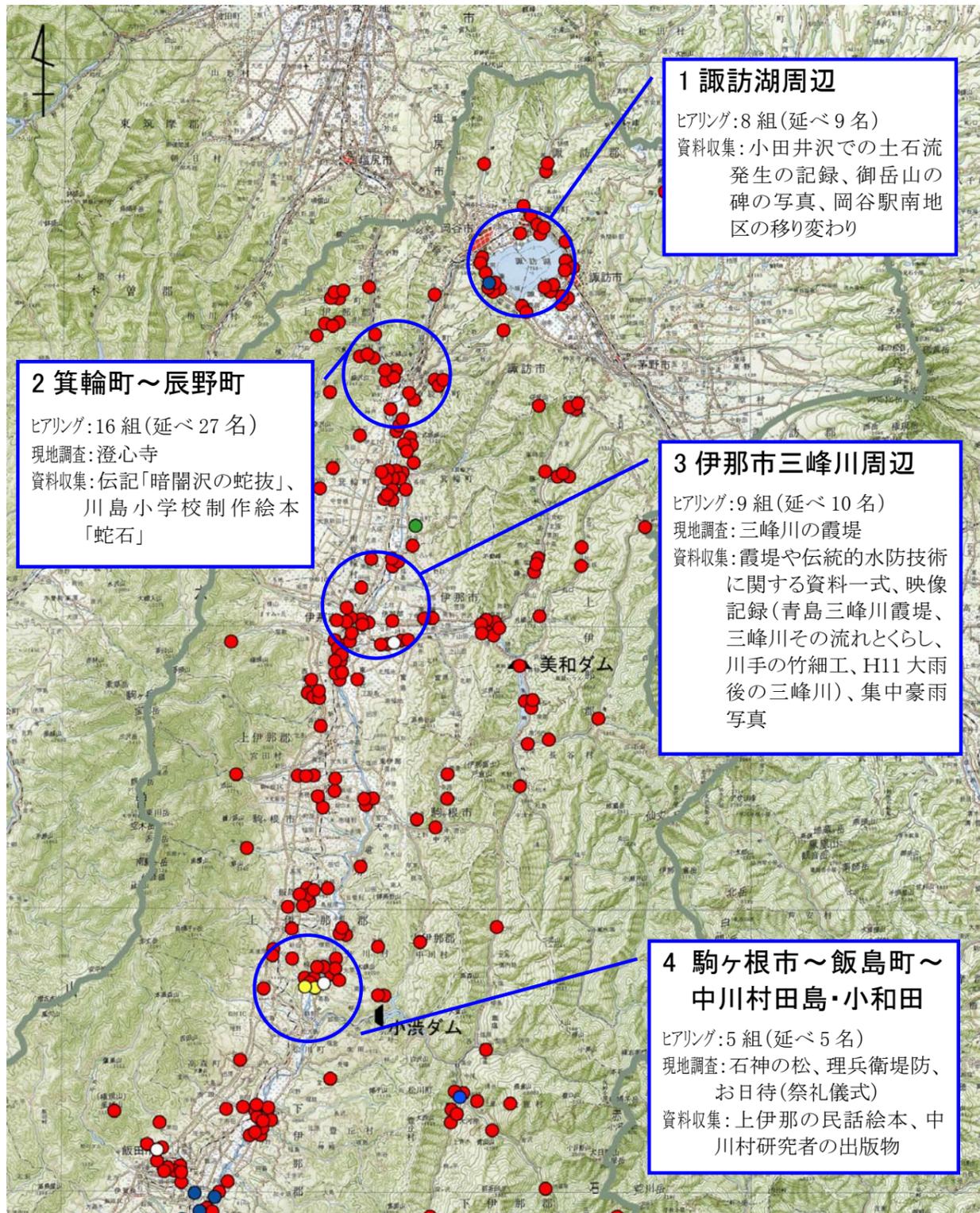


図 46 現地詳細調査地域の位置(諏訪～上伊那)

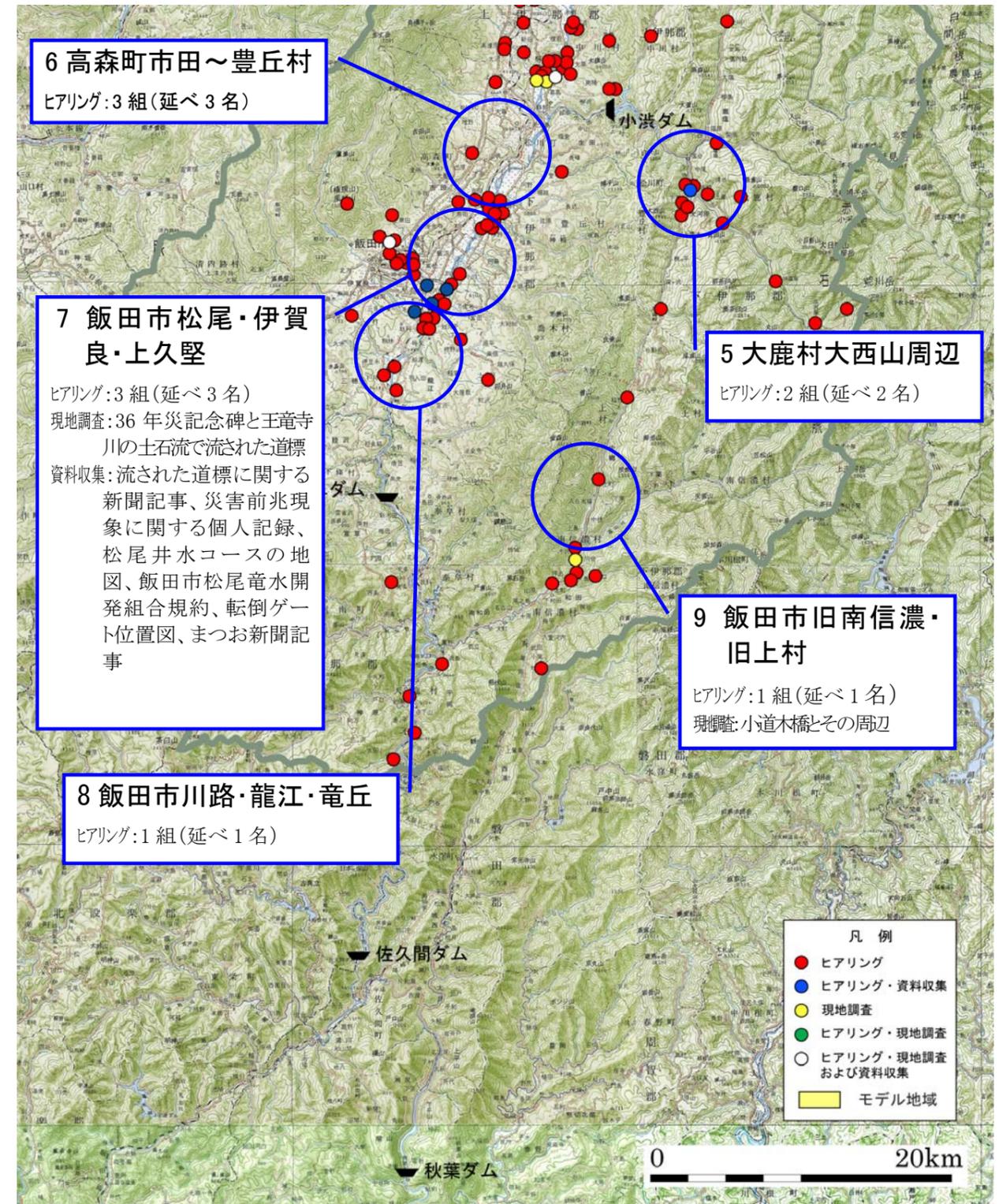


図 47 現地詳細調査地域の位置(下伊那～以南)

災害体験者より、災害当時の状況をヒアリングした内容を抜粋すると以下ようになる。  
また、今回のヒアリング調査では災害体験者の体験談の映像を収録し、その中から話を  
いただいた内容を6種類のテーマに分類し、それぞれのテーマに沿ったDVDを作成した。

### 体験談その1 (Hさん／飯田市／36 災)

方々の土手が崩れてきて、低い橋に流れてきた材木や小屋が詰まって次第に水が溢れてだんだんと大きな災害になった。その時の勤め先近くの松川の堤防が崩れるということで従業員が集められ、木や竹を切ってきて土手が流れないように半日ぐらい止めていた。その後家に帰ったら大変なことになっていた。職場から家へ向う途中、井水が方々で氾濫し始めていたので急いで家に戻った。目の前で自分の田植えをしたばかりの田んぼが流されてしまい、田んぼを守るために腰丈まである濁流の中に飛び込んだ。目の前で流されていく田んぼを見て涙がでてきた。

雨が止みかけて家の方の災害も大分収まったので今宮やげんちょう川を見に行き行って惨状を見てびっくりした。自然災害の恐ろしさに勝てないと感じた。行政の面で力を入れて守っていかねばならないことと感じた。

市町村単位では対応できないぐらいの大災害であったが、国をあげて復興してくれた。「権現山(虚空蔵山)にひびがはいったから気をつけろ」ということもあり、10日間ぐらいは逃げ惑っていた。自衛隊がきてくれたので安心したりが、「会社は大丈夫か」ということを気にしていたので先のことは考えられなかった。

### 体験談その2 (Nさん／飯田市／36 災)

堤防の上から手が洗えるぐらいのところまで水位が上がっていた。その時天竜川上流河川事務所にて、太田切川を流れる石の音を聞いて「いやいやすごいなあ」と思った。

28日朝方の雨で「こりゃあぶないぞ」と職場の中でも話が持ち上がっていた、それから破堤の情報や交通遮断の情報が電話で入ってくるようになった。事務所全体では災害復旧ができないということで、他の地建から派遣してもらい対応した。

小渋川と青木川の氾濫原のど真ん中に建てられていた小渋川砂防事務所が大西山の崩壊に巻き込まれ5名の職員が犠牲となった。当初右岸側の斜面が地すべりで落ちてくるということで注意していたが、2人の職員が小渋川の水がおかしいということで大西山に向かって見に行った時に山が崩れ行方不明になり、建物もつぶれてしまった。全体では44名の方が一瞬のうちに犠牲となった。

7月に実施した痕跡調査で川路に行った時、人々が打ちひしがれてしょんぼりしていた。周囲は洪水で埋もれたものが腐って異臭をはなっていた。

災害は人々に途端の痛みを与える、災害というのはこんなにひどいものかということを実感した。

### 体験談その3 (Oさん／岡谷市／H18 災)

今までにない降り方だった。土砂災害が起こって対応のために沢に行こうとしたが下は水浸しで行けなかった。住民が湊小学校に避難することになったので準備を指示した。軽トラで水の中を走り、寺に行って下を見た。二名の行方不明者が出ていて、えらいことになったと思った。対応のために湊小学校に行こうとして消防団に止められた。家の塀伝いに歩いて行って土砂にはまり、滑って土砂の中に転んで、戻ってまた同じ目にあった。なんとか小学校にたどり着いた。何とかしなければという気持ちだけだった。

上から下に逃げた人が犠牲になり、横に逃げた人は助かった。先に逃げた人たちが声をかけていたおかげで助かった。避難所でもみんなずぶぬれだった。泣いている人もいたが、無事だった家で炊き出しをして持ってきてくれた。

避難所の人たちは家の周りの状況を知りたがったが、情報がなかったので、市に話をして毎夜情報を話した。避難所にしきりが必要だと思ったので、教室を空けてもらって、知り合い同士などで入ってもらうなどした。

結局 7 名の方が亡くなったが、近所の人のおかげですぐ身元がわかった。隣組を面倒くさがる人もいるが、お互いに声を掛け合うことが大事だと感じた。

### 体験談その4 (Iさん／伊那市／H18 災)

14 日、15 日ぐらいから雨が續いていて、平成 11 年の長雨の時のような感じに似ていた。17 日の朝降り始めた時に、「もうこれはおかしいな」と思い、警報が出る前に登庁した。

自分の住んでいる西春近の高台の辺りでは、傾斜地だけれど地質の関係である一定量の雨が降ると地面が耐え切れなくなって水が出てくる川があるが、普段はカラで水がないがある程度長雨が降ると水がでてくる、これに近いような状況だったので感覚であぶないなと分かった。

18 日夕方に災害対策本部を設置、西高速で土砂崩れ発生が発生した。釜口水門の放水量を見る中で浸水想定区域内の避難準備情報について災害対策本部の中で検討しだした。災害対策本部のホワイトボードに随時書き込まれる北殿の水位情報が危険水位を超えて何分後には計画高水位を超えそうだという状況もある中で、自主避難→避難勧告→避難指示発令と進めていった。空の様子を見て、何か災害が起きそうだという覚悟が決まった。

19 日、「前沢川があぶない」と通報があった。中央道が通行止めになり、下道で交通渋滞がおきて職員が現地へ行くのに時間がかかった。避難所へ避難した人たちは約 3,200 人程度だった。それ以外に近所や親戚の家に避難した人もいたので、約 10,000 人近い方が移動した。

かつて経験したことがない土石流が発生するとは想像がつかなかった。今から思うと「できれば担当は変りたいぐらい」な災害だった。

## (2) ヒアリング調査より得られた災害教訓

ヒアリング調査を通じて得られた伝承すべき内容を、①個人における災害に対する認識や行動の様態・あり方、また②地域社会の災害に対する様態・あり方に着目して整理すると以下ようになる。

### ① ヒアリング調査より得られた教訓

(個人における災害に対する認識・行動の様態・あり方)

	ヒアリング調査結果(体験談)	伝承すべき内容
災害時 行動	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「南風だと三田切が出る、北風だと三峰川が出る」といわれていて、三田切から出た水は茶色く、三峰川から出た水は青っぽい(Mさん/中川村大草)</li> <li>・白っぽい水なら三峰川の水が出ているということ。黒っぽい水なら西山の奥が荒れている。H18年災の時の洪水の色は真っ黒だった(Kさん/駒ヶ根市赤須町/H18年災)</li> <li>・天竜川の中で岩がぶつかりあって火花が見え、音を聞いて恐かった(Hさん諏訪市上川)</li> <li>・天竜川は洪水の時、青白く光って見える。H18年災のときも見えた(Mさん/中川村大草)</li> </ul>	天竜川の出水時に特徴的な川の色や様子により、 <u>災害の予兆や危険性を伺い知る</u> ことができる
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・堤防が決壊しそうだ、という情報を受けて新潟の長岡水害の光景を思い出し、堤防が決壊すると一面水浸しになるのではないかと、という状況を想像した。(Hさん/箕輪町中箕輪/H18年災)</li> <li>・地域を観察して、災害の予知能力を高めて欲しい。川の流量、色、音、臭いで注意できる能力を、学んで伝承して欲しい。予想したらどう対処するかを学ぶこと。(Nさん/下諏訪町社)</li> </ul>	出水状況などから <u>起こりうる災害の様態をイメージする能力を養う</u> ことが重要である
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・増水に関しては、いつも中条橋を自分の基準にしている。ここでは、57年災と同じくらいの水量だった(Iさん/伊那市西高遠/H18年災)</li> <li>・藤沢川と三峰川の合流点の弁才天橋にほこらがあり、「ここまで水が来ると危ない」という指標になっている。藤沢川と松倉川との合流点にもあると聞いている(Iさん/伊那市西高遠)</li> </ul>	過去の出水の状況や水位から、 <u>災害の予兆や危険性を伺い知る</u> ことができる
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・堤防の後側から水が出てきたからおかしいと思ったら、堤防の下を濁流がえぐっていた。水が濁っているため川底が見えなかった(Kさん/伊那市美篤/36年災)</li> <li>・へんなところから水がでてたら気をつける(Mさん/松本市島立)</li> <li>・小さな沢では水が濁る、木が揺れるなど何らかの前兆がある(Mさん/伊那市長谷溝口)</li> <li>・57年災等の教訓から人的被害がないように避難に関して<u>早めの対応を心がけた</u>(Iさん/伊那市高遠)</li> </ul>	異変に気づき <u>早め早めに判断・行動することが重要</u> である
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・橋に木が引っかかって水が溢れていたのを、住民が決壊と間違えて通報してきた(Iさん/伊那市伊那部/H18年災)</li> <li>・H18年災時、ダムアップしていた辰野町小横川の崩壊地の写真を撮りに行き、二次災害の犠牲となった(Yさん/辰野町中央/H18年災)</li> </ul>	災害時の異常現象に対する <u>認識が不十分であったための確な行動をとることができなかった</u>

	ヒアリング調査結果(体験談)	伝承すべき内容
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・権現沢の山が動いて住民が避難した(I さん/伊那市西高遠/36年災)</li> <li>・大西山が崩壊して、ここも危ないという恐怖感から避難の行動にでた(K さん/大鹿村大河原/36年災)</li> <li>・市野瀬では皆自主的に高いところへ避難していた(N さん/伊那市長谷溝口/36年災)</li> <li>・今のような広域避難所はなく、自分の判断で避難をしていた(N さん/飯田市松尾/36年災)</li> </ul>	<p><u>状況を察知して恐怖感を抱くことが適切な行動に結びつく</u></p>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・山が鳴ったら山裾にいないで山へ登れ(T さん/伊那市伊那)</li> <li>・上から下に逃げた人が犠牲になった。横に逃げた人は助かった。先に逃げた人たちが声をかけていって助かった(O さん/岡谷市湊/H18年災)</li> <li>・おばが高森町にある勤め先の学校から大雨の中を帰る途中、鉄砲水がきてとっさの判断で家の陰に隠れて助かった(I さん/中川村片桐//36年災)</li> </ul>	<p><u>過去の土石流に対する避難行動を参考に状況を的確に判断できる能力を養うことが重要である</u></p>
災害時行動	<ul style="list-style-type: none"> <li>・おじいさんの葬儀直後でおばあさんが避難を拒んだため家族は家を守るため避難しなかった(K さん/伊那市美篁/36年災)</li> <li>・当時 80 歳くらいだったおばあさんが「生まれ育った家だし、先祖様が守ってくれる」と言った。おばあさんが逃げないと言うので、家族全員家にいた(N さん/伊那市長谷溝口/58年災)</li> </ul>	<p><u>言い伝えや経験に基づく個人の信念などにより避難行動を阻害されることがある</u></p>
災害に対する日頃の認識	<ul style="list-style-type: none"> <li>・河川は整備されたが、地質のもろさは変わらない。川のそばは怖いと思う(K さん/飯田市山本)</li> <li>・その地域の歴史を知ることが重要。霞堤のあるところは水害の常襲地帯などの認識を持つ(K さん/伊那市伊那部)</li> <li>・その土地の歴史を知って、そこから何を読み取ればよいかを考えることは、地域に生きる上で大事なことだと思う。災害は起こりうるものだという前提で、日頃の備えをし、自分の体は自分で守る意識をもつことが必要だ(M さん/飯田市追手町)</li> </ul>	<p><u>地域の歴史や自然特性を知り、繰り返し災害が起こる土地であるという認識を日頃から持つことが重要である</u></p>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・災害に対する体験や感覚は、山側と川べりでは違う(N さん/飯田市松尾)</li> <li>・長谷に足を向けては寝られないはず、下流にすんでいる人は水に対する恐れを持っていない(N さん/伊那市長谷溝口)</li> </ul>	<p><u>住んでいる場所の違いが人々の災害に対する認識の違いを生み出している</u></p>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・天竜川という大きな川があそこまで水がでるとは想像できなかった(H さん/諏訪市上川/36年災)</li> <li>・災害とは縁がないところというイメージは持っていたので、まさか災害が起きるとは想定していなかった(H さん/諏訪市上川/H18年災)</li> <li>・災害対策本部を設置した当初、土石流というよりは川の氾濫の方に重きをおいていた(Y さん/辰野町中央/H18年災)</li> <li>・36年災時に床上浸水があった地区だが、堆積した土砂等により高くなっていたから大丈夫だと思っていた。58年災時は「まさか」と思っているうちに浸水した(H さん/飯田市松尾明)</li> </ul>	<p><u>災害時には常に想定外のことが起こりうることを予め認識することが重要である</u></p>

	ヒアリング調査結果(体験談)	伝承すべき内容
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「権現山の頭が見えているうちは雨は降らない」(Mさん/飯田市追手町)</li> <li>・「天竜川の川音がよく聞こえると雨」(Mさん/飯田市追手町)</li> <li>・「入笠山で大雨が降ると、山室川が溢れる」(Iさん/伊那市西高遠/36年災)</li> </ul>	<p>気象などに関することわざには災害を未然に防ぐ心構えに対するメッセージが込められている</p>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「くら」「よけ」などの地名があるところは危険(Sさん/長野市南長野)</li> <li>・川の字のつくところに家を建ててはいけない(Kさん/飯田市山本)</li> <li>・崩壊がおきた志平川の上流には、「〇〇窪」という字名が残っている(Sさん/諏訪市上川)</li> <li>・青島地区や狐島地区では「島」とつく地名が多く水害との歴史が語られている(Kさん/飯田市追手町)</li> </ul>	<p>災害と関係する地名の知識を得ることで自分が住む地域の危険性を伺い知ることができる</p>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・昔から伝わる話を話しても、子どもや若者は科学的に証明できないものに聞く耳を持たない(Mさん/中川村大草)</li> <li>・今の若い人は知らないが、天竜川で水遊びをするとき、水際にケルンのような石積みを作っていた。その石積みが見えるうちは大丈夫で、見えなくなったら増水していると判断していた(Mさん/中川村大草)</li> </ul>	<p>子どもや若者に災害にまつわる言い伝えや教訓が浸透していない</p>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子どもたちが天竜川に遊びに行く機会も減り天竜川は自分たちの生活から切り離された別の存在となってきている(Iさん/中川村片桐)</li> </ul>	<p>日常生活と川との距離が遠く、災害に対する意識が薄らいでいる</p>

② ヒアリング調査より得られた教訓  
(地域社会の災害に対する様態・あり方)

	ヒアリング調査結果(体験談)	伝承すべき内容
災害時の対応	<ul style="list-style-type: none"> <li>・区長に避難指示の意向を予め伝えなかったため、後で怒られた。災対本部などには、地元リーダーの参加が不可欠だと痛感した(Iさん/伊那市西高遠/H18年災)</li> <li>・57年災時、高遠三好地区の赤坂集落で副区長の判断で高いところに避難させた直後に土石流が発生した(Kさん/飯田市追手町/57年災)</li> </ul>	住民の避難においては地域リーダーの参画が重要である
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・昼夜問わず消防団員で堤防の警戒にあたった(Kさん/伊那市美篤/36年災)</li> <li>・当時は行政の体制もなかったから、「向こう3軒両隣」という組合が役に立った(Hさん/飯田市松尾明/36年災)</li> <li>・被害に遭われていない近隣の人たちや中高生達が、炊き出しや力仕事を進んで行ってくれた。(Sさん/岡谷市湊/H18年災)</li> <li>・7名亡くなったが、近所の人のおかげですぐ身元がわかった。隣組を面倒くさがる人もいるが、お互いに声を掛け合うことが大事(Oさん/岡谷市湊/H18年災)</li> <li>・市街地のアパートに住んでいる人や住民登録をしないで住んでいる人(移住者、外国人含む)は、自分の住んでいる地区名がわからない人がいた(Eさん/箕輪町中箕輪/H18年災)</li> </ul>	地域の共助による災害への対応が重要である一方で、近年コミュニティの弱体化が進行している
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・伊那市中心部の消防等各機関は、天竜川が増水中のため高遠方面に応援に来ることが不可能であった(Iさん/伊那市西高遠/H18年災)</li> <li>・151号のパトロールをしてから徒歩で3、4時間かけて深沢阿南線を見に行った、道路が無くなりすごい惨状だった(Mさん/松本市島立/58年災)</li> </ul>	不測の事態も想定して災害対応能力を向上させることが重要である
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・迅速な対応をとるために災害現場での事務所としての判断は現場に出向いた経験の豊富な担当者に委ねた。現場での状況判断ができるコンサルタント技術者の力も借りながら迅速な対応ができた(Mさん/松本市島立/H18年災)</li> <li>・急ごしらえで土石流センサーの代わりに水糸を借りて消防団員の見張りを立てた。行政もコンサルタントも現場の状況から即断即決できる技術力を身につけるべき(Sさん/長野市南長野)</li> </ul>	災害時には災害現場で即断即決する知識、技術力が必要である
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・物資や大まかな情報に不足はなかったが、避難した人は何より現地の状況を知りたがっていた。信大の北澤先生や平松先生に避難所で現地の詳細状況を話していただいたことで住民は安心した(Sさん/長野市南長野/H18年災)</li> <li>・避難指示が出て避難してから2時間くらいで、災害状況など情報が知りたいと住民から求められた。(Iさん/伊那市西高遠/H18年災)</li> <li>・避難所となった体育館ではテレビなどの情報入手手段がなく、携帯を持っていないお年寄りや、携帯を持っていてもコンセントが不足し携帯を充電できず使えない人が多かった(Sさん/岡谷市湊/H18年災)</li> </ul>	避難所で住民は詳細な現地情報を求めている

	ヒアリング調査結果(体験談)	伝承すべき内容
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・都会に行っている若い人たちから、役場ホームページ上での情報提供の要望やトラック運転手から、ラジオでの道路情報提供の要望があったなど、<b>町外にいる人への情報提供の重要性</b>を感じた(Tさん/下諏訪町西鷹野町/H18年災)</li> </ul>	<u>地域住民以外への情報提供も重要</u> である
平常時の備え	<ul style="list-style-type: none"> <li>・上流に美和ダム、高遠ダムがあるため安心していた(Kさん/伊那市美篤/36年災)</li> <li>・ダムの整備が進み災害が減り、安心している(Yさん/伊那市美篤)</li> <li>・砂防えん堤ができていたので安心できた。(Nさん/下諏訪町社/H11年災)</li> <li>・美和ダムに材木が大量に流入したが、<b>ダムがあつて良かった</b>と思った(Iさん/伊那市西高遠/36年災)</li> </ul>	<u>ハード対策への依存だけでなく、自助や地域コミュニティにおける共助による災害への準備も重要</u> である
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・昭和34年頃から中川東小学校では、祖父母が子どもたちの教育に関わるよう「祖父母の会」が組織されていた。<b>この組織が全面的に学校に協力し、災害時にも機能した</b>(大雨・台風時の祖父母付き添いによる下校、パトロールなど)(Mさん/中川村片桐/36年災)</li> <li>・北小河内地区の中で災害後、土日にボランティアを募集したら各家から一人ずつ以上のボランティアが出てきた。これは<b>地域の日ごろからのつながり</b>(お任せボランティア制度、お茶のみ会、帰宅児童の見守り活動など)がある故だと思ふ(Mさん/箕輪町東箕輪/H18年災)</li> </ul>	<u>平常時における地域でのコミュニティ活動が災害時に力を発揮する</u>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・いざというときに役立つ技術を学んでおく必要があると思う。<b>昔の技術を知る最後の世代</b>だと思うが、新しい技術教訓も伝えていかなければならない(Iさん/伊那市伊那部)</li> <li>・不安に思うようなことは無かったが、ダムもできて、<b>伝統的な水防技術がなくなりつつあった</b>(Yさん/伊那市美篤/45年災)</li> <li>・木流し工法の要請が来て、災害時に木を切り出していい場所を決めていたが、消防団の若者達で<b>実際に木流し工法をするのは危険だ</b>ということでやらずにトンパックで対応した(Hさん/箕輪町中箕輪/H18年災)</li> </ul>	<u>廃れつつある地域に残る水防技術を確実に継承していく必要がある</u>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「広葉樹は切ってから10年ぐらいたつと根が腐り始めるので、そこに水がまわると流れやすい」と森林組合のおじさんから聞いた(Kさん/駒ヶ根市赤須町/58年災)</li> <li>・単一樹種ではなく<b>混合林を作り、根張りのよい木の山</b>にしないと災害を防げない。ダムを作るのは重要だが、カラマツ林の手入れをしないために、災害時に流木となって被害を大きくしている。(Nさん/伊那市長谷溝口)</li> <li>・ダムだけではなく山の保全も重要。<b>手入れはボランティア</b>がしているので、国の助成もあつて欲しい(Oさん/伊那市伊那部)</li> </ul>	<u>流域全体での災害に強い地域を構築するうえで、山林づくりや保全活動が重要</u> である

### 3-4 災害教訓伝承ツール紹介

上述した流域内の既往災害の実績や災害教訓伝承の調査結果をもとに、天竜川上流域における実践で活用できるように災害教訓伝承ツールを作成したので内容を紹介します。この伝承ツールは天竜川上流河川事務所 HP より利用が可能である。

#### (1) 災害教訓伝承ビデオ

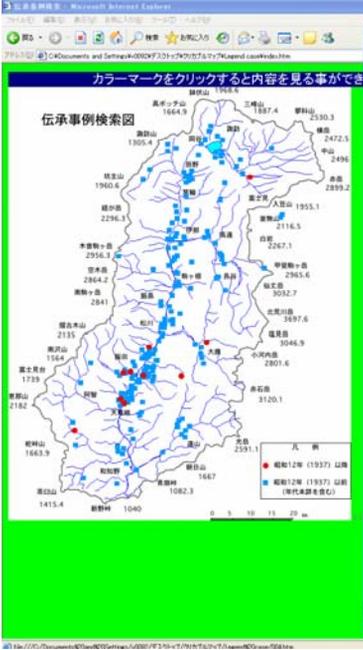
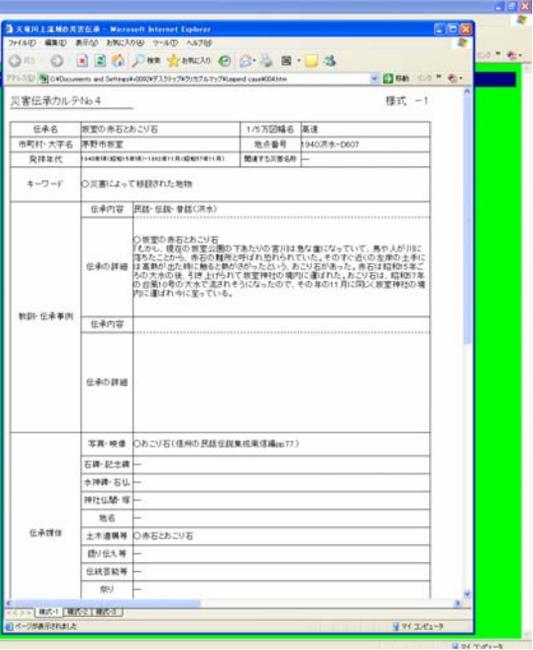
目的	子ども(小学校高学年以上)から大人までを対象とし、無関心から気づきへ到達するための働きかけを行うこと目的とした。なお、地域リーダーなど意識レベルが高い層の場合、映像を見ることにより気づきから正しい理解、さらに利用の仕方によっては適切な判断・行動まで至ることも想定した。
訴求対象	子ども、子育て世代、働き盛り世代、地域リーダー
災害意識	「気づき」(意識レベルが高い層には「正しい理解」「適切な判断・行動」まで)
概要	災害当時の状況を具体的に伝えていただいた人物を 25 人程度選定し、話をしていただいた内容を 6 種類のテーマに分類し、それぞれのテーマに沿った 30 分程度の DVD を作成。
テーマ	<p>「語り部に聴く 天竜川の災害と教訓」</p> <p>平成 18 年 7 月豪雨災害 ～諏訪・岡谷周辺～</p> <p>平成 18 年 7 月豪雨災害 ～辰野・箕輪周辺～</p> <p>平成 18 年 7 月豪雨災害 ～伊那周辺～</p> <p>伝えたい災害とお話し ～伊那周辺～</p> <p>伝えたい災害とお話し ～飯田周辺～</p> <p>伝えたい災害とお話し ～駒ヶ根・中川周辺～</p>
構成	 <p>(冒頭)</p> <p>この記録は 天竜川流域で繰り返し起こった水害や土砂災害の 恐ろしさを 体験された方たちの 貴重なはなしを収録したものである ここで語られるはなしから 私たちは災害に立ち向かう知恵を学び そして、この記録を 将来再び訪れるであろう災害に備える ための次世代への教訓としたい</p> <p>(タイトル)</p> <p>語り部に聴く 天竜川の災害と教訓 平成 18 年 7 月豪雨災害 ～諏訪・岡谷周辺～</p> <p>(エンドおさえ)</p> <p>監修 天竜川上流域災害教訓伝承手法検討会 検討会 企画 国土交通省中部地方整備局 天竜川上流河川事務所 製作 日本工営株式会社</p> <p>この記録は 天竜川流域で繰り返し起こった水害や土砂災害を 体験された方たちの貴重なはなしを 収録したものである ここで語られるはなしから 私たちは災害に立ち向かう知恵を学び そして、この記録を 将来再び訪れるであろう災害に備える ための次世代への教訓としたい</p> <p>冒頭はコンセプトである文章が ロールアップ</p> <p>天竜川の穏やかな画像を背景 に、H18災はじめ36災・58災 などの写真が断片的に入る</p> <p>タイトルライン</p> <p>「語り部に聴く 天竜川の災害と教訓」 平成18年7月豪雨災害 ～諏訪・岡谷周辺～</p> <p>本編 (取材内容の要約編集)</p> <p>人物映像</p> <p>Q 災害対応時の様子はど んな感じでしたか?</p> <p>Sさん (岡谷市澳勤務)</p> <p>エンドおさえ</p> <p>監修 天竜川上流域災害教訓伝承手法検討会 企画 国土交通省中部地方整備局 天竜川上流河川事務所 製作 日本工営株式会社</p>

(2) 災害教訓伝承カルタ

<p>目的</p>	<p>過去に天竜川流域で起きている豪雨災害について、災害を経験した様々な立場の人の災害教訓(知識、知恵)、また災害から身を守るために大事なことを子供に伝え、記憶に残すことが、いざというとき、子供たちの命を救うことになる。そこで絵札でイメージを湧かせ、読み札により大切な事柄を伝承することができ、内容を繰り返し遊んで学べる「災害教訓伝承カルタ」を作成した。</p>
<p>訴求対象</p>	<p>子ども、子育て世代</p>
<p>災害意識</p>	<p>「気づき」</p>
<p>概要</p>	<p>読み札はこれまでの災害教訓や古くからの言い伝えなどを基に自然、歴史、文化、産業、地名等郷土を代表する風土資産を読み込んでいる。また絵札には地域の美しい風土資源や読み札を分かりやすく解説するイメージ図を盛り込み、子供たちが楽しみながら学べるようにしている。</p>
<p>テーマ</p>	<p>読み札のテーマは「災害」が 10、「災害教訓」が 12、「土木遺構」が 4、「歴史文化」が 8、「伝説」が 6、「自然・景観」が 4となっている。また取り上げた事象に関わる地域は右図に示すようにほぼ天竜川全域にまたがっている。 詳しい内容は資料-2 を参照。</p>
<p>構成</p>	<p>カルタは 50 音「あ」～「わ」(「を」「ん」を除く)分の読み札、絵札により構成している(資料-5 参照)。カルタイメージを以下に示す。</p> <div style="text-align: center;"> <div style="display: flex; justify-content: space-around; margin-bottom: 10px;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; background-color: black; color: white;">絵札</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; background-color: black; color: white;">読み札</div> </div> <div style="border: 2px solid brown; padding: 10px; display: flex; align-items: center;"> <div style="flex: 1; text-align: center;">  </div> <div style="flex: 1; padding-left: 20px;"> <p style="font-size: 2em; color: white; background-color: red; border-radius: 50%; width: 40px; height: 40px; display: flex; align-items: center; justify-content: center; margin: 0 auto;">せ</p> <p style="font-size: 1.5em; margin-top: 10px;">いのちを救う</p> <p style="font-size: 1.5em; margin-top: 10px;">避難の決断</p> <p style="font-size: 1.5em; margin-top: 10px;">瀬音近づき</p> </div> </div> </div>



(3) 災害教訓伝承データベース

<p>目的</p>	<p>伝承や過去の災害情報は防災情報として有用であると同時に、住民への防災啓発の際に不可欠の情報である。そこで、歴史災害による被災箇所、被災状況の情報について、災害事象及び教訓伝承の位置図をベースとしたクリックابل形式でのとりまとめを行った。なお、将来的にホームページ等に掲載し住民へ情報提供することに留意し、HTML形式で作成した。</p>
<p>訴求対象</p>	<p>子育て世代、働き盛り世代、中高年層、地域リーダー</p>
<p>災害意識</p>	<p>「気づき」、「正しい理解」、「適切な判断・行動」</p>
<p>概要</p>	<p>クリックابلマップに掲載している災害カルテは、災害教訓伝承事例が177件、平成18年7月豪雨による主要災害カルテが33件である。 詳しい内容は資料-5参照。</p>
<p>構成</p>	<div style="text-align: center;">  <p>トップページのイメージ</p> </div> <div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="width: 45%;">  </div> <div style="width: 45%;">  </div> </div> <div style="text-align: center; margin-top: 10px;"> <p>災害教訓伝承カルテの展開例</p> </div>



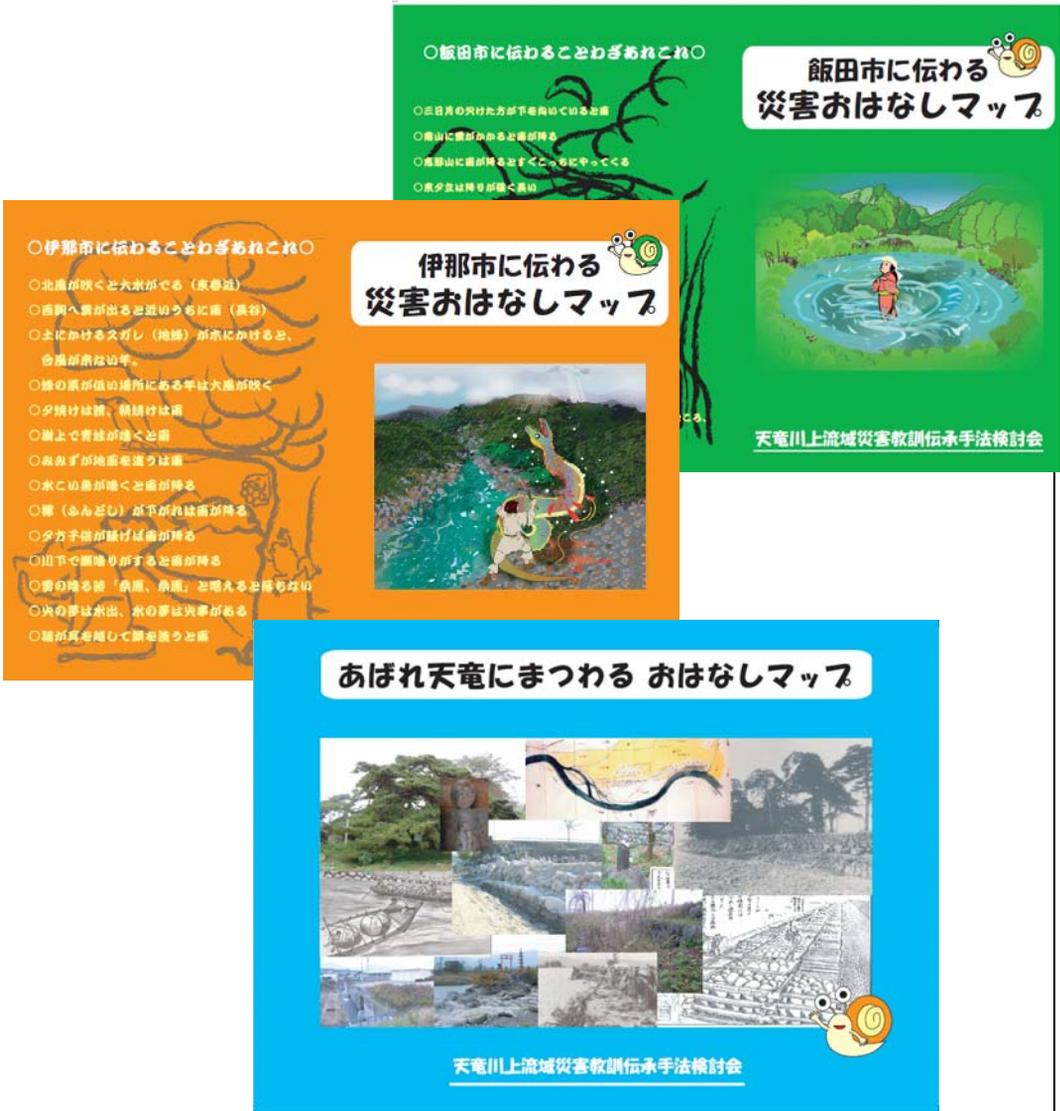
#### (4) 語りつぐ天竜川「川の碑」

目的	天竜川に多く残されている川の石碑について調査し、それにつわる文献の掘り起こしと、現地調査を実施して写真を撮影し「語りつぐ天竜川」として編集した。										
訴求対象	中高年層、地域リーダー										
災害意識	「気づき」、「正しい理解」										
概要	対象となる石碑として、天竜川の治水や利水あるいは天竜川の流れを歌った短歌や俳句に至る石碑を総合的に検討して80事例の選出を行った。この中から冊子に掲載するための60事例を選出するにあたっては、信仰碑、記念碑、歌碑をバランスよく配分し、諏訪地域、上伊那地域、下伊那地域などの地域的なバランスも考慮しつつ決定した。										
構成	<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 20%; padding: 5px;">名称</td> <td style="padding: 5px;">与謝野晶子歌碑</td> </tr> <tr> <td style="padding: 5px;">所在地</td> <td style="padding: 5px;">岡谷市湖畔一丁目 岡谷湖畔公園</td> </tr> <tr> <td style="padding: 5px;">(写真)</td> <td style="padding: 5px;">(位置)</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center; padding: 5px;">  </td> <td style="text-align: center; padding: 5px;">  <p style="font-size: small; text-align: center;">国土地理院発行 1/50,000 地形図「諏訪」使用</p> </td> </tr> <tr> <td colspan="2" style="padding: 5px;"> <p>(解説)</p> <p>表 諏訪の湖天竜となる釜口の水しづかなり絹のごとくに 晶子 裏 おぼえがき 歌人与謝野晶子しばしば信濃路に来たる。たまたま大正十四年正月夫鉄幹画家石井柏亭らと岡谷の地に来遊、天竜河畔をおとずれ、この歌を詠む。このたび湖畔の天竜公園に文学碑建設の議おこり、岡谷市および岡谷商工会議所をはじめ同志相はかり、この地にこれを建立す 昭和四十七年四月二十八日</p> <p>与謝野晶子(1878-1942)は、堺市生まれ、新詩社に加わり、雑誌「明星」で活躍。歌集『みだれ髪』『舞姫』の他、他数多い。古典の現代語訳『新訳源氏物語』、女性問題、社会問題の評論にも活躍した。晶子は、大正十四年(1925)正月、夫鉄幹、石井柏亭らと下諏訪へ来遊、7日まで亀屋に滞在、この間岡谷の地にも足を運んだ。晶子は生前自分の歌碑建立について、気が進まない旨述べたことがあり、事実歌碑は少なかつたが、このころは各地に続々と建立された。</p> </td> </tr> </table>	名称	与謝野晶子歌碑	所在地	岡谷市湖畔一丁目 岡谷湖畔公園	(写真)	(位置)		 <p style="font-size: small; text-align: center;">国土地理院発行 1/50,000 地形図「諏訪」使用</p>	<p>(解説)</p> <p>表 諏訪の湖天竜となる釜口の水しづかなり絹のごとくに 晶子 裏 おぼえがき 歌人与謝野晶子しばしば信濃路に来たる。たまたま大正十四年正月夫鉄幹画家石井柏亭らと岡谷の地に来遊、天竜河畔をおとずれ、この歌を詠む。このたび湖畔の天竜公園に文学碑建設の議おこり、岡谷市および岡谷商工会議所をはじめ同志相はかり、この地にこれを建立す 昭和四十七年四月二十八日</p> <p>与謝野晶子(1878-1942)は、堺市生まれ、新詩社に加わり、雑誌「明星」で活躍。歌集『みだれ髪』『舞姫』の他、他数多い。古典の現代語訳『新訳源氏物語』、女性問題、社会問題の評論にも活躍した。晶子は、大正十四年(1925)正月、夫鉄幹、石井柏亭らと下諏訪へ来遊、7日まで亀屋に滞在、この間岡谷の地にも足を運んだ。晶子は生前自分の歌碑建立について、気が進まない旨述べたことがあり、事実歌碑は少なかつたが、このころは各地に続々と建立された。</p>	
名称	与謝野晶子歌碑										
所在地	岡谷市湖畔一丁目 岡谷湖畔公園										
(写真)	(位置)										
	 <p style="font-size: small; text-align: center;">国土地理院発行 1/50,000 地形図「諏訪」使用</p>										
<p>(解説)</p> <p>表 諏訪の湖天竜となる釜口の水しづかなり絹のごとくに 晶子 裏 おぼえがき 歌人与謝野晶子しばしば信濃路に来たる。たまたま大正十四年正月夫鉄幹画家石井柏亭らと岡谷の地に来遊、天竜河畔をおとずれ、この歌を詠む。このたび湖畔の天竜公園に文学碑建設の議おこり、岡谷市および岡谷商工会議所をはじめ同志相はかり、この地にこれを建立す 昭和四十七年四月二十八日</p> <p>与謝野晶子(1878-1942)は、堺市生まれ、新詩社に加わり、雑誌「明星」で活躍。歌集『みだれ髪』『舞姫』の他、他数多い。古典の現代語訳『新訳源氏物語』、女性問題、社会問題の評論にも活躍した。晶子は、大正十四年(1925)正月、夫鉄幹、石井柏亭らと下諏訪へ来遊、7日まで亀屋に滞在、この間岡谷の地にも足を運んだ。晶子は生前自分の歌碑建立について、気が進まない旨述べたことがあり、事実歌碑は少なかつたが、このころは各地に続々と建立された。</p>											

(5) 災害教訓伝承パネル

<p>目的</p>	<p>天竜川上流域の過去の災害や、災害体験談、地域に伝わる災害にまつわるお話を誰にでも分かりやすくパネルとしてとりまとめを行った。また天竜川上流域災害教訓伝承手法検討会の活動についてもパネルでとりまとめ、伝承活動を広く地域へ発信することを目的としている。</p>
<p>訴求対象</p>	<p>子育て世代、働き盛り世代、中高年層、地域リーダー</p>
<p>災害意識</p>	<p>「気づき」、「正しい理解」</p>
<p>概要</p>	<p>パネルの内容は、天竜川上流域の主な災害(36 災害、58 災害、H18 災害)概要、災害体験談、災害にまつわる言い伝えと民話、天竜川上流域災害教訓伝承手法検討会について、川の豆知識という内容になっている。 詳しい内容は資料-5 参照。</p>
<p>事例</p>	<div data-bbox="451 786 1310 2011" style="border: 2px solid orange; padding: 10px;"> <h2 style="text-align: center; background-color: yellow; margin: 0;">天竜川上流域の災害の歴史</h2> <div style="background-color: #e0f0ff; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"> <p><b>●平成18年災害</b></p> </div> <p>2006(平成18)年7月15日から降り始めた雨は21日まで降り続き、各地に被害が続出しました。浸水面積は約558ha、被害家屋は、床上浸水1,076棟、床下浸水1,465棟の合わせて2,541棟にも及ぶ被害となりました。天竜川本川では、田畑等の浸水被害が12地区で発生し殿島橋が落橋した他、箕輪町松島地区で堤防が決壊するなど、飯田市から箕輪町まで広範囲に被害が及びました。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-between;"> <div style="width: 30%;"> <p><b>天竜川各地の被害状況</b></p>  <p>伊那市 中央橋 (7/19)</p>  <p>箕輪町松島地区</p>  <p>赤羽中山</p>  <p>伊那市 殿島橋 (7/20)</p>  <p>高森町 カヌー親水公園 (7/19)</p>  <p>飯田市川路 かわらんべ前 (7/19)</p>  <p>(平常時)</p> </div> <div style="width: 65%;">  <p style="font-size: small;">             ▲ 河川堤防決壊 (決壊箇所が示されている地区)              ▲ 河川堤防決壊 (決壊箇所が示されていない地区)              ▲ 河川堤防決壊 (決壊箇所が示されていない地区)              ▲ 河川堤防決壊 (決壊箇所が示されていない地区)              ▲ 河川堤防決壊 (決壊箇所が示されていない地区)              ▲ 河川堤防決壊 (決壊箇所が示されていない地区)         </p> </div> </div> <div style="text-align: right; margin-top: 10px;">  <p>天竜川上流域河川事務所</p> </div> </div>

(6) 災害おはなしマップ

<p>目的</p>	<p>分かりやすく、目に見えて、手にとってもらえるものをコンセプトとして「過去の災害」、「災害に関する伝説や昔話」について小冊子にまとめた。</p>
<p>訴求対象</p>	<p>子ども、子育て世代、働き盛り世代、中高年層、地域リーダー</p>
<p>災害意識</p>	<p>「気づき」、「正しい理解」</p>
<p>概要</p>	<p>災害おはなしマップは、伊那市・飯田市に伝わる災害おはなしマップと中川村、高森町周辺に伝わるあばれ天竜まつわるおはなしマップの3種類からなる。効果としては、家族での対話ツール、親子での読み聞かせツールとして活用が期待できる。 詳しい内容は資料-5 参照。</p>
<p>事例</p>	 <p>The image displays three disaster story maps. The top map is green and titled '飯田市に伝わる災害おはなしマップ' (Disaster Story Map of Handa City). It lists legends such as '三日月の穴けた方が下を向いてゆるお産' (Legend of the crescent moon hole) and '南山に雲が来ると雷が降る' (Thunder comes when clouds come from the south mountain). The middle map is orange and titled '伊那市に伝わる災害おはなしマップ' (Disaster Story Map of Ina City). It lists legends such as '北風が吹くと大水がでる (原形証)' (Legend of heavy rain with north wind) and '西側へ雲が出るお近山うちらに雷 (真谷)' (Legend of lightning from the west). The bottom map is blue and titled 'あばれ天竜まつわる おはなしマップ' (Disaster Story Map related to Abare Tenryu). It features a collage of images showing historical disaster sites and a dragon legend. All maps include the text '天竜川上流域災害教訓伝承手法検討会' (Tenryu River Upper Basin Disaster Lesson Inheritance Method Study Committee).</p>

## 4. 災害教訓伝承実施の流れ

### 4-1 災害教訓伝承の概要

#### (1) 伝承の素材（内容）

災害の教訓として伝えていくべき伝承の素材は以下のように大別できるものと考えられる。

##### ①文献史料・史実

既往災害履歴のデータやそれに基づく伝説・ことわざ等

##### ②実物（災害実績を示唆するもの）

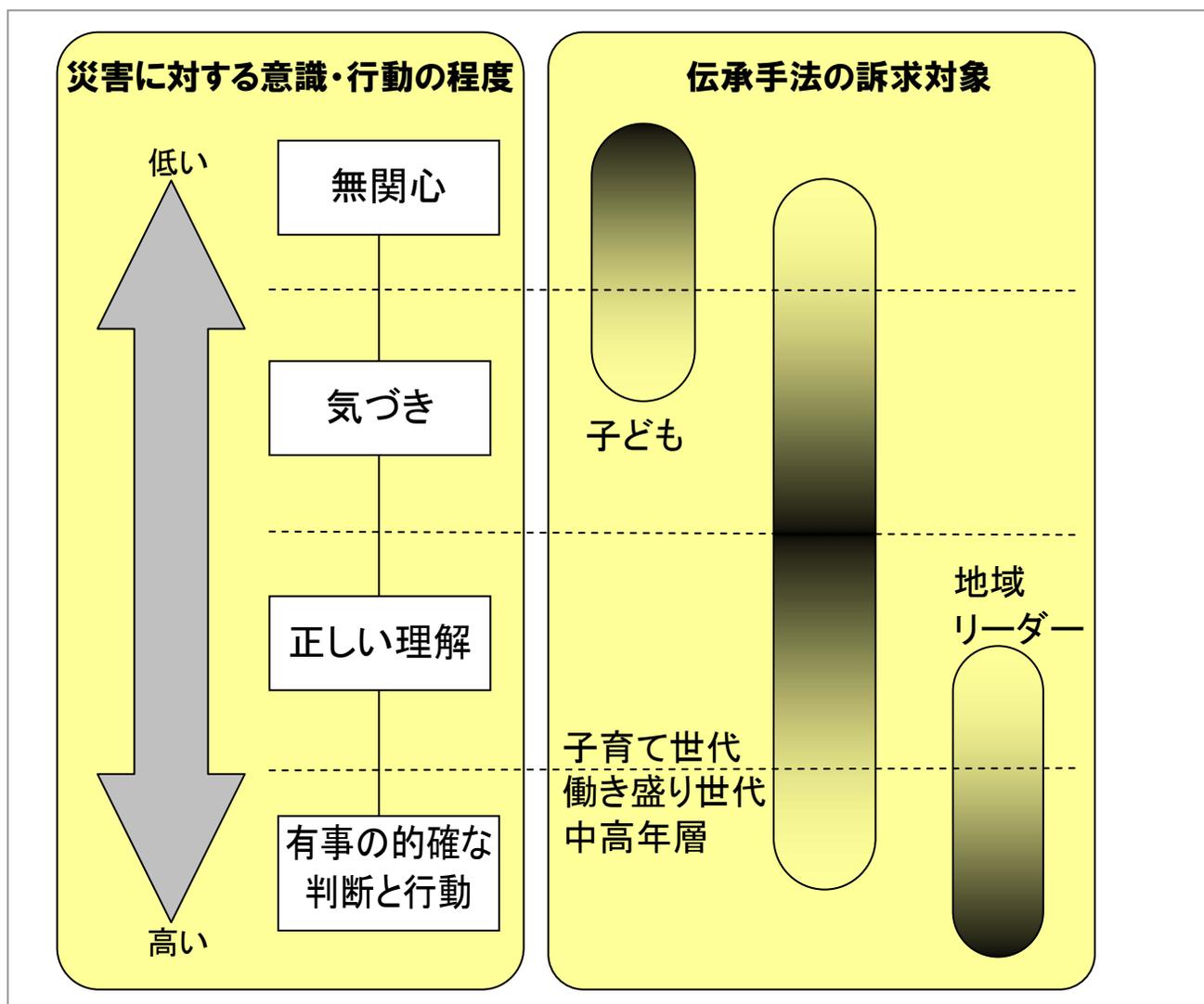
かつてそこに災害があったことを示す巨石、あるいは霞堤や理兵衛堤防などの土木遺構の歴史的変遷等、現場に所在する実物

##### ③人々の心理・行動

被害に遭われた方や災害対策活動に携わった方の、災害発生時から復興に至る感情や行動

## (2) 伝承すべき相手（訴求対象）

人々の災害に対する意識・行動の程度と訴求対象とのおおまかな関連性を整理すると以下のようになる。



※ 上図は、個々の伝承手法の特徴を整理するために、「災害に対する意識・行動の程度」と「伝承手法の訴求対象」の相対的な関係性をイメージ化したものであり、個人差により必ずしも当てはまらない場合もある。

図 48 伝承すべき相手(訴求対象)の考え方

## (3) 災害教訓伝承手法のメニュー

災害教訓伝承を効果的に伝承していくためには、伝承の素材（内容）や訴求対象を考慮しつつ、地域になじみやすい手法を選択することが必要になる。

伝承手法のメニュー一覧を以下に示す。伝承活動の実施にあたっては、この中から伝承手法（1つの活動で複数のメニューを選択することが望ましい場合もある）を選択することとなる。

表 7 伝承手法のメニュー一覧(1/2)

手法	概要	利点 欠点	災害意識の程度との関連			訴求対象					主たる伝承素材 <sup>※1</sup>			想定される実施主体 <sup>※2</sup>
			「気づき」を促進	「正しい理解」を促進	「適切な判断・行動」を促進	子ども	子育て世代	働き盛り世代	中高年層	地域リーダー	①	②	③	
1.書物、出版物	災害に関する史実、被災経験者の体験談などを取りまとめて配布	利点 情報が散逸しないよう保存することが可能 伝えたい情報量の多少に応じて自由に編集可能 欠点 情報量の多さや、内容の難しさにより、関心の薄い層からは敬遠	●	●	●	●	●	●	●	■			A~H	
2.写真・画像・絵図など	教訓伝承に関わる情報をビジュアルな媒体にとりまとめて配布	利点 視覚に訴えかける情報なのでなじみやすい 制作過程に住民が参加することが比較的容易。また参加を通じて訴求効果が向上 欠点 住民の日常生活で活用される、目にとまる媒体としての提供が重要	●	●	●	●	●	●	●	■	■		A~H	
3.インターネット、ウェブサイト	教訓伝承の位置や内容などの情報をデータベース化して、行政機関や市民団体などのホームページに掲載	利点 伝えたい情報量の多少に応じて自由に編集可能 流域内に限らず、興味をもつ全国の市民に情報提供可能 欠点 訴求対象がインターネットを利用できる環境にある住民に限定 HPへのアクセス性を高めるなど認知度を高める取り組みが重要	●	●	●	●	●	●	●	■			A~J	
4.石碑、記念碑、地物	災害に関する史実、被災経験者の体験談などをとりまとめ、被災現地などにおいて記念碑や看板設置	利点 現地での情報提供となることから、見た人の実感として教訓を伝承することが可能 時間が経過しても、その土地の教訓として長く語り継がれやすい(風化の度合いが小さい) 欠点 現地に訪れなければならず、広域的な伝達に不向き	●				●			■	■		A,C,E,I	
5.紙芝居・カルタ・絵本・ゲーム	災害の体験談や伝説・昔話などを題材として、関心の薄い子どもたちにとっても馴染みやすいコンテンツを作成し提供	利点 災害に対して興味の薄い子どもたちにとっても理解しやすいことから“気づき”を与える手法に適している 事後に意見交換(ワークショップ)や感想文作成などを行うことで訴求効果が向上 欠点 訴求対象が子どもに限定	●	●						■		■	C,D,E,F	
イベント	6.聴講型	災害教訓をテーマとしたシンポジウムや被災体験者による語り聴かせの会など、聴講を主としたイベントを開催	●	●			●			■		■	A~J	
	7.机上学習・協働作業型	災害教訓をテーマとした懇談会やワークショップなど、参加者どうしによる意見交換や協働作業を軸としたイベントを開催	●				●	●	●			■	A~H	

※1 主たる伝承素材：①文献史料・史実 ②実物 ③人々の心理・行動

※2 想定される実施主体：A.国土交通省 B.その他の国の機関 C.県、市町村 D.博物館 E.学校(大学)

F.市民団体 G.語り部 H.学識経験者 I.ライフライン事業者、公共交通機関、独立行政法人など公的団体 J.一般企業

表 7 伝承手法のメニュー一覧(2/2)

手法	概要	利点 欠点	災害意識の程度との関連			訴求対象						主たる伝承素材※1			想定される実施主体※2
			「気づき」を促進	「正しい理解」を促進	「適切な判断・行動」を促進	子ども	世代	子育て世代	働き盛り	中高年層	リーダー	地域	①	②	
イベント(続き)	8. 野外体験型	<p><b>利点</b> 参加者自らが五感を使って体験するものであるため、参加者の実感として教訓を伝承することができ訴求効果が高まる 防災に興味関心のなくても、比較的容易に参加意欲を喚起可能</p> <p><b>欠点</b> イベントの運営に手間や技能を要するため、一度に多くの参加者を集めての開催が困難 単に現地を見るだけのイベントになりがちのため、確実に災害教訓を伝える企画内容にすることが重要</p>				●	●	●	●	●			■		A~H
	9. 展示型	<p><b>利点</b> 住民の自由な参加が可能、興味関心に応じた情報の入手が可能</p> <p><b>欠点</b> 写真やパネルをただ見るという受動的なものであるため、住民の記憶に残るテーマ設定や表現の工夫が重要</p>				●	●	●	●	●	■	■			A~J
10. 教育・啓発施設活用	既存の教育施設や啓発施設を活用し、災害教訓を伝える講座や展示などを実施	<p><b>利点</b> 流域内のストックの有効活用が可能</p> <p><b>欠点</b> 施設近傍の市民に対象者が限定</p>				●			●	●	■	■	■		A,B,C,D,E,I
11. 学習・教育、訓練	災害に関する史実、被災経験者の体験談などを題材として、総合学習や課外活動など教育のカリキュラム、防災訓練を実施	<p><b>利点</b> 定期的あるいは集中的に実施される場合が多く、また、地域性を考慮した内容にするなど実施主体の創意工夫により、対象者に対して濃密な体験や記憶を提供することが可能</p> <p><b>欠点</b> 対象者が比較的少数に限定されることが多い</p>				●	●	●	●	●	■		■		A,C,D,E,F,H,I,J
12. 演劇・映画・ビデオ	災害の体験談や伝説・昔話などを題材として、関心の薄い対象者にとっても馴染みやすいコンテンツを作成し提供	<p><b>利点</b> 災害に関する関心や理解の低い対象者にとって理解しやすいことから“気づき”を与える手法として適している</p> <p><b>欠点</b> コンテンツの制作に相応の時間とコストがかかる</p>				●	●	●			■		■		D,E,F,L
13. マスメディア	災害に関する史実、被災経験者の体験談などを、新聞・雑誌の特集記事や広告、テレビ・ラジオの番組として提供	<p><b>利点</b> 一度に多くの人々の目に触れさせることができる</p> <p><b>欠点</b> 日々新たな情報が提供される媒体のため、一過性のものになりがち ドラマ性や話題性のある情報でなければ取り上げられにくい 紙幅が限定されるため、ポイントを絞った情報提供が必要</p>					●	●	●			■	■	■	A,B,C,J

※1 主たる伝承素材：①文献史料・史実 ②実物 ③人々の心理・行動

※2 想定される実施主体：A. 国土交通省 B. その他の国の機関 C. 県、市町村 D. 博物館 E. 学校（大学）

F. 市民団体 G. 語り部 H. 学識経験者 I. ライフライン事業者、公共交通機関、独立行政法人など公的団体 J. 一般企業

## 4-2 災害教訓伝承手法の企画・実施

### (1) 伝承活動展開シナリオの検討

災害教訓伝承活動を実際に展開していくためには誰が（実施主体）、誰に（訴求対象）、何を（伝承の素材（内容））、どのように（伝承手法）、何のために（目的・必要性）伝えるのかを明確にしたシナリオを検討する。

このシナリオは、実施主体間や協力者との調整を踏まえて、極力具体的なものとするのが望ましい。

シナリオを実際に作成する際には、①伝承活動の必要性、②シナリオ展開の方向性、③テーマを設定する。次に、表 8 を埋める形で、伝承すべき相手（訴求対象）と伝承内容のマトリックス表を作成する。

**表 8 伝承手法活動展開シナリオの作成表**

		伝承内容			
		主なテーマ① (例：霞堤と水防技術など)	主なテーマ②		
意識レベル	低い	伝承すべき相手 (訴求対象)	子ども	手法： 実施メニュー： 担い手：	
	中高年世代				
	働き盛り世代				
	高い	地域リーダー			

また、このシナリオ作成後、後に詳述するように個々の伝承活動の企画・設計を行うこととなるが、その際、関係者間の調整等の理由により、当初のシナリオで想定したものと異なる場合も生じる。そのため、個別の伝承活動を行うときに臨機応変に取捨選択等が可能となるよう複数のシナリオを作成しておくことが望ましい。なお、伝承活動を実施する過程で、予定通りに進まない場合には、必要に応じてシナリオの見直しを行う。

本書で設定されている9地域のうち、今年度計画から実施にいたった3地区について作成した伝承活動展開シナリオ例を次ページに示す。

表 9 伝承活動展開のシナリオー伊那市地域における例

伝承活動の必要性	①伊那市から三峰川上流域の地域では昭和 33 年美和ダム完成以前には出水期になれば水害に見舞われる河川の氾濫常襲地域であり、現在は森林事業も衰退し上流域は荒廃し、その事実も風化している。しかし天竜川にかかわる伊那小学校を中心とした総合学習が醸成されている。 ②このような災害の頻発箇所には「・島」の地名が多く、水害より地域を守るための水神様や弁財天が祀られ、「さんよりこより」の祭りや、「霞堤」の築堤などにより伊那地域は先人の知恵や努力で守られている。しかし災害の減少とともに知恵は風化しつつある。 ③36 災害では甚大な被害が生じ、57 災、58 災の被害も甚大であった。平成 18 年 7 月の豪雨災害では 36 災害以降の大きな被害が生じ、特に上伊那の辰野町～伊那市では水害、土砂災害による地域の脆弱性が顕在化し、伊那市や地域住民が一体となった災害に強い地域防災力の強化の方策が必要である。
シナリオ展開の方向性	①過去の治水史や災害復旧事業の詳細記録は、関係機関(国、県事務所など)に資料保管される。「三峰川みらい会議」では霞堤、三峰川フォーラムの開催や、天竜川ゆめ会議による定期的な活動が行われており、地域の関連団体と伊那市の協力強化によるイベントなどの企画が必要である。 ②地域リーダーの強化、住民の防災意識高揚の視点から、伊那市の災害発生地区の公民館や集会所などを訪問し懇談会、ワークショップなど住民参画的な要素を踏まえた企画を行う。また合わせて災害体験者(被災住民、災害教訓伝承者)へのヒアリングを行う。 ③上記①②について伊那ケーブル TV、LCV などの積極的な活用を促進。
テーマ	川に関する積極的な市民・教育活動の素地を活かしながら、三峰川上下流間における災害特性の違いや対策の歴史を共有するとともに、地域特有の治水技術を主体として、水防に関する知識の定着を促進し、地域の歴史・文化に対する認識を醸成

低い ↑ 意識レベル ↓ 高い	伝承内容	
	三峰川の霞堤と水防技術	流域を知る、川の働きを知る
	<p><b>○霞堤や水防技術の存在を知る機会の提供</b> [実施メニュー(例)]</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>学習ゾーンの創設(古くからの水防工法や生活の知恵を学ぶ)</li> <li>災害体験者(語り部)、技術者、工事関係者へのインタビュー映像(30分程度)の学習ビデオを制作</li> <li>アニメや霞堤の絵本製作(「さんよりこより」「水神」「弁財天」などの素材あり)</li> </ul> <p>(市民団体、教育機関(小中学校等)、国など)</p>	<p><b>○災害の実経験を振り返り、洪水時の水や土砂はどこからやってくるのかを学ぶ総合学習の実施</b> [実施メニュー(例)]</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>平成 18 年 7 月豪雨災害での実体験を子どもたち自らが振り返り、とりまとめを実施</li> <li>災害科学系の学会などと連携しての活動</li> <li>災害体験「子ども文集、絵画」展の企画</li> <li>上流域へ水や土砂の流れをたどる遠足(災害跡地、美和ダム)</li> </ul> <p>(教育機関(小中学校等)、教育機関(大学等)、国など)</p>
	<p><b>○霞堤の文化と水防技術の変遷を学ぶ出版物や情報の提供</b> [実施メニュー(例)]</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>霞堤とその周辺めぐりのウォーキングブックを編集・出版</li> <li>「祭りと水害」などの言われを紹介したパンフレット</li> <li>見学コースの設定と日帰りツアーの企画実施</li> <li>新聞などへの連載、市町村広報への連載</li> <li>TV や FM ラジオでの情報提供</li> </ul> <p>(市民団体、教育機関(大学)、マスコミ、国など)</p>	<p><b>○上流部での水の生い立ち、川の流れ、土砂の流れから流域の機能を学ぶイベントの実施</b> [実施メニュー(例)]</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>間伐と「炭焼き」体験イベントを通して流域を知る</li> <li>知識の普及を目的に三峰川みらい会議などの試みを通じた学習機会の提供</li> <li>防災上の課題学習と合わせた景勝地の見学(写真、絵画、花見、紅葉)</li> </ul>
伝承すべき相手(訴求対象)	子ども	地域リーダー
	子育て世代 働き盛りの世代 中高年世代	
	<p><b>○過去の災害経験から今後の地域の水防・防災を考える勉強会・ワークショップ・懇談会などの実施</b> [実施メニュー(例)]</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>水防の担い手に対して水害の歴史や地域文化を継承するワークショップの開催</li> <li>地域リーダーとしての語り部の発掘、「語り部の話を聞く会」の開催</li> <li>36 年災、57 年災、58 年災の災害体験者「語り部の記録収録」、被災地の「災害教訓伝承冊子編集」</li> </ul> <p>(市民団体、市町村、国、マスコミなど)</p>	

表 10 伝承活動展開のシナリオ—駒ヶ根市～中川村地域における例

伝承活動の必要性	①駒ヶ根市から中川村の地域では、度重なる災害との闘いの中で、「理兵衛堤防」や「小和田の越流堤の築堤」などの災害から地域を守る知恵が蓄積されるとともに、「石神の松」や「小鍛冶の矢文」などの災害にまつわる多くの信仰や言い伝えも潜在している。 ②中央アルプス側では山地からの土砂流出と河道侵食により、この地域に特有の田切地形が形成されており、かつて災害が常襲していた頃には、田切の最下段は水田として利用されていたが、近年では、河道整備に合わせて河道近傍まで市街化が進行しており、若年層の意識の低下も相まってこうした災害の歴史が忘れ去られつつある。 ③平成18年7月の豪雨災害では、河床に埋没していた理兵衛堤防の一部が出現し、天竜川の流水の激しさや先人の水防に関する知恵が改めて見直される中、市町村や教育関係機関が協力し、災害により築かれた進行・知恵・地域文化を継承していく方策が必要である。
シナリオ展開の方向性	①理兵衛堤防や小和田の越流堤などを通じて、先人の知恵や災害の脅威を伝えるイベントや出版物などの企画が必要である。 ②地域の古老と若年層世代の交流形成、住民の防災意識高揚の視点から、天竜川周辺現地の伝承素材も積極的に活用しながら、地域に語り伝わる信仰や文化を考える懇談会、勉強会などのイベントを企画する。 ③上記①②について、中川村、駒ヶ根市と教育機関、国土交通省が連携しながら推進する。
テーマ	地域特有の地形や水害にまつわる信仰・暮らしの知恵を素材として、意識が薄れつつある若年世代を中心に川に親しむ機会を提供する手法を展開しながら、水防や水害に関連する地域の歴史・文化に対する認識を醸成

低い ↑ 意識レベル ↓ 高い	伝承すべき相手 (訴求対象)	伝承内容	
		理兵衛堤防の歴史の伝承	石神の松周辺に残る信仰と水害との関わり
		<p><b>○洪水と人の暮らしを地域のモノ、人から知る機会の提供</b> 〔実施メニュー(例)〕</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>理兵衛堤防の築堤の歴史と発掘調査による知見について現地と資料館の双方で学ぶ学習ゾーンの創設(中川村西小・東小)</li> <li>松村理兵衛にまつわるインタビュー映像と、川にまつわる信仰の紹介、語り部の映像(30分程度)の学習ビデオを制作</li> </ul> <p>(市町村(教育委員会)、教育機関(小中学校等)、国など)</p>	<p><b>○石神の松と周辺の歴史について学ぶ制作物や語り部と現地を歩く企画の実施</b> 〔実施メニュー(例)〕</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>絵本、紙芝居、人形劇などの製作企画</li> <li>スタンプラリー—現地参加型イベントの実施</li> </ul> <p>(市町村、国、マスコミなど)</p>
<p><b>○理兵衛堤防から天竜川の治水を学ぶ出版物やイベントの実施</b> 〔実施メニュー(例)〕</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>理兵衛堤防とその周辺めぐりのウォーキング指南本を編集・出版</li> <li>ボランティアによる中川村と天竜川の歴史案内ツアー</li> <li>理兵衛堤防と水神信仰題材とした見学コースの設定と日帰りツアーの企画・実施</li> <li>新聞などへの連載、市町村広報への連載</li> <li>履歴個所(スポット)から制作する絵画、写真コンクールなどの企画</li> </ul> <p>(市町村(教育委員会)、教育機関(大学)、市民団体、国など)</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>地域の祭りや水害のいわれを示したパンフ・冊子の企画</li> <li>天竜川の写真集(季節、スポット、文化、歴史、災害、山、畑、川、祭りなど)を扱った出版企画</li> <li>事務所発行の定期刊行物の連載の一コーナーとして知恵、地域文化の紹介</li> </ul> <p>(国、教育機関(大学)、市町村(教育委員会)など)</p>		
		<p><b>○災害の認知と適切な行動を考えるシンポジウムや地域に残る災害教訓伝承勉強会の実施</b> 〔実施メニュー(例)〕</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>水防の担い手へのワークショップと勉強会の企画(川の水位に気を配るなどの平常時からの習慣を学ぶ勉強会の実施、河原の中で自分だけの量水標(水位の目印)を見つける現地企画の実施)</li> <li>民俗学や郷土史に詳しい有識者と勉強会を実施</li> </ul> <p>(市町村(教育委員会)、教育機関(大学)、市民団体、国など)</p>	

表 11 伝承活動展開のシナリオー飯田市地域(松尾・伊賀良・上久堅)における例

伝承活動の必要性	①飯田市松尾・伊賀良・上久堅地域は、下流部に天竜川沿いでも有数の景勝地鷲流峡を擁する氾濫原であり、洪水時には水位堰上げが生じることによりしばしば浸水被害が生じていた。そのため災害の痕跡を示す地名や巨石などが存在する。 ②36 災害、58 災害では甚大な浸水被害が発生し、特に 36 災害では天竜川沿い(本川氾濫)と市街地側(中小河川氾濫、土石流)で異なる様相の災害を経験した人々が存在する。 ③近年は河川整備の効果により外水氾濫は起こっていないが、58 災害で浸水した河道沿川にまで市街地の拡大が進展し、被害ポテンシャルが増大している。このため飯田市、水利・水防組合、飯田美術博物館などが連携して、防災体制の強化や、薄れつつある災害の記憶を呼び戻し住民の危機管理意識の醸成を図る方策が必要である。
シナリオ展開の方向性	①過去の治水史や災害復旧事業の詳細記録は、関係機関(国、県事務所など)に資料保管される。飯田美術博物館はこれまでも防災啓発につながる様々な活動を行っており、また、水防組合の活動も活発であることから、これら地域の関連団体と飯田市の協働によるイベントなどの企画が必要である。 ②地域に潜在する災害体験談の浸透、住民の危機管理意識高揚の視点から、過去の大きな被害の状況や体験談を題材とした、座談会、オープンハウス、教育活動の展開や、防災訓練の企画を行う。 ③上記①②について、飯田市を始めとする関係機関が相互に協力するとともに、飯田エフエム放送などの積極的な活用を推進する。
テーマ	繰り返り起こった災害の痕跡や多くの災害体験者を素材として、災害要因と絡めて地域の特徴を理解させる手法を展開しながら、災害に立ち向かう知恵を継承

低い ↑ 意識レベル ↓ 高い	伝承内容	
	既往災害(昭和36年災害)体験の振り返りと次世代への伝承	繰り返される災害の証
	子ども	<p><b>○地域で起こりうる災害の危険性を知る機会の提供</b> [実施メニュー(例)]</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>水筋の変遷や災害の歴史を通して「島」などの地名と人々の生活の歴史を知る</li> <li>松尾地区にある弁天様などの災害教訓伝承のポイントを加えた企画</li> <li>語り部とともに学ぶ小学生の現地見学テーマの立案</li> <li>36 年災当時の写真と現況の比較映像などの変遷ビデオ(30 分程度)を学習教材化</li> <li>災害体験者のインタビュー映像を加えて、水の恐怖と恵みについて、体験談をベースにお話創作とキャラクターを用いた人形劇・アニメーションを制作・上映</li> </ul> <p>(市町村(教育委員会)、教育機関(小中学校等)、水利・水防組合、教育機関(大学)、国など)</p>
	子育て世代 働き盛りの世代 中高年世代	<p><b>○36年災を振り返り体験談を掘り起こし、次世代へ継承するパネル展・公民館巡回展・座談会の実施</b> [実施メニュー(例)]</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>体験談の掘り起こしをかねて巡回展とあわせて座談会を実施</li> <li>36災害を中心とした飯田市内での災害と歴史の探訪ツアーの企画実施</li> <li>公共施設やスーパーマーケットでオープンハウスを実施し、災害体験談の紹介や災害教訓を周知</li> <li>川の変遷と語り部の記録集作成、水防組合に伝わる「絵干し」の伝承</li> </ul> <p>(博物館、市町村、国、マスコミなど)</p>
地域リーダー	<p><b>○継続的な教訓伝承の取り組み制度の創設</b> [実施メニュー(例)]</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>36災害、58 災害で被災した住民の「語り部の記録収録」、被災地の「災害教訓伝承冊子誌」編集</li> <li>神社、氏神の祭礼の紹介、保存会活動の支援、企業防災への醸成</li> </ul> <p>(市町村、民間、国など)</p>	<p><b>○既往災害を想定した防災訓練・水防訓練時での取り組み支援</b> [実施メニュー(例)]</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>既往災害の跡地、石碑、遺構を訪ねる現地見学会の実施</li> <li>企業の水防訓練と講習会の開催支援(水防組合員)</li> </ul> <p>(水利・水防組合、市町村、国、マスコミなど)</p>

## (2) 個々の伝承活動の企画・設計

伝承活動のシナリオに基づいて伝承活動を行う際の企画・設計のポイントを以下に示す。

表 12 伝承活動の企画・設計ポイント

項目	内容	ポイント
① シナリオに基づき実施内容を決定する	・ 開催主体を決定	・ 地域における既往の行催事の実施予定、内容を考慮
	・ 連携できる団体・人物との事前調整	・ 伝承するテーマや内容に応じて、対象団体・人物を選定 ・ 連携の形態（共催、後援など）についても検討 ・ 伝承活動を実施する主体となる団体・人物の意識向上が図られることも重要であり、授業実施前に意識向上を図ることを検討する。
	・ 実施日程、場所、回数の決定	・ 複数回実施するものについては、実施回数と流れ、各回の内容についても検討 ・ 開催場所を考慮に入れた開催時間を設定
	・ 伝承手法の検討	・ P. 71～72 の伝承手法の中から使用する手法を検討 ・ 連携できる団体・人物との調整結果を考慮 ・ 複数手法の組み合わせによる伝承活動効果の向上も考慮
② 実施計画書を作成する	・ 実施プログラムの作成	・ 当日のタイムスケジュール、役割分担の検討 ・ 屋外での伝承活動を実施する場合は悪天候時の場合の対処（実施内容の変更等）を検討
	・ 参加方法の検討	・ 自由参加もしくは登録制など
	・ 参加者募集方法の検討	・ 参加者募集方法（機関紙、チラシ・ポスター、ホームページ、関係機関・団体やマスメディアの活用など）の検討 ・ 広報については最低 1 ヶ月前には実施、締め切りも余裕を持って設定 ・ 集客のための工夫（参加費用、景品など）
	・ 資料内容、資料提示方法の検討	・ 資料内容と伝承活動のテーマとの整合性の確認 ・ 資料の見せ方の検討（配布、掲示、PPT 上映など）
	・ 有効性検証方法の設計	・ 検証（確認）したい内容、検証方法（アンケート、ヒアリングなど）の検討 ・ 設問の設計 ・ 参加者に過度の負担を与えないよう考慮 ・ 伝承活動の実施効果を把握するためには事前事後の両方で実施することが望ましい
	・ イベントの取りまとめ方法の検討	・ 振り返りの会の実施、イベント開催結果報告チラシの作成など ・ マスメディアを通じた結果広報 ・ 事後に参加者等に実施結果をフィードバックすることで、伝承内容の定着、さらなる興味換気を狙う

③ 事前確認を行う（確認した内容は実施計画書に反映）	・ 会場の確認	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 予定参加者数、イベントの実施内容（例えば、パネル展示枚数、災害対策資機材の搬入可否など）を考慮し、広さ、映像・音響設備、什器や備品などの面で問題がないか確認</li> <li>・ 冷暖房の設備の状況、悪天候時の対応も考慮</li> <li>・ 会場内での飲食の可否を確認</li> <li>・ 会場の図面を入手。図面がなければ、写真撮影、採寸などにより、後刻会場レイアウト図が書けるような情報を収集</li> <li>・ 会場までのルートまた現地見学会の場合は、現地・ルートなどの確認</li> </ul>
	・ 関係機関との調整	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 実施計画書の内容の確認</li> <li>・ 現地見学会の場合には、必要に応じて、関係機関担当者とともに現地・ルートなどの確認</li> </ul>
	・ 備品の確認	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 会場にある備品と新たに用意する必要のある備品の確認</li> </ul>
	・ 参加者の安全確認	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 雨風対策、暑さ対策の検討</li> <li>・ 必要に応じてイベント参加者に配布する安全のしおりを作成（近くの病院、警察を確認）</li> <li>・ イベント保険の適応など</li> </ul>
④ 実施当日	・ 屋外の場合はイベントの開催可否を決定	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 予め参加者に悪天候時の対応、連絡方法について周知しておく</li> <li>・ その周知方法に基づき、参加者、関係者への連絡を実施</li> </ul>
	・ 会場設営	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 会場レイアウトに基づき設営を実施</li> <li>・ 音響、映像設備については、事前に操作方法を確認</li> <li>・ パネル展などはより多くの人に見てもらうための見せ方の工夫</li> </ul>
	・ 関係者との打合せ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 当日の役割分担、タイムスケジュール、イベント実施上の留意事項の確認</li> </ul>
⑤ 実施後	・ 開催結果の報告	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ HP や広報誌などを通じて開催の様子を参加者や地域へ発信する</li> <li>・ 開催報告は肖像権に留意して作成する</li> </ul>
	・ 次年度以降の取り組みについて協議	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 関係者でイベント結果の振り返りを行うとともに、次年度以降の開催体制、内容、改善点について調整を行う</li> </ul>

### (3) 平成 20 年度の伝承試行実施の実例と計画設計の手順

#### ①平成 20 年度天竜川上流域での伝承実施結果

伝承手法のうち平成 20 年度の天竜川上流域で実施にいたった 3 地区 5 手法の実施結果を以下に示す。5 手法については、伝承手法メニュー一覧のうち、有検討会での議論を考慮し有効性があると思われ、またイベント主催者等との調整を踏まえて決定した内容について実施をおこなった。

なお天竜川上流域では以下の 5 手法について行っているが、その他手法を用いた実施内容についても検討を行い、より地域にあった手法とする必要がある。

また災害教訓伝承を実施していく中では防災というテーマにあまり興味のない人により効果的に伝えていくことが重要となる。そのためには一般の人たちが興味のある「歴史・文化」といった内容を付加させ、興味のある内容から「防災」について触れるような視点が必要である。また災害が自分の生活と隣り合わせであるという認識をイベントに参加して感じてもらうことが大切である。

前項で説明したように災害教訓伝承実施の最終目標は有事の的確な判断・行動が出来るようになることである。そのためには、過去の災害や伝承などの知識を伝えるだけではなく、災害時にどのように行動するかを参加者に考えてもらうような内容を盛り込むことも重要な視点であると考えられる。今回の実施では、災害教訓伝承授業で防災マップを用いて避難行動について考えてもらう内容を行っているので参考にして頂きたい。

表 13 伝承実施結果のまとめ

地域 イベント名称	伊那市地域			駒ヶ根市～中川村地域	飯田市地域			
	災害教訓伝承授業	災害教訓伝承講座		天竜川の治水・洪水の伝承遺構見学会	災害教訓伝承パネル展示		天竜川防災カフェ	
		公民館連絡協議会 合同研修会	富県公民館歴史の 散策【予定】		赤十字奉仕団大会	飯田市安全大会		
1. 実施主体	・伊那小学校	・上伊那公民館連絡協議会	・富県公民館	・天竜川上流河川事務所	・飯田市	・飯田市	・飯田市美術博物館 ・天竜川上流河川事務所	
2. 連携団体等 (検討会事務局以外)	・織井代表(三峰川みらい会議) ・伊那市 ・災害体験者	—	—	・北澤信州大学名誉教授 ・中川村教育委員会 ・高森町歴史民俗資料館	—	—	・笹本信州大学教授 ・松島顧問(飯田市美術博物館) ・いいだFM	
3. 実施年月日	・平成20年11月～平成21年2月、延べ●回	・平成21年2月12日	・平成21年3月14日	・平成20年12月5日	・平成20年10月10日	・平成20年12月20日	平成20年11月29日	
4. 実施場所	・伊那小学校、災害教訓伝承現場	・伊那公民館	・伊那市近郊(災害の痕跡が残る場所)	・天竜川の河原(中川村、豊丘村、高森町)	・飯田市文化会館	・飯田市文化会館	・飯田市美術博物館	
5. テーマ・内容	・総合学習及び教科学習のテーマに「治水」「防災と社会」などを取り上げた授業を実施	・公民館の関係者を対象とした「天竜川の歴史と伝承」をテーマにした研修会および公民館講座を利用した現地見学会(予定)の実施		・理兵衛堤防や惣兵衛堤防などをめぐる見学会を開催し、実物を見ることにより災害教訓を伝承	・自治体で行われている防災イベントと連動して、防災に興味のある人たちに過去の災害について認識してもらう活動を実施		・防災に興味のない人たちが集まる場所で気軽に立ち寄れる防災イベントを開催	
6. 訴求対象 (参加人数)	子ども	◎(3～6年各約30名)					◎(約20名)	
	子育て世代・働き盛り世代・中高年層	△ ※家庭での話し合い		◎(予定50名)		◎(700名)	◎(約15名)	
	地域リーダー		◎(約50名)		◎(34名)			
7. 伝承手法 (ツール)	1)学習・教育	●(授業)						
	2)書物、出版物		●(災害教訓伝承小冊子)	●(災害教訓伝承小冊子)		●(災害教訓伝承小冊子)	●(災害教訓伝承小冊子)	
	3)紙芝居・カルタ等						●(カルタ)	
	4)聴講型イベント	●(災害体験談、防災対策) ※授業内で実施	●(災害体験談)					●(災害体験、伝説)
	5)野外体験型イベント	●(現地見学) ※授業内で実施	●(現地見学)	●(現地見学)	●(現地見学)			
	6)展示型イベント		●(パネル展示)			●(パネル展示)	●(パネル展示)	●(パネル展示)
	7)ビデオ・映画等	●(災害状況) ※授業内で実施	●(災害体験談)			●(災害体験談)	●(災害体験談)	
	8)マスメディア							●(いいだFM)
8. 期待した効果	無関心→気づき	★(低学年、高学年)	★	★			★(午後の部)	
	気づき→正しい理解	★(高学年)	★	★	★	★	★(午前の部)	
	正しい理解→的確な判断・行動				★			
9. 効果計測手法	・低学年:感想文、壁新聞などの学習成果 ・高学年:アンケート調査(事前・事後)	・アンケート調査	・アンケート調査	・アンケート調査 ・イベント参加者の感想(振り返りの会)	・アンケート調査	・アンケート調査	・アンケート調査	

## ②イベントごとの実施計画設計手順

前述した伝承実施の実績に基づき、5手法のイベントごとに実施計画設計の手順を以下に示す。他地域で伝承実施を行う際には、この手順を参考にしながら、内容の組み立てを行いつつ、地域固有の条件や情報を加味することが必要になる。

### ①災害教訓伝承授業

小学校での授業を想定しており、総合学習と教科学習（理科・社会など）の2パターンの手順を示す。総合学習での計画上の注意点、手順は以下の通りである。

【総合学習】 災害教訓伝承授業（総合学習）の実例 資料編 7-1 【3年生】【4年生】参照

- ・授業の進行は担任の先生にお任せし、外部講師として授業に参加する。
- ・テーマを与えるのではなく、活動していく中で子ども達に見つけさせる。
- ・総合学習の基本的な考え方は子ども達の自主性を重要としているので、子ども達が気づいたことから授業内容を展開するので、当初計画していたものから変更になる可能性がある。
- ・授業の後には必ず振り返りの会を設け、授業の中で分かったことや疑問に思ったこと、次回に学びたいことを整理しておく。

①学校全体で行われている総合学習の中で、今回のテーマに合致しそうなクラスをピックアップしていただく

②担当の先生自身にも災害教訓伝承の必要性などを事前に説明し、意識の向上を図る

③年間で行われている総合学習のテーマに「災害教訓伝承」内容を盛り込めるかどうか、総合学習の年間計画を基にその可能性について先生と調整／どのような流れで災害教訓伝承につなげることが可能か先生の方でも流れを考えていただく

④クラスの雰囲気や授業の様子を把握するために総合学習の事前見学

⑤子ども達の「気づき」に基づき授業が展開するように全体の流れを作成

⑥授業回数と各回の内容、使用する伝承素材をまとめる  
※授業の内容は出来るだけフィールドワークを伴ったものとし、写真や映像など視覚的に知識を醸成できるものを用いる

⑦各回の講師役について連携する機関と調整

⑧授業に使用する資料の作成

⑨事前事後で災害に対する意識を把握するためのアンケート作成  
※総合学習の場合は一連の授業の中でアンケート実施が難しい場合もあるので、その場合は実施後のアンケート等に対応する

⑩フィールドワークを伴う場合は児童の安全確認

⑪授業前日に先生から明日の伝承授業について生徒に説明してもらい、意識を高める

**⑫授業実施**

※授業の進行は先生にお任せし、授業の最後に振り返りの時間を設けてもらう

⑬授業を振り返って壁新聞や感想文に学んだ内容を取りまとめる

⑭先生に授業の感想や今後の改善点をヒアリングする

⑮クラスの中や学校全体で発表会を行う

※家族や地域の人にも参加してもらい、子ども達から地域へ広がるような工夫を行う

【教科学習】災害教訓伝承授業（教科学習）の実例 資料編 7-1 【5年生】【6年生】参照

- ・ 確実な意識の変化をねらう場合には、主導的に授業の組み立てを行える教科学習も有効である。
- ・ 授業の宿題という形で家に課題を持ち帰ってもらい、家族で考えてもらうことにより親の防災意識の向上を行う想定をしておく。
- ・ 同じ小学生を対象とする場合にも低学年と高学年で同様の内容を扱うのではなく、高学年の場合には地域リーダーとして活躍してもらうための内容とする。

①各学年の教科学習（理科・社会）の年間テーマを調べる。

②担任教諭と教科学習のテーマと「災害教訓伝承」をどのように組み合わせるのか調整

③授業の全体の流れ、災害に対する意識をどこまで変化させることを目標とするのか検討

④授業回数と各回の内容、使用する伝承素材をまとめる  
※使用する素材は出来るだけ写真や画像、地物、お話などを利用して子どもたちに伝わりやすい内容とする  
※的確な判断・行動にまで意識を変化させる場合のツールとして防災マップ等が有効である

⑤各回の講師役について連携する機関と調整

⑥授業に使用する資料の作成

⑦事前事後で災害に対する意識を把握するためのアンケート作成

⑧フィールドワークをとまなう場合は児童の安全確認

⑨授業前日に先生から明日の伝承授業について生徒に説明してもらい、意識を高める  
※前回の授業で宿題を出していた場合は、前日に先生から確認していただく。

⑩授業実施  
※授業前には今日（前回）の流れを説明、授業後には振り返りを行う

⑪最終授業ではこれまでを振り返って壁新聞や感想文に学んだ内容をとりまとめる

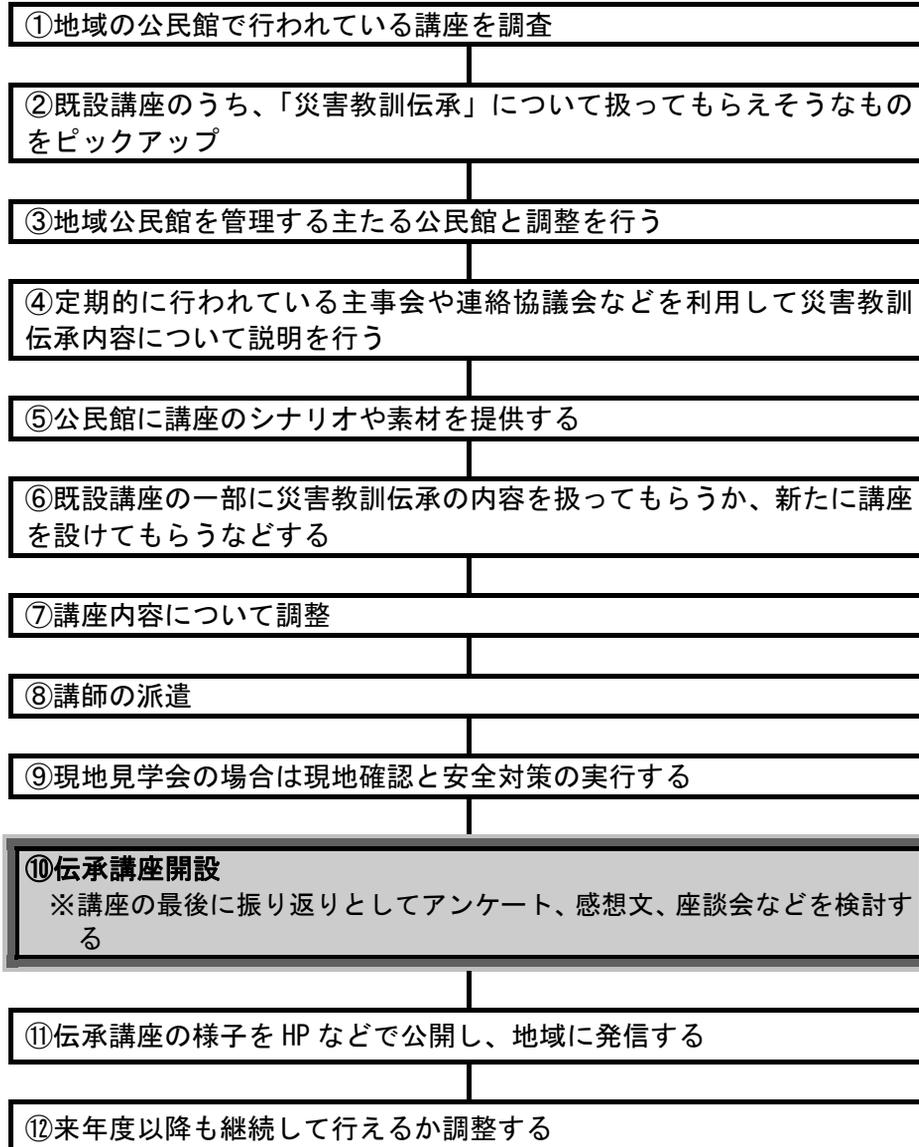
⑫クラスの中や学校全体で発表会を行う  
※親や地域の人にも参加してもらい、壁新聞を作成した場合などは学校や役所などに掲示し広く結果を公開する。

## ②災害教訓伝承講座

公民館の関係者を対象にした「天竜川の歴史と伝承」をテーマにした研修会および公民館講座を利用した現地見学会（予定）の計画上の注意点、手順は以下の通りである。

### 【研修会→公民館講座】災害教訓伝承講座の実例 資料編 7-2 参照

- ・公民館の館長や主事に対しての研修会の場合、今後いかに災害教訓伝承講座につながっていくかが重要なポイントになる。そのために、災害教訓伝承を行う必要性と、公民館の講座でそれを行う場合にどのような方法が有効であるか分かるように説明する。
- ・公民館の講座ですぐに使えるようなツールを提供し、自由に使っていただけるような仕組みを作る。
- ・災害教訓伝承活動を行っている背景の説明が必要である。

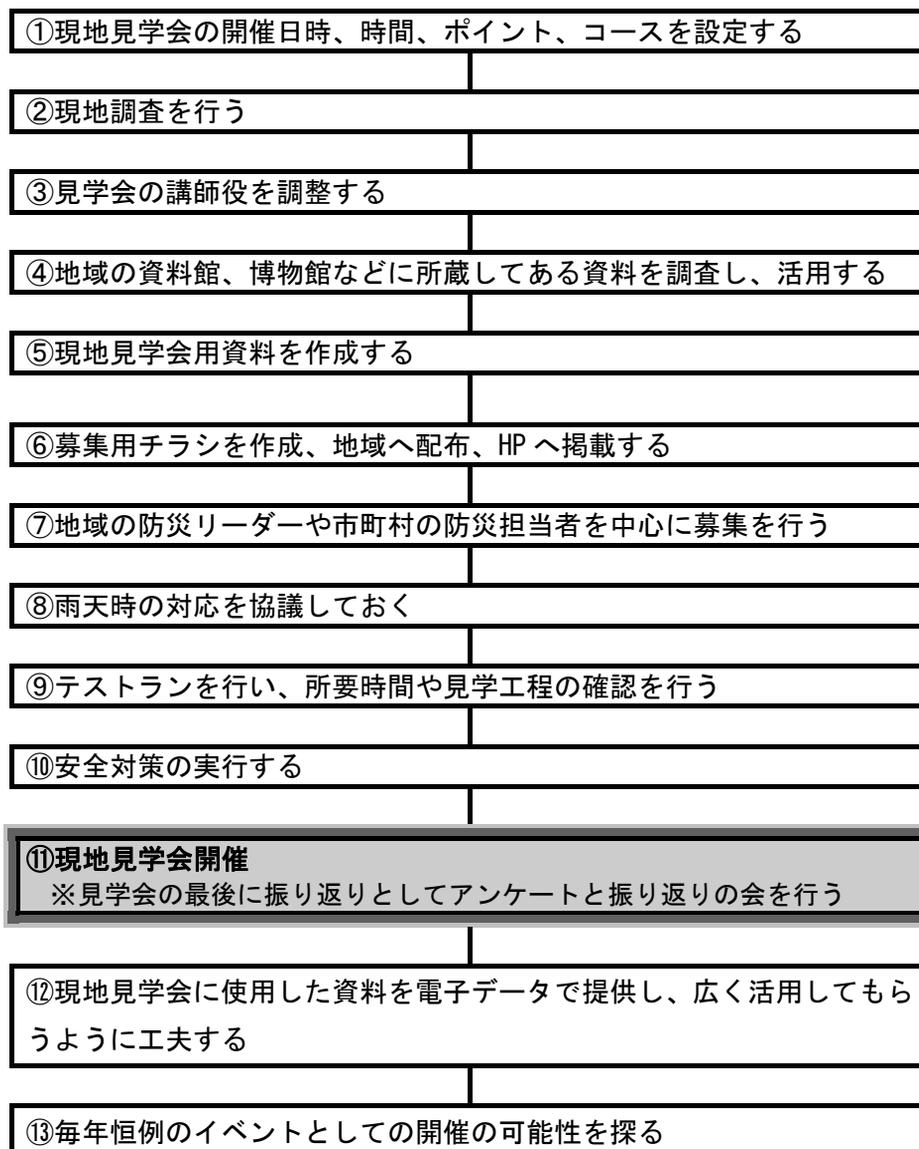


### ③伝承遺構見学会

理兵衛堤防や惣兵衛堤防など地域に残る遺構をめぐる見学会の計画上の注意点、手順は以下の通りである。

#### 伝承遺構見学会の実例 資料編 7-3 参照

- ・ポイントをしぼったコース設定、訴求対象に合わせたコース内容の設定を行う。
- ・防災意識が「的確な行動・判断」にまでいたったかどうかの確認を取るための工夫。
- ・参加者への説明方法（文書、絵、映像など）の選択。
- ・雨天時にバスの中からも確認できる見学ポイントを用意しておく。
- ・天候を考慮し、雨天時と晴天時で見学ポイントの時間配分を変更する。
- ・より専門的な内容については、口頭説明だけでは分かりにくいので、会の終了後にも確認できる説明資料を用意しておく。
- ・同じ時期に継続してイベントを実施することにより、地域のイベントとして認識をしてもらう。



#### ④災害教訓伝承パネル展示

市町村等で行われている防災啓発イベントと連動して、過去の災害に対する周知を図るパネル展における注意点、手順は以下の通りである。

##### 災害教訓伝承パネル展示の実例 資料編 7-4 参照

- ・短時間で大勢の人に内容を伝えるための工夫（パネルの見せ方、会場レイアウトなど）。
- ・参加者の興味を引くには、災害の写真などを多く掲示する必要がある。
- ・パネルの内容としては、過去の災害概要や災害に関する伝説・昔話、災害体験談、防災知識を身に付けることの出来るような内容を検討する。
- ・過去に災害体験をしている参加者が多いような場合は、過去の災害写真などを多く用い昔の経験を思い出してもらい、ヒアリングするような場を設けるなどして訴求効果を高める。
- ・主催者との連携を強くし、パネル展示以外にもステージでの発表に少し時間を頂くなどの工夫により、さらに理解を深める。
- ・他イベントとの連動企画であるため、しっかりとした時間が確保できない場合は伝えたい情報を冊子やチラシにまとめて配布し、イベント後に見てもらおうことが有効であると思われる。

①地域の市町村で行われている防災イベントを調査する

②防災イベントと連動できないか主催者と調整する

③想定参加者の属性を調べ、パネル内容を検討する

④パネルの作成を行う

⑤パネル以外に可能な手法を調整する

※イベントの主だった内容がステージでの発表の場合は、ステージで内容を紹介する時間をもらえないか調整する

⑥主催イベントの開催情報をHPに掲載する

⑦配布資料の検討を行う

⑧会場確認を行い、パネルの見せ方を工夫する

⑨アンケートの作成

⑩パネル展開催

※パネル見学者にアンケートを行い、アンケート回答者にはおはなしマップの提供などを行う

⑪毎年恒例のイベントとしての開催の可能性を探る

## ⑤防災複合イベント（防災カフェ）

市町村等で行われている防災啓発イベントと連動して、過去の災害に対する周知を図るパネル展における注意点、手順は以下の通りである。

### 防災カフェの実例 資料編 7-5 参照

- ・休みの日に人が集まりやすい場所、時間を考慮に入れ、イベント開催の場所や時間を考える。
- ・参加者に内容が伝わったかどうか、アンケート以外に感想をインタビュー形式でヒアリングするなどの工夫が必要である。
- ・災害おはなしの朗読は、ただ聞いているだけでは参加者が退屈してしまうのでイメージ画像や話の内容を映像として流すなど工夫が必要である。
- ・防災クイズの内容は子ども達だけでも分かるように、少し平易な内容とする。
- ・伝承カルタは内容が難しく子どもたちに伝わりにくいので、子供用には視点を変えて少しわかりやすい内容とする。
- ・家族連れを対象にする場合、家族で楽しめる内容にするべきであるが、家族で防災について話すきっかけとなるように工夫が必要である。
- ・家族連れが集まるような他のイベントとの連携。

#### ①防災イベントの内容を考える

※いくつかの手法（災害おはなし、防災クイズ、伝承カルタなど）を複合的に用いるのか、災害おはなしなどの単一内容とするのか

#### ②防災イベントを開催する日時、場所を検討する

※休みの日に開催する場合は人が集まりやすい場所、時間を検討する

#### ③会場確認を行い、レイアウトを検討する

#### ④共催が可能な団体を検討する

#### ⑤募集用チラシを作成、地域へ配布、HPへ掲載する

#### ⑥関係者との事前打合せを行う

#### ⑦アンケートの作成

#### ⑧防災イベント開催

※参加者には感想のヒアリングやアンケートを行う

#### ⑨実施結果をHPなどにより地域へ発信する

#### ⑩毎年恒例のイベントとしての開催の可能性を探る

## 5. 伝承活動の有効性の確認

継続的な伝承活動には実践した伝承手法の有効性を検証し、訴求対象や手法を見直し、個々の地域にあった伝承手法へと次年度以降改善していくことが望ましい。そのための有効性検証方法の一例として今回の伝承活動の際に行ったアンケート調査を基本とする手法を以下に示す。

### 5-1 有効性検証のねらい

伝承手法の有効性検証の目的は、以下の5項目に分類することができる。

- ①災害教訓を伝承するという目的を達成したかどうかを確認する
- ②個々の伝承手法の強みと弱みを確認する
- ③個々の伝承手法の望ましい訴求対象を見極める
- ④個々の伝承手法の実施内容の妥当性を確認する
- ⑤将来的な伝承活動の継続に向けた課題を確認する

今回の検討会における有効性検証では、①と②の目的を達成することに重点を置いて内容を検討した。③、④については個々の伝承手法の問題点を把握し、改善点を抽出するために扱った。また、伝承手法実施が1度きりのイベントとならないように継続して行われるための課題、さらに定期的に繰り返し行われる可能性を確認することも重要な視点として扱った。

### 5-2 有効性検証にあたっての基本方針

今回の伝承手法の有効性検証方法のポイントを以下に示す。

#### ○主に参加者アンケートによる手法を実施

有効性検証の方法としては、被験者へのアンケートやヒアリング等により把握することが考えられるが、被験者に対してより負担が少なく、効率的な意見収集が可能なアンケート方式を基本に有効性の検証を行った。なおアンケートの実施が難しい場合には、参加者へのヒアリング、感想文の記入、主催者・運営スタッフによる振り返りも含めて有効性の検証を行った。

#### ○アンケートは極力簡易なものとなるよう設計

上述したようなイベントの特徴を踏まえ、アンケートの回収率や協力者の負担を考慮し、アンケートは極力簡易（選択式回答を多く）で、分量の少ないもの（A3判1枚程度）として設計した。

#### ○アンケートは継続的に実施し、経年で傾向を図る

有効性の検証については伝承実施前後での意識の変化、さらに伝承実施からしばらく時間が経過した後の意識についても把握し、知識の定着が行われているか把握する必要がある。アンケートは可能な限り継続的に実施し、経年で傾向を図るようにする。

## (1) アンケートの設計

アンケートの設計は以下の点に配慮して行う。

### ○アンケート実施のタイミング

- ・実施するタイミングとして 1)事前、2)事後の 2 回行うことを基本\*とし、伝承実施による知識や行動の変化を計測する。
- ・見学会やパネル展のように 1 回きりのイベントで実施前後でのアンケート調査が難しい場合には、実施後にイベント自体の理解度と防災意識を確認する内容とする。

※アンケートは可能な限り継続的に実施し、イベント実施後しばらく時間が経過したのちにアンケートを実施することで、参加者への災害教訓の浸透度合いを計測することが可能となる。

### ○アンケートの構成

- ・被験者の災害に対するスタンスを把握するため、災害に関する知識や有事の対応に向けた備えについて調査する。
- ・イベント全体の実施内容に対する理解度の状況を調査する。
- ・将来的な伝承活動の継続に向け、興味のある伝承内容（素材）やあまり知らない伝承内容（素材）について確認する。
- ・伝承体験をきっかけにして今後他の人へ災害教訓を伝承していく可能性について調査する。
- ・伝承手法の望ましい訴求対象について検討するために、アンケート回答者の年齢、性別等の属性についても質問を行う。

### ○調査票

- ・アンケート対象者が回答しやすいよう、選択形式の設問を基本とする。
- ・イベント内容に対する理解度等については、アンケート後には各手法について細かい分析が出来るよう、5段階評価（選択式）により意識を把握する。

## (2) アンケートの概要

アンケートの内容は基本的に以下の項目に合わせて作成し、訴求対象の違いによって設問の内容や文章表現を工夫した。アンケート調査表の一例として、訴求対象別に2種類、また小学生へのアンケートは実施前・後で使用した調査票を以下に示す。

表 14 アンケート概要

項目	内容
災害に関する知識や対応	今までに災害を経験したことがあるか この地域で起きた過去の災害を知っているか (分かったか) 防災訓練に参加しているか 家族で災害に関する話をしているか (するようになったか) 災害に対する準備をしているか (するようになったか) 避難場所を知っているか (分かったか) 災害時に十分な対応ができるか (できるようになったか) 災害時にどのような避難行動をとるか (今後とるか)
イベント内容の理解度	イベントの内容を理解できたか イベントに対する感想、良い点・悪い点 個々の伝承内容 (素材) を理解できたか
伝承内容 (素材) への興味関心	興味ある伝承内容 (素材) は何か あまり知らない伝承内容 (素材) は何か
災害教訓伝承への関与	今後災害教訓を伝承する立場として携わりたいか



# ぼうさいいしき 防災意識事前アンケート調査

今からみなさんの**ぼうさいいしき**防災意識についてアンケートをするので、下の質問に答えてね。

※提供していただいた個人情報**こじんじょうほう**はアンケート調査以外の目的では使用いたしません。



## I. みなさんの**さいがい**災害に対する**いしき**意識や**たいおう**対応についてお聞きします。

**問1** 今までに災害を経験したことがありますか？

あてはまるもの1つに○をつけてください。

1. ある                      2. ない

**問2** 地域で過去におこった災害を知っていますか？

それぞれあてはまるもの1つに○をつけてください。

- ①三六災害                      1. 知っている                      2. 知らない  
②五八災害                      1. 知っている                      2. 知らない  
③平成18年7月災害                      1. 知っている                      2. 知らない  
④その他知っている災害を書いてください (                      )

**問3** 家族の中で災害に関する話をしたことがありますか？

あてはまるもの1つに○をつけてください。



よくしている      している      少ししている      あまりしていない      していない

**問4** 家族で災害に対する**じゅんび**準備（非常食や非常持ち出し袋の用意）を

していますか？

あてはまるもの1つに○をつけてください。



十分している      している      少ししている      あまりしていない      していない

**問5** 災害が起きたときに避難する場所を知っていますか？

あてはまるもの1つに○をつけてください。

1. 知っている                      2. 知らない

**問6** 災害が起きた時にどのような行動をとりますか？

あてはまるものに1つに○をつけてください。

1. 自分で避難所に避難する      2. 避難するように言われたら避難する  
3. 分からない      4. 避難したくない      5. その他 (                      )

## II. みなさんの**きょうみ**興味があることをお聞きします。

**問6** 次の項目のうち、興味があるもの・もっと知りたいと思うことは何ですか？

次の中からあてはまるもの全てに○をつけてください。

1. 地域で起きた過去の災害                      2. 水防技術などの知恵  
3. 災害を体験された方のお話                      4. 天変地異や災害を由来とする信仰や祭り  
5. 災害に関する歌や劇                      6. 災害に関する伝説や昔話  
7. 気象情報（雨の降る量や川の水位、前兆現象など）  
8. その他 (                      )

**問7** 「防災と社会」の授業でこんなことを教えてほしいなということを

自由に書いてください。

## III. 最後にあなたご自身のことについてお答えください。

お名前 (                      )      性別 (男性・女性)      学年 ( 5年      秋組 )

お住まい ( 伊那市                      地区)

ありがとうございました！！





### 5-3 有効性の検証

有効性の検証は以下のポイントを考慮に入れて行った。検証結果例については次項より紹介する。また今回は単年度で実施を行ったため伝承実施前後、さらに時間が経過してからの意識把握を一部の実施活動でしか行えていないが、意識の定着が図られたかどうか継続して検証を行う必要がある。

表 15 有効性検証の視点

有効性検証の視点	まとめのポイント
イベント参加の内容理解度	①災害教訓を伝承するという目的を達成したかどうか ・ イベントの参加により内容を理解し、災害教訓を伝承できているかどうか。
伝承の素材（内容）の理解度	②個々の伝承の素材（内容）の強みと弱みを確認する ・ 災害教訓をより理解してもらうために有効な手法は何か検証する。 ・ 手法の有効性の違いが生じた要因を検証する。
各手法の理解度 興味がある災害教訓伝承 あまり知らない災害教訓伝承	③個々の伝承手法の望ましい訴求対象を見極める ・ 個々の伝承手法がどのような訴求対象に有効であるのか検証する。 ・ より有効な伝承実施を行うにはどのような訴求対象にどのような手法が望ましいのか判断する。
イベントの理解度と各伝承手法の理解度の関係	④個々の伝承手法の実施内容の妥当性を確認する ・ イベントの理解度が高くなる、つまりより効果的に伝承実施を行うためには、どのような手法を用いることが有効であるか検証する。
災害教訓伝承する立場として携わりたいかどうか	⑤将来的な伝承活動の継続に向けた課題を確認する ・ 今後伝承活動を継続させていくためには、参加者に災害教訓伝承する立場として関わってもらうことも重要である。そのためにはどのような伝承実施が有効であるか検証する。

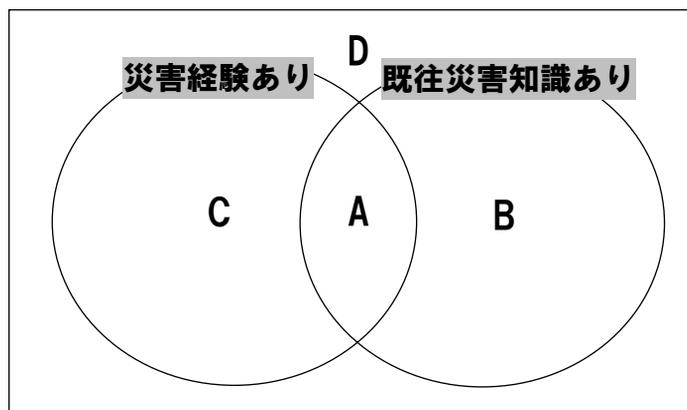
## (1) 参加者の防災知識・行動レベル

### ①参加者の防災知識・行動のレベル

伝承手法の有効性検証を行うに際し、イベント参加者の災害に対する意識・行動レベルを以下のように定義した。

#### 【災害知識レベルの設定】

災害知識を災害経験の有無と既往災害知識の有無により以下のように区分した。「災害知識のレベル」の高低はおおむね **A>B>C>D** と判断する。



- A: 災害経験ありかつ既往災害知識あり
- B: 災害経験なしかつ既往災害知識あり
- C: 災害経験あり、既往災害知識なし
- D: 災害経験なし、既往災害知識なし

図 49 災害知識レベルの区分

※災害経験は設問 1、既往災害知識は設問 2 の回答により判断した。

#### 【災害に対する意識レベルの設定】

上記で設定した「災害知識レベル」と防災訓練の参加頻度（問 4）のクロス集計により「災害に対する意識・行動レベル」を表 16 災害に対する意識レベルのように区分した。

災害に対する意識・行動レベルは **I 無関心**→**II 気づき**→**III 正しい理解**→**IV 有事的確な判断・行動**の 4 段階で高くなるものと設定した。

表 16 災害に対する意識レベル

		災害への備え（防災訓練の参加頻度）				
		毎回参加している	時々参加している	参加したことはある	行われていることは知っている	行われていることを知らない
災害知識 (図 48)	A	IV 的 確な判断・ 行動レベル	III 正しい理解			
	B				I 無関心レベル	
	C		II 気づきレベル			
	D					

## ②検証結果例

イベントごとにアンケート回答者の意識・行動レベルを分析した。以下のとおり今回の訴求対象の各層の意識・行動レベルとして妥当な区分とみることができた。

- ・災害に対する意識レベルは小学生で最も低い
- ・赤十字奉仕団大会参加者が最も高いレベルにあると判断できる。これは災害時に赤十字奉仕団として活動する役割を担っており、平常時から災害に対する意識が高いと考えられる。
- ・上伊那公民館研修会や遺構見学会参加者でも高いレベルであると判断できるが、これは公民館の館長や主事といった地域のリーダーを担うべき人や防災リーダーが参加していることが影響していると考えられる。

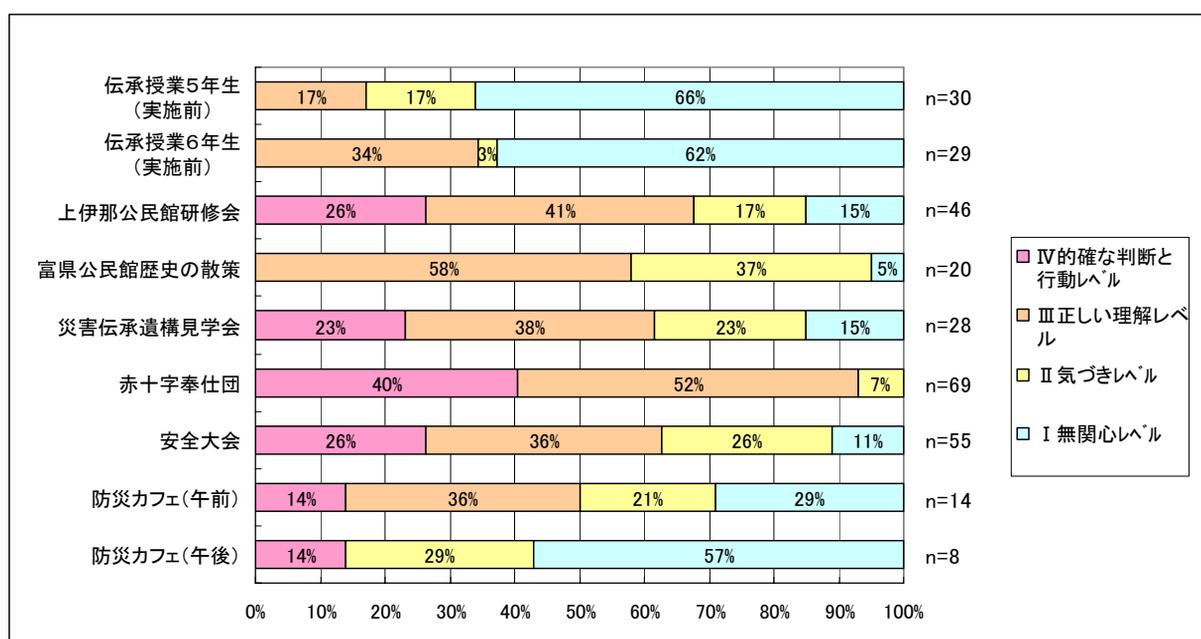


図 50 アンケート回答者の災害に対する意識レベル

## (2) 災害教訓伝承の理解度について

### ①検証方法

災害教訓伝承による理解度はアンケート、感想文、参加者へのヒアリングにより把握を行う。アンケートではイベントに参加して理解できたかどうかを5段階評価により把握する。

### ②検証結果例

実践でのアンケート結果の一例を以下に示す。その他の結果は参考資料-6に掲載する。

- ・「よく理解できた」と「やや理解できた」をあわせた割合は、全てのイベントで70%以上と高くなっている。
- ・中でも伝承授業、上伊那公民館研修会、富県公民館伝承講座では100%と高い結果となった。
- ・「よく理解できた」に着目すると、伊那小学校で最も高く、3回の授業を重ねることにより、より理解度が高くなったと考えられる。

イベント名称	内容	訴求対象	伝承手法	人数	アンケート結果
災害教訓伝承授業	防災と社会をテーマにした授業	子ども	・授業 ・災害体験談 ・現地見学会	n=30	
上伊那公民館研修会	災害教訓伝承講座の研修会、現地見学会	地域リーダー	・おはなしマップ ・現地見学 ・伝承ビデオ	n=46	
富県公民館伝承講座	災害にまつわる遺構を巡る見学会	中高年層	・おはなしマップ ・現地見学会	n=20	
伝承遺構見学会	治水・洪水の遺構施設をめぐる見学会	地域リーダー	・おはなしマップ ・現地見学会	n=28	
赤十字奉仕団大会	災害教訓伝承パネル展	中高年層	・おはなしマップ ・災害教訓伝承パネル	n=69	
安全大会	災害教訓伝承パネル展	中高年層	・おはなしマップ ・災害教訓伝承パネル ・伝承ビデオ	n=55	
天竜川防災カフェ(午前)	防災イベント	中高年層	・おはなしマップ ・朗読 ・災害教訓伝承パネル	n=14	
天竜川防災カフェ(午後)		子ども・子育て世代	・おはなしマップ ・朗読 ・災害教訓伝承カルタ	n=8	

0% 20% 40% 60% 80% 100%

よく理解できた    
  やや理解できた  
 どちらでもない    
  あまり理解できなかった  
 理解できなかった

### (3) 訴求対象別の望ましい伝承手法について

#### ①検証方法

訴求対象別の望ましい伝承手法を検証するために、「興味ある災害教訓伝承」「あまり知らない災害教訓伝承」の結果とその結果を属性別（性別、年齢）に集計した結果の傾向から訴求対象別の望ましい伝承手法を検討する。

#### ②検証結果例

実践での検証結果の一例を示す。その他の結果は参考資料-6 に掲載する。

##### ○訴求対象別の望ましい伝承手法

各イベントの結果を合わせて（総数 300 名）、属性別の「興味ある災害教訓伝承」「あまり知らない災害教訓伝承」についての傾向を把握した。

##### ○災害教訓伝承として有効な手法について

- ・興味ある災害教訓伝承としては、「災害に関する伝説や昔話」「災害体験談」「過去の災害」「水防技術などの知恵」などが高い結果として出ている。
- ・あまり知らない災害教訓伝承としては、「信仰や祭り」「災害に関する歌や劇」「水防技術などの知恵」となっている。
- ・「水防技術などの知恵」「災害に関する伝説や昔話」についてはあまり知らない内容ではあるが、興味があるという結果が出ており、災害教訓伝承の内容として必要な内容であると考えられる。

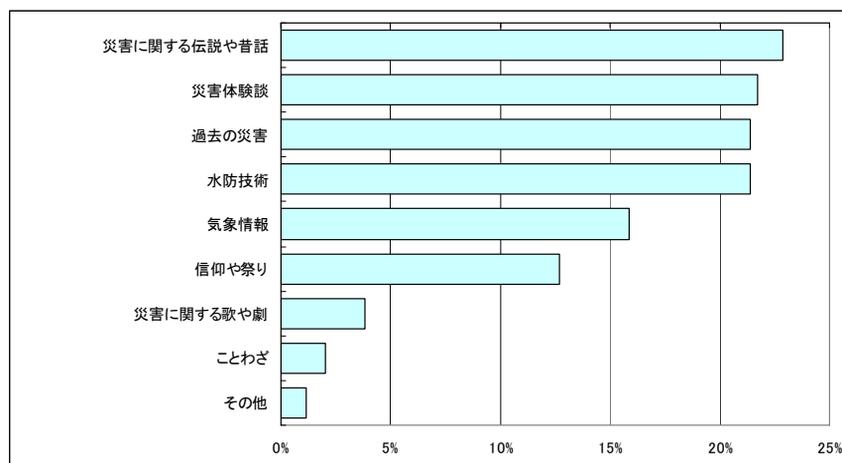


図 51 興味ある災害教訓伝承(全体)

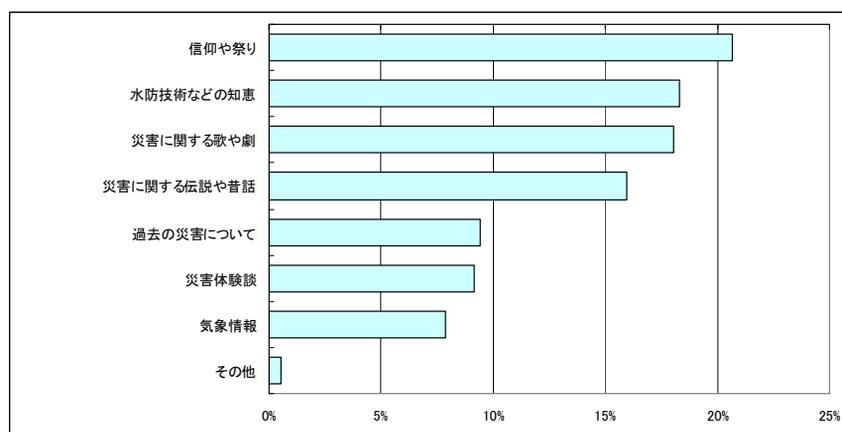
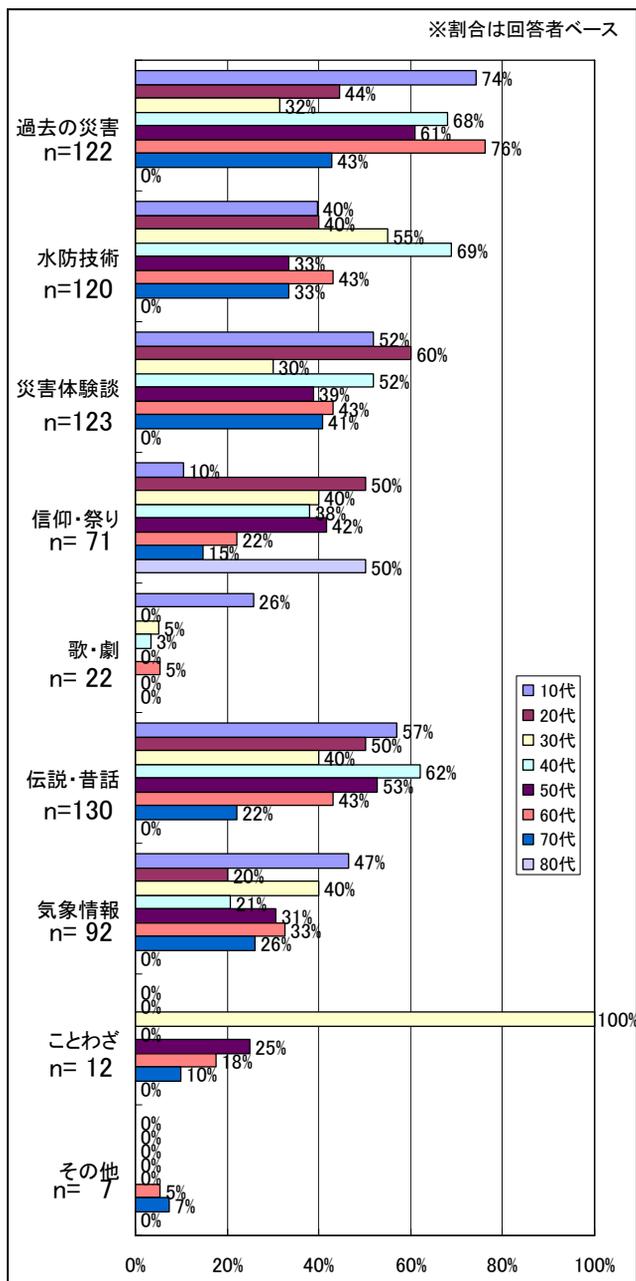


図 52 あまり知らない災害教訓伝承(全体)

○年代別でみた災害教訓伝承への関心

- ・「過去の災害」「災害体験談」「災害に関する伝説・昔話」では概ね年齢が低いほど興味があり、知らない内容という傾向がみられ、若年層への伝承内容として有効であると考えられる。これは過去の災害経験がなく、経験があったとしても記憶にない世代にとって体験談というのは災害を知るのに分かりやすい内容であるとも言える。
- ・「水防技術」については、30代、40代の関心が高く、これは災害時に身を守る手段など、災害時に自分や家族を守ることに興味があるためと考えられる。
- ・「信仰・祭り」に関しては、どの年代も知らない内容となっており、伝承内容としての可能性がある。



※10代には小学生の回答結果も含める

図 54 年代別の興味ある災害教訓伝承

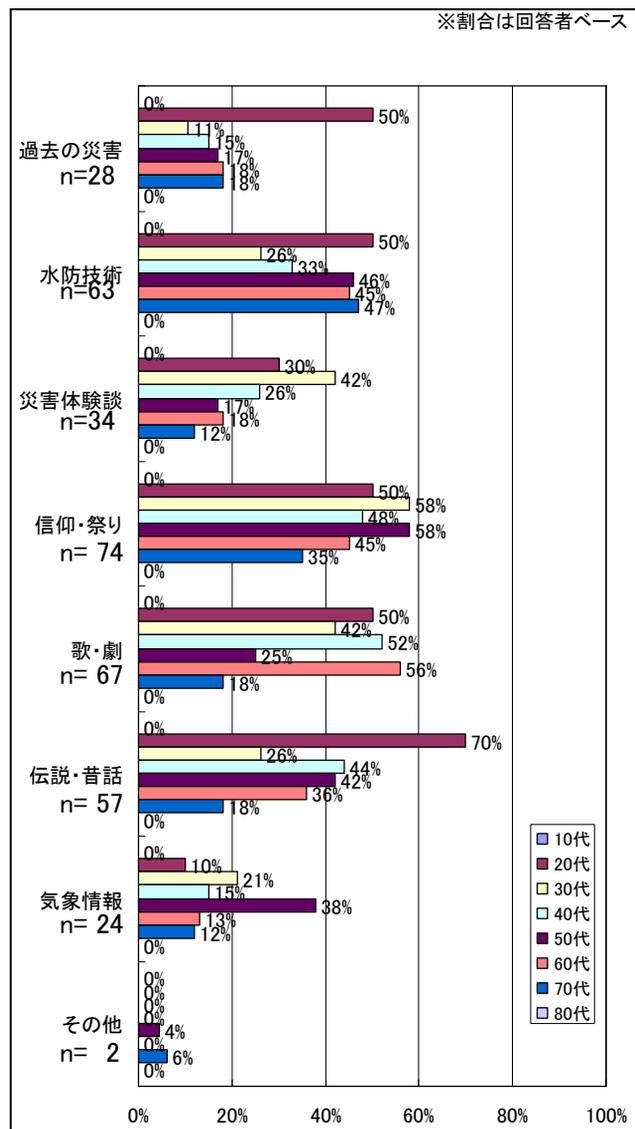


図 53 年代別のあまり知らない災害教訓伝承

#### (4) 課題の抽出

##### ①検証方法

今後災害教訓を他の人に伝える立場として携わってみたいかという質問を行い、その結果を属性別（性別、年齢）に集計した結果から今後災害教訓伝承者として携わる可能性がある人の傾向を見る。また災害教訓を他の人に伝える立場として携わってみたいと回答した人の興味ある伝承内容などから、今後継続した活動としていくための課題を抽出する。

##### ②検証結果例

実践での検証結果の一例を示す。その他の結果は参考資料-6 に掲載する。

○災害教訓伝承者として携わりたい割合

- ・全体の災害教訓伝承者として携わる可能性（以下、災害教訓伝承意向という）は「非常にそう思う」「ややそう思う」を合わせた約7割の人が携わりたいと考えている。
- ・イベント参加をきっかけに災害教訓伝承者となり得る可能性はあると考えられる。

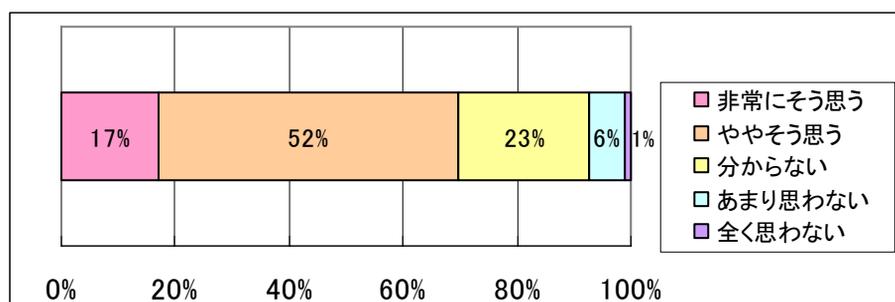


図 55 災害教訓伝承意向

○年代別の災害教訓伝承意向率（災害教訓伝承者として携わりたい割合）

- ・年代別に災害教訓伝承意向の特徴をみると、年齢が高くなるほど災害教訓伝承意向率が高くなるという傾向がみられる。

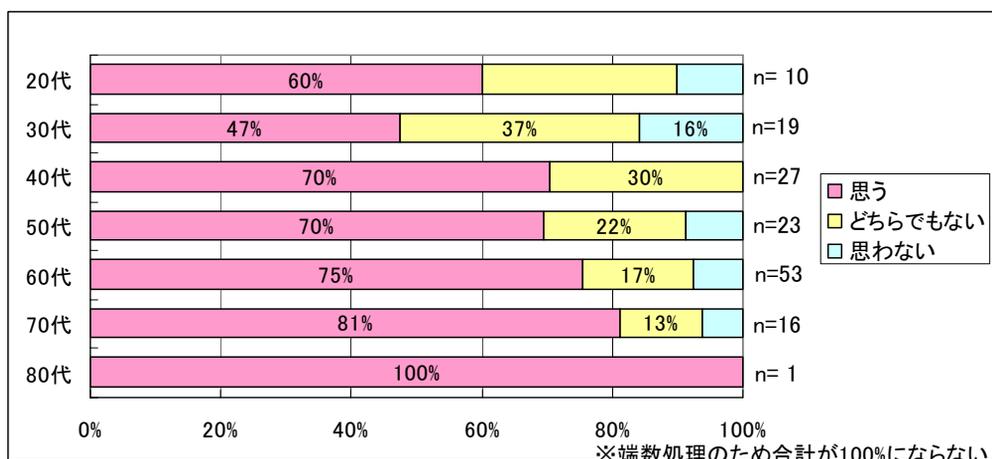


図 56 年代別の災害教訓伝承意向

### ○災害教訓伝承実施がもたらす効果の検証

各イベントに参加して得られた内容に対する理解度とそれぞれの災害教訓伝承意向を比較してみると、イベント内容を「よく理解できた」人の災害教訓伝承意向率は約8割と高い。

イベント内容の理解度が高いほど今後の災害教訓伝承につながると思われ、今回のイベントが災害教訓を伝承する場として妥当であったと考えられる。

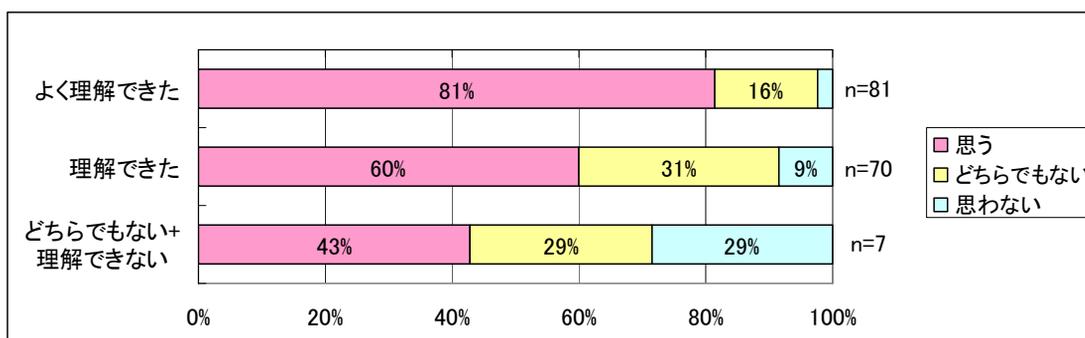


図 57 イベントの理解度と災害教訓伝承意向の関係

## (5) 今後の方向性について

今回実施した有効性検証結果を基に、今後の天竜川上流域における災害教訓伝承活動の方向性をとりまとめた。

表 17 有効性検証結果

目的（まとめのポイント）	結果
①災害教訓を伝承するという目的を達成したかどうか（イベントの参加により内容を理解し、災害教訓を伝承できているかどうか）	<ul style="list-style-type: none"> <li>全てのイベントで理解度は高く、<u>災害教訓を伝承するという目的は達成している</u>と考えられる。</li> <li>伝承授業での理解度が高く、特に無関心レベルには1回きりのイベントより何回かの連続講座で効果が上がると考えられる。</li> </ul>
②個々の伝承手法の強みと弱みを確認する（災害教訓をより理解してもらうために有効な手法は何か）	<ul style="list-style-type: none"> <li>「過去の災害について」では聴講型などの参加者が受身になってしまう手法よりも現地見学会やパネル展など能動的な動きをとまう手法が有効である。</li> <li>「災害体験談」については、ビデオを用いるよりも実際に災害体験者の方のお話を聞くことがより有効である。</li> <li>「災害に関する伝説や昔話」では伝説や昔話をまとめた冊子を配布することに加え、地物の見学やお話の読み聞かせといったことを同時に行うことが有効である。</li> <li>おはなしマップなどの冊子は、家族や親子でのツールとしても期待ができ、冊子の配布により、さらなる掘り下げや別の対象者への広がりも期待できる。</li> <li>「水防技術などの知恵」や「災害に関する伝説や昔話」についてはあまり知られていないが、興味がある内容で災害伝承手法として必要である。</li> <li>災害伝承授業では総合学習の活用以外に、教科学習を利用することも有効である。</li> </ul>
③個々の伝承手法の望ましい訴求対象（個々の伝承手法がどのような訴求対象に有効であるのか）	<ul style="list-style-type: none"> <li>「過去の災害について」「災害体験談」「災害に関する伝説・昔話」は若年層への手法として有効である。</li> <li>「水防技術」については、30代、40代の関心が高く、災害時に身を守る術など身近な内容を伝えることにより有効な手段である。</li> <li>「信仰・祭り」に関しては、どの年代も知らない内容となっており、伝承手法としての可能性がある。</li> </ul>
④個々の伝承手法の実施内容の妥当性（より効果的に伝承実施を行うためには、どのような手法を用いることが有効であるか）	<ul style="list-style-type: none"> <li>イベント参加による内容理解度、各伝承手法の理解度ともに高い結果となっており、個々の伝承手法の実施内容は妥当であったと考えられる。</li> <li>より有効なイベントとするには関係機関との連携を強くして、密な連絡を取ったり、呼びかけの方法を工夫するなどの必要がある。</li> <li>伝承授業では特に高い理解度につながっており、今後他学年や他校に広めていくことが有効であると考えられる。</li> </ul>
⑤将来的な伝承活動の継続に向けた課題を確認する（伝承活動を継続させていくために、参加者に災害教訓伝承する立場として関わってもらうにはどのような伝承実施が有効であるか検証する。）	<ul style="list-style-type: none"> <li>イベント参加をきっかけに災害伝承者となり得る可能性はあると考えられ、イベント参加後に継続的に伝承プログラムに関われるような仕組みづくりが重要である。</li> <li>年代別に災害伝承意向の特徴をみると、年齢が高くなるほど災害伝承意向率が高くなるという傾向がみられ、高齢者層にどのように伝承実施を行い、伝承者として関わるような内容とするのかということが重要である。</li> </ul>

以上の結果より今後の展開について以下にまとめる。

- ・ 今後の量的展開としては、公民館の伝承講座のように、管内の市町村への展開を定着させるための試みが考えられる。具体的には、「伝承内容の解説」「現場見学会」などイベントの開催が考えられ、それらの試みを支えるために「災害伝承の仕組み作り」を行っていく必要がある。
- ・ 伝承の質的展開としては、伝承の情報をまとめたデータベースや、伝承素材として価値のあるデータ・記録を継続的に整理するとともに、新しい情報や貴重な記録を発掘し公開するなどし、質的向上を図ることが考えられる。

## 6. 継続的な活動に向けてのサポート体制

災害教訓伝承は単年度で終わりではなく、次年度以降も引き続き実施していくことが大切である。その際に、今年後実施したようなイベントをどのように継続させていくのか、その実施主体とサポート体制について以下にまとめるので、積極的な活用をお願いしたい。

### ①現場見学会 ※事務所＝天竜川上流河川事務所

内容	<p>激特事業などの現場見学会の開催 (平成 20 年度の実施回数 18 回)</p>
体制	<p>主催 事務所 ← 申し込み → 参加者</p> <p>HP で募集 →</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・現場での説明</li> <li>・資料の提供</li> </ul>

### ②伝承授業

内容	<p>伝承授業の実施 (平成 20 年度の実施回数 9 回)</p>
体制	<p>協力 事務所 ← 申し込み → 主催 小学校 (中学校・高校)</p> <p>HP で募集 →</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・講師（事務所職員、検討会メンバー、災害体験者）の派遣</li> <li>・学習資料の提供</li> <li>・伝承ツールの提供</li> </ul>

### ③防災イベント

内容	<p>市町村等で開催される防災イベントへの協力</p>
体制	<p>主催 市町村 → 協力の依頼 → 協力 事務所</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・飯田市</li> <li>・伊那市</li> <li>・飯田市</li> <li>・美術博物館</li> <li>・図書館</li> <li>・いいだ FM など</li> <li>・災害教訓伝承パネルの提供</li> <li>・写真データの提供</li> <li>・防災イベントへの参加</li> <li>・災害対策車などの展示協力</li> <li>・伝承ツール（ビデオ、カルタ）の提供</li> <li>・HP での開催案内</li> </ul>

#### ④防災講習会

内容	市町村等で開催される防災講習会への情報提供 (水防 DAY、土砂防災月間などでの実施想定)
体制	<p>主催 市町村 団体</p> <p>協力の依頼</p> <p>協力 事務所</p> <p>←</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・講師（事務所職員、検討会メンバー）の派遣</li> <li>・資料の提供</li> <li>・災害体験者の紹介（H19 ヒアリング対象者）</li> <li>・HP での開催案内</li> </ul>

#### ⑤伝承講座

内容	公民館等で開催される講座への資料提供
体制	<p>主催 公民館</p> <p>資料提供依頼</p> <p>協力 事務所</p> <p>←</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・講師（事務所職員、検討会メンバー）の派遣</li> <li>・伝承ツール（おはなしマップ、語りつぐ天竜川）</li> <li>・HP での開催案内</li> </ul>

#### ⑥遺構見学会

内容	市町村等で開催される遺構見学会への資料提供
体制	<p>主催 市町村</p> <p>協力の依頼</p> <p>協力 事務所</p> <p>←</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・伝承ツール（あばれ天竜川おはなしマップ）の提供</li> <li>・講師の紹介 (解説員、検討会メンバー)</li> <li>・写真、資料の提供</li> <li>・HP での開催案内</li> </ul>

#### 【資料・見学会等の問い合わせ】

天竜川上流域災害教訓伝承手法検討会事務局 天竜川上流河川事務所調査課

TEL : 0265-81-6415

FAX : 0265-81-6421

e-mail : tenjyo@cbr.mlit.go.jp